

靈界物語 第四七卷 舍身活躍 戌の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四七卷』愛善世界社

2003(平成15)年08月09日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onidodo.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～

## 目次

序文 じよぶん

總説 そうせつ

第一篇 浮木うきぎの盲龜まうぎ

第一章 アーク燈とう（一―二三四）

第二章 黒士會こくしくわい（一―二三五）

第三章 寒迎かんげい（一 二三六）

第四章 亂癡將軍らんちしやうぐん（一 二三七）

第五章 逆襲ぎやくしう（一 二三八）

第六章 美人草びじんさう（一 二三九）

第二篇 中有見聞ちゆうけんぶん

第七章 醉よひの八衢やちまた（一 二四〇）

第八章 中有ちゆう（一 二四一）

第九章 愛あいと信しん（一 二四二）

第一〇章 震しん土震しん商しやう（一 二四三）

第十一章 手て苦く駄だ女をんな（一 二四四）

第三篇 天國巡覽てんこくじゆんらん

第一二章	天界行 <small>てんかいゆき</small> 〔一二四五〕
第一三章	下層天國 <small>かそうてんこく</small> 〔一二四六〕
第一四章	天開の花 <small>てんかいはな</small> 〔一二四七〕
第一五章	公義正道 <small>こうぎせいだう</small> 〔一二四八〕
第一六章	靈丹 <small>れいたん</small> 〔一二四九〕
第一七章	天人歡迎 <small>てんにんくわんげい</small> 〔一二五〇〕
第一八章	一心同體 <small>いっしんどうたい</small> 〔一二五一〕
第一九章	化相神 <small>けさうしん</small> 〔一二五二〕
第二〇章	間接内流 <small>かんせつないりう</small> 〔一二五三〕
第二一章	跋文 <small>ばつぶん</small> 〔一二五四〕

## 序文

太陽は日本の太陽だ、世界は日本の太陽のお蔭で生きてゐるのだ、それ故日本をヒノモトと云ふのだ。世界を人體に譬へて見ると日本は頭にある、小さいけれども身體全部を支配する腦髓を持つて居る。歐羅巴は手足に當る、それだから汽車、汽船其他便利な機械を發明して足の役目を勤め、また種々の文明利器を發明して手の役目を勤める、又亞米利加は胸に當るから大きい事は大きいが馬鹿である、と云ふやうなことを眞面目に書いてあつた。水戸の會澤伯民といふ儒者の作つた書物新論にかぶれた連中は未だ我國民の中には多少あるらしい。今日はモハヤ斯んな事を云つても通用しない、併し日清、日露の兩戰役に勝利を得てから日本人は益々自負高慢となり、近來の日本人の思想感情の中には、此新論に類した誇大妄想狂が少くないと思ふ。殊に神を信仰する人々の中には著しくこの思想と感情が擡頭してゐるやうに思はれる。西洋は物質文明の國、日本は精神文明の國である、と識者の間には屢々稱へられてゐるが、その精神文明と雖も今日の處では、

西洋に劣ること數等下位にありと言つても可い。物質文明には、泰西人に先鞭を  
つけられ、今又精神文明に於ても彼泰西人の後へに瞠若たるの淺閒しい有様であ  
る。日本は靈主體從と謂つて精神文明即ち神靈の研究には他に優れて居なければ  
ならない筈だ、研究すべき材料も比較的豊富に傳はつて居るのだ。然るに今日の  
我國の學界の趨勢を見れば實に慘澹たるものではないか。又日本は武力に就ては  
殊に自負高慢の度が強く、此武力を以てすれば何事でも意の如く解決し得らるる  
ものと思つて居るものも少くないやうだ。大本の筆先にも「日本の人民は支那の  
戦争にも勝ち又今度の露國との戦争にも勝ちたと申して大變に慢心を致して居る  
が何時迄もそんな譯には行かぬぞよ」と示されてある。油斷をして居ると何んな  
事に成るか分つたものでない。頑迷固陋な國粹論者は何時までも愛國心の誤解を  
して却て我國を滅亡に向はしむるやうな言論を吹き立て、獨りよがりの態度を持  
して居るのは實に國家の爲に悲しむべきことである。この物語も亦決して日本の  
みに偏重したことは述べてない。世界一統的に神示の儘に記述してあるのだ。未  
だ新論的迷夢の醒めない人々は、この物語を讀んで不快に感ずる人もあるであら

うが、併し眞理は石の如く鐵の如く感情や意志を以て枉ぐることは出来ない。神道も佛教も耶教も時代と地方との關係上、表面別々の感があるやうだが、その最奥を極むれば同一の神様の教であることを覺り得らるのである。故に神の道を研究する人は廣き清き偏頗なき心を以て眞面目にかかつて頂きたいものであります。

大正十二年一月八日

王仁識



最上天界即ち高天原には、宇宙の造物主なる大國常立大神が天地萬有一切の總  
 統權を具足して神臨し給ふのであります。そして大國常立大神の一の御名を天之  
 御中主大神と稱へ奉り、無限絶對の神格を持し、靈力體の大原靈と現はれ給ふの  
 であります。この大神の御神徳の完全に發揮されたのを天照皇大御神と稱へ奉る  
 のであります。そして靈の元祖たる高皇産靈大神は、一名神伊邪那岐大神又の名  
 は日の大神と稱へ奉り、體の元祖神皇産靈大神は、一名神伊邪那美大神又の名は月  
 の大神と稱へ奉るのは、此物語にて屢述べられてある通りであります。又高皇産  
 靈大神は靈系にして嚴の御靈國常立大神と現はれ給ひ、體系の祖神なる神皇産靈  
 大神は、瑞の御魂豊雲野大神又の名は豊國主大神と現はれ給うたのであります。  
 この嚴の御魂は再び天照大神と顯現し給ひて天界の主宰神とならせ給ひました。  
 因に天照皇大御神様と天照大神様とは、その位置に於て神格に於て所主の御神業  
 に於て大變な差等のある事を考へねばなりません。又瑞の御魂は、神素盞鳴大神

と顯はれ給ひ、大海原の國を統御遊ばす神代からの御神誓である事は神典古事記、日本書紀等に由つて明白なる事實であります。然るに神界にては一切を擧げて一神の御管掌に歸し給ひ宇宙の祖神大六合常立大神に絶對的神權を御集めになつたのであります。故に大六合常立大神は獨一眞神にして宇宙一切を主管し給ひ嚴の御魂の大神と顯現し給ひました。扱て嚴の御魂に屬する一切の物は悉皆瑞の御魂に屬せしめ給うたのでありますから、瑞の御魂は即ち嚴の御魂同體神と云ふ事になるのであります。故に嚴の御魂を太元神と稱へ奉り、瑞の御魂を救世神又は救神と稱へ又は主の神と單稱するのであります。故に此物語に於て主の神とあるは、かむすさのをおほかみさま神素盞鳴大神様の事でありす。主の神は宇宙一切の事物を濟度すべく天地間を昇降遊ばして其御魂を分け、或は釋迦と現はれ、或は基督となり、マホメツトと化り、其他種々雜多に神身を變じ給ひて天地神人の救濟に盡させ給ふ仁慈無限の大神であります。而して前に述べた通り宇宙一切の大權は嚴の御魂の大神即ち太元神に屬し、この太元神に屬せる一切は瑞の御魂に悉皆屬されたる以上は神を三分して考へることは出來ませぬ。約り心に三を念じて口に一をいふことはならぬ。

いのであります。故に神素盞鳴大神は救世神とも云ひ、仁愛大神とも申し上げ、撞  
の大神とも申し上げるのであります。この靈界物語には産土山の高原伊祖の神館  
に於て神素盞鳴尊が三五教を開き給ひ數多の宣傳使を四方に派遣し給ふ御神業は、  
決して現界ばかりの物語ではありません。靈界即ち天國や精靈界（中有界）や根  
底の國まで救ひの道を布衍し給うた事實であります。ウラル教やバラモン教、或  
はウライナイ教なぞの物語は、大抵顯界に關した事實が述べてあるのです。故に三  
五教は内分的の教を主とし其他の教は外分的の教を以て地上を開いたのでありま  
す。故に顯幽神三界を超越した物語と云ふのは右の理由から出た言葉であります。  
主の神たる神素盞鳴大神は愛善の徳を以て天界地上を統一し給ひ、又天界地上を  
一個人として即ち單元として之を統御したまふのであります。譬へば人體は其全  
分に在つても、其個體にあつても千態萬様の事物より成れる如く天地も亦同様で  
あります。人間の身體を全分の方面より見れば肢節あり機關あり臟腑あり、個體  
より見れば纖維あり神經あり血管あり、斯くて肢體の中にも肢體あり部分の中に  
部分あれども個人の活動する時は單元として活動する如く、主神は天地を一個人

の如くにして統御し給ふのであります。故に數多の宣傳使も亦主神一個神格の個體即ち一部分として神經なり纖維なり血管なりの活動を爲しつつあるのであります。天人や宣傳使のかく部分的活動も皆主神の一體となりて神業に奉仕するのす。恰も一個の人體中に斯の如く數多の異様あれども、一物としてその用を遂ぐるに當り、全般の福祉を計らむとせざるはなきに由る如きものであります。即ち全局は部分の爲に、部分は全局の爲に何事か用を遂げずと云ふ事はありません。蓋し全局は部分より成り部分は全局を作るが故に、相互に給養し相互に揖讓するを忘れない。而して其相和合するや部分と全局とに論なく何れの方面から見ても統一的全體の形式を保持し且つ其福祉を進めむとせないものはない。是を以て一體となりて活動し得るのである。主神の天地兩界に於ける統合も亦之に類似したまふのである。凡て物の和合するは各其爲す所の用が相似の形式を踏襲する時であるから、全社會のために用を爲さないものは天界神界の外に放逐さるるのは當然である。そは他と相容れないからであります。用を遂ぐると云ふ事は總局の福祉を全うせむために他の順利を願ふの義であり、そして用を遂げずと云ふは、總局の

福祉如何を顧みず、只自家の爲の故に他の順利を願ふの義である。此はすべてを捨てて只自己のみを愛し、彼はすべてを捨てて只主神のみを愛すと云ふべきである。天界にあるもの悉く一體となりて活動するは之が爲である。而して斯の如くなるは主神よりするのであります。諸天人や諸宣傳使自らの故ではない。何となれば、彼等天人や宣傳使は主神を以て唯一となし、萬物の由りて來る大根源となし、主神の國土を保全するを以て總局の福祉と爲すからであります。福祉といふは正義の意味である。現世に在つて、國家社會の福祉（正義）を喜ぶこと私利を喜ぶより甚しく、隣人の福祉を以て自己の福祉の如くに喜ぶものは、他生に於ては主神の國土を愛して之を求むるものである。そは天界に於ける主神の國土なるものは、此世に於ける國家と相對比すべきものだからである。自己の爲でなく、只徳の故に徳を他人に施すものは隣人を愛することに成るのである。天界にては隣人と稱するは徳である。すべて此の如きものは偉人であつて、即ち高天原の中に住するものである。三五教の宣傳使は皆、善の徳を身に備へ、且つ愛の善と信の眞とを體現して智慧と證覺とを本具現成してある神人計りである。何れも主の

神の全體または個體として舍身的大活動を不斷に勵みつつある神使のみで、實に神明の徳の廣大無邊なるに驚かざるを得ない次第であります。願はくは大本の宣傳使たる人は神代に於ける三五教の宣傳使の神業に神習ひ、一人たりとも主の神の御意志を諒解し、國家社會の爲に大々の活動を勵み、天國へ永住すべき各自の運命を開拓し、且つ一切の人類をして天國の樂園に上らしむべく、善徳を積まれむことを希望する次第であります。太元神を主神と云つたり、救世神瑞の御魂の大神を主神と云つたりしてあるのは前に述べた通り太元神の一切の所屬と神格そのものは一體なるが故であります。讀者幸に諒せられむことを。

### 附けて言ふ

主の神なる神素盞鳴大神は神典古事記に載せられたる如く大海原を知食すべき御天職が在らせらるるは明白なる事實であります。主の神は天界をも地の世界をも治め統べ守り給ふと言へば、大變に驚かるる國學者も出現するでせう。然し乍ら天界と言つても天國と云つても矢張り山川草木其他一切の地上と同一の萬類が

あり土地も儼然として存在して居るのであるから、天界地球兩方面の守宰神と言つても餘り錯誤ではありませんまい。天界又は天國と云へば蒼空にある理想國、所謂主觀的靈の國だと思つてゐる人には容易に承認されないでせう。天國とは決して冲虚の世界ではありません。天人と雖も亦決して羽衣を着て空中を自由自在に飛翔するものとのみ思つてゐるのは大なる誤解であります。天國にも大海原即ち國土があるのです。只善と眞との智慧と證覺を得たる個體的天人の住居する樂土なのであることを思考する時は、主の神の天地を統御按配し給ふといふも決して不可思議な議論ではありません。故に大海原の主宰たる主の神は天界の國土たる地上の國土たるを問はず守護し給ふは寧ろ當然であります。

大正十二年一月八日

王仁識

第一篇 浮木の盲龜

第一章 アーク燈（一―二三四）

至喜と至樂と莊嚴を 全く地上に現し世の

高天原と聞えたる ウブスナ山の頂上に

天降りましたる素盞鳴の 瑞の御靈はイソ館

最第一の天國を 開き給ひて天が下

四方の國々百人を 神の御國に救はむと

心も清き宣傳使 四方の國より呼び集め

尊き神の御教を 開かせ給ふ尊さよ

皇大神の神言もて 治國別の神司



萬公、晴公、五三公を

伴ひ館を立出でて

河鹿峠を打ちわたり

百の惱みに遭ひながら

撓まず屈せず道の爲

荒野ヶ原を進み行く

野中の森に萬公や

五三公、松彦振り残し

龍公伴ひ暗の夜を

縫うてスタスタ進み行く

怪しの森も何時しかに

無事によぎりてバラモンの

軍の數多屯せる

浮木ヶ原に進み行く。

はるくにわけ 治國別は松彦、五三公、萬公を野中の森に置去りにして、龍公一人を伴ひ、神の命を奉じて浮木の森のバラモンの陣中に、私かに進まむと、道を急いだ。怪しの森の守衛等は酒に酩酊して、二人の通るのを少しも氣がつかなくかつた。第二の關所たる浮木の村の入口に進んだ折、タール、アークの兩人は大きな目の瞳孔をあけつ放しにして、いらひさがした蜂の巢の外側を守つてゐる雀蜂宜しくの體裁で控へてゐる。

「オイ、アーク、どうやら東が白んだやうぢやないか。俺達もかうして不寝番をやらされて居るが、最早夜も明け方に近くなつたのだから、夜警の必要もあるまい、一つ瞳孔に休養を命じたら何うだらう」

「瞳孔も彼處も明るなりかけたのは、此アーク燈さまの光だよ。貴様、いつも俺をアークぢやない悪黨ぢや悪黨ぢやと吐しよるが、何程暗の晩だつて、明るするのはアーク燈だ。それだから、善が間に合ふとも、悪黨が間に合ふとも分るまいがな。エエー、善悪混淆、美醜相交はつて、現實世界が成就してゐるのだ。貴様のやうに悪が夫れ程怖ければ、元からこんな所へ首をつつ込まない方が氣が利いてゐるぢやないか。バラモン教と言へば、元より悪に極まつてゐる。其惡の教にアークさまだから、大變に詭へ向だ」

「馬鹿云ふな。神様に悪があつてたまらうかい。大自在天大國彦の神様は、世界の造主だ。悪を以て此世の中が何うして完全に創造する事が出来ようか、俺は至仁至愛の誠の神様だと思へばこそ、斯うして辛い御用をしてゐるのだ。元から軍人に生れたのでなし、軍人を志願したのでないが、お道の爲に信仰の力に引

きずられて、心にもない戦陣に加はつたのだ。グズグズして居ると三五教の悪神素盞鳴尊が、畏くも大雲山の聖地を蹂躪するかも知れないといふ形勢ぢやないか。吾々信徒としては血を以て之を守らねばならないのだ」

「世の中は何と云つても、悪でなければ立つて行かない。俺は、バラモン教は悪だと知つたから氣に入つて居るのだ。三五教の奴は靈主體だど吐して居るが、此現實世界は物質を以て固められてゐる。吾々の肉體だつて皆物質だ。天に輝く太陽でさへヤツパリ物質だ。物質界に生きて行かうとすれば、何うしても物質界の法則に従はねばならぬ、凡て現實界の太陽よりする自愛や世間愛は要するに悪だ。優勝劣敗弱肉強食は現界の動かす可らざる眞理だ。よく考へて見よ。強い獣は弱い獣を捕つて食ひ、大魚は小魚を呑み、鷹は鴟をとり、鴟は雀を捕つて食ふぢやないか。人間だつて四つ足をたたいては喰ひ、氣樂相に海川を游泳してゐる魚族を捕獲し、天然を樂んでゐる植物の實を皮を剥いたり、こすつたり、水につけたり、重しをかけたたり、熱湯の中へ入れたり、火あぶりにあはしたり、實に殘忍極まる事をやつて口腹を充し、それで生活を續けてゐるのだ。要するに人間は

悪の張本人だ。こんな事が悪だと云つてやらずに居つて見よ、一日だつて生命を保つ事は出来ぬぢやないか。それだから假令素盞鳴尊が善であらうが悪であらうが、吾々の社會を建設するに就いて邪魔になる奴ア、假令善でも悪と云ふ名をつけて亡ぼして了はなくちや自分達が亡ぼされて了ふのだ」

「さうすると、人間が死んだら、皆地獄に行かねばならぬぢやないか」

「ヘン、地獄が聞いて呆れるワイ。地獄と云へば、目のあたり現界に現はれてゐるのだ。他人の國土を占領したり、或は大資本家が小資本家を押倒したり、大地主が小地主を併呑したり、澤山の軍人を抱へて、武装的平和を高唱したりしてゐるのは、皆地獄の行方だ。極樂なんて云ふ所があつてたまらうかい。勝てば官軍、敗くれば賊と云ふ事があるぢやないか。最凶悪のすぐれた者が地獄界の覇権者だ。死後の世界なんか、心配するにや及ばぬ。吞めよ騒げよ一寸先や暗だ、暗の後に月が出る、月は月ぢやが嘘ツキぢや、と云ふぢやないか。悪と虚偽との世の中に、誠ぢや、善ぢやと、そんな體のよい辭令を振りまはして、コツソリと偽善をやつてゐるやうな奴こそ、眞の悪黨者だ。そんな奴こそ八衢代物といふのだ。或

はこれを稱して二股膏藥といふ。ヤツパリ人間は男らしう、悪なら悪、善なら善と、輪廓を明瞭にせなくちや、人が信用して呉れないぞ。悪の強い者程紳士紳商、英雄名士と持てはやされるのだ。善人と云へば馬鹿の代名詞だ、それだから俺はアークといふ名をつけて、世の中を毒瓦斯で酔はしてやる積りで、此通り頭までテカテカに光らしてゐるのだ。たつた今俺の親分即ち自然界の太陽がお上り遊ばすのだ。すべて自然界の太陽より来る光熱は、自愛の源泉だ、利己主義の標本だ。利己主義を極端に發揮する人間を利己（利巧）な奴と云ふのだ。エエーン

「オイ、アーク、貴様は大變な物質主義にかぶれたものだなア、他人の爲には一毛も損せずといふニーチエ主義だな」

「きまつた事だ。ニーチエ主義だよ。日英同盟だつて其通りぢやないか、自分とこの國が、日も三進も行かぬ様になつた時に英考を起して、一寸強相な國を番犬に使用ひ、東洋はまだおるか、西洋迄警護の役を命じ、オツシ オツシとケシをかけて日々喜ばせ、モウ英といふ時分になると、今度は尻をクレツと向け、赤米と云つて、米の方へ握手をし、日の方へ尻を向ける、ケツは即ち月だ、それでツキ

倒しといふのだよ。さうだから、世の中は何うしても利己な行方をせなくちや、到底駄目だ。人の禪で相撲とるのが所謂外交家の手腕だ。「アフんどし」であいた口がすばまらぬ、尻糞が天下を取るといふのが、混同した世界の比喩だ、今に三五教の……モシヤ宣傳使でもやつて来よつたら、うまくそこは日英同盟式を發揮して、深い陷穽へでも突つ込むのだな」

「ヘン、偉相に云ふものぢやないワ。貴様は河鹿峠で何うだつたい、治國別の宣傳使の一行に、言靈戦とやらを打ちかけられ、先鋒隊に居乍ら馬も何も打ちやつて命カラガラ遁走した張本人ぢやないか、餘り大きな口をあけて言ふものぢやないぞ。傍若無人にも程があるワイ」

「傍若無人には傍に人無きが如しといふのだ。貴様は俺の傍に居つても、人間ぢやないからな。ウツフツフ」

「俺だつて堂々たる人間様だ。餘り馬鹿にすな」

「俺や又貴様は小使のタールかと思つて居つたのだ。マアマアお手際を見て居れ、たつた今三五教の奴が勝に乗じて、悠々とここへやつて来るに違ない。さうすり

やうまく國際聯盟條約でも持ち出して、武備制限を實行し、首尾よく大勝利を得る積りぢや、貴様はジーツとして一言も言はぬ様にしてくれ。なまじひ、善心を出しよると、條約締結の邪魔になるからな」

「アーク、一寸北の方を見い、来たぞ来たぞ」

「ヤア彼奴ア、三五教の宣傳使だ、八、、、、治國別ぢや、コ、此奴ア、夕、大變だ」

「イヒ、、、、あのあわて様わいのう。何だ、今迄法螺ばかり吹きやがつて、そんな弱腰で何うして、全權大使が勤まるか」

「全權大使ぢやない、善言美詞で條約締結する積りぢや。オイ貴様、チツと確りしてくれぬと困るよ」

「俺は何にも言はぬ筈だつたねえ」

「エ、、氣の利かぬ奴だな。臨機應變といふ事を、コ、心得てゐるか。ア、、モウそこらがビリビリして、體の纖維細胞迄が躍動し出した、何でも俺の體内にや  
民衆運動が勃發し出したとみえるワイ」

「エツヘツへ、どうやら俺も體內國の暴動が鎮定したと見えて、凡ての諸官能が活動中止と……見えるワイ。シ、舌迄引きつって來さうだ。キヨキヨ恐怖心が大變に巾を利かしよつた……やうだ」

「ア、苦しい、ド、何うしたら、此談判は力、解決がつくだらうかな」

「アインスタインの相對性原理説でも應用して、うまく此場を切りぬけ……るのだな」

かく二人は治國別の姿を見て、ビツクリ腰をぬかし、舌の根も合はず、大きな目玉の瞳孔を、いやが上にも開けつ放しにして、尖つた腮をホウヅもなく延長し、口を立方形に開け乍ら、舌を喉の奥の方へちぢ込めて、戦いてゐる。

治國別、龍公はツカツカと進みより、  
治國「其方はバラモン軍の關所守と見えるが、之よりランチ將軍の陣營へ、此方を案内してくれまいか」

アーク「メ、滅相な、コ、こんな所を通過して貰つちや堪りませぬワ、……ヤアお前は龍公ぢやないか。何時の間に三五教へ沈没したのだ。貴様こそ勝手を知



つてゐるだらうから、ランチ將軍の所へ案内せい、オ、俺は此關所の常置品だ」  
「アツハ、貴様はアークにタールの兩人ぢやないか、何だ、みつともない其  
ザマは、腰を抜かしやがったのだな。モシ治國別様、此奴ア駄目ですよ。こんな  
者にかまはずドンドンと奥へ進ませう。幸ひ私は片彦將軍の部下に仕へて居つ  
たのですから、貴方の案内役には大變都合が宜しい。そして又あの通りの亂軍で  
したから、此龍公が貴方の弟子になつたといふ事は、片彦將軍もランチもまだ知  
つて居りますまい。大變に好都合ですよ」  
「コリヤ龍公、其秘密を聞くからは、最早此方は許しは致さぬぞ。見事陣中へ這  
入るなら這入つてみよ。飛んで火に入る夏の蟲だ、のうタール、可哀相ぢやない  
か」

「オイ龍公、貴様も謀叛人なら謀叛人でよいから、その宣傳使のお伴をして元へ  
引返したらよからうぞ。こんな宣傳使にやつて來られると、又一悶錯が始まつち  
や大變だ。ランチ將軍も困るだらうし、又宣傳使も一骨折らねばなるまい。これ  
程物騒な世の中に、好き好んで平地へ波を起すやうな事はするに及ばぬぢやない

か。なア治國別さま、貴方は何う考へますか』

「ウーン、吾々はランチ將軍、片彦將軍に對し、善言を與へて、彼が靈肉をして高天原へ救ひ上げ、汝等に至る迄、其歡びを分け與へむ爲に、此龍公を案内者と  
して將軍の面前に進み行く積りだ。其方も今日限り心を入れ替へて、善道に立返  
り、地獄道の苦みを免れる氣はないか。何程強い者勝の世の中だと云つても、惡  
では何時迄も續きは致さぬぞ。どうぞや、治國別の言葉に従ふ氣はないか』

「ハイ、私は従はぬことはない事はありませんが、此アークといふ奴、實に惡黨  
な代物で、ニーチエ主義ですから、此奴ア駄目でせうよ』

「モシ宣傳使様、アークに見えても、善に見えてもアークといふ世の中ですから、  
私こそ、眞の神の目から見れば、善人かも知れませんまい。どうぞお助けを願ひま  
す』

「此奴は片彦將軍の部下に於ても、最も惡名高き危険人物、併しながら惡に強い  
者は善にも強いといふ事だから、治國別様、一つ此奴を許して案内させたら何う  
でせうか』

「そりや丁度都合が好からう、……アーク、タールの兩人、吾々の爲にランチ、片彦兩將軍の前に案内致せ」

アーク「ハイ、畏まりました」

と、今迄抜かして居つた腰は何時の間にやら回復し、先に立つてスタスタと陣幕のはり廻した南の方を指して歩行き出した。

治國別、龍公兩人は二人の後に従つて、一二丁ばかりやつて來た。俄にガサリと足許は轉落し、四五間もある深い陷窀に兩人は無殘にも落ち込んで了つた。陷窀の底には林の如く鋭利な鎗が空地なしに立ててあつた。されど兩人共神のお守りの厚き爲か、都合よく鎗と鎗との間に落ち込み、少しの疵も負はなかつた。アークは陷窀の上から底を覗きながら、長い舌をペロツと出し、

「イヒ、いぢらしい者だなア、ウツフ、うつけ者奴、エツへ、えゝ氣味だなア、オツホ、面白い面白い、アツハ、安本丹の黒焼、三五教の宣傳使、穴有教の制敗を受けて、くたばつたがよからう。アークさまの計略には、アフンと致しただらう。イヒ、オイ、タール、何うだ、アークさま

の腕前には恐れ入っただらう」

「アーク魔の業に落ち込んだとは此事だな。アークまでもアークを立て通すバラモン教のやり方には、俺も啞然としたワイ。モシモシ三五教の宣傳使さま、決してアールが悪いのぢやムいませぬから、どうぞ國替をなさつても、私には化けて出ぬやうにして下さい、此アールの生首を引抜くならば、此アークの首を抜いて下さい」

「ヘン、俺の首は鐵で拵へてあるのだから、假令幾百萬の亡者が、一齊襲撃をしたつて駄目だ。モウ斯うなればこつちの物だ。サアこれからランチ將軍様に報告して第一番の功名手柄を現はしてくれ。片彦將軍だつて、數百の軍隊と共に脆くも敗走した治國別を、此アークさまの計略に仍つて巧く片付けたのだから、大したものだ。ガーター勳章だ」

「ガタガタ慄ひのガーター勳章が聞いて呆れるワイ」

「エ、ゴテゴテ云ふな、今に俺がランチ將軍の片腕、片彦將軍と肩を並べて、全軍の指揮をする様になるのだ。貴様ここに穴の番をしてをれ、俺はこれからラン

手將軍しやうぐんに報告ほうこくに行く。俺おれの姿すがたも今いまが見納みめだぞ。今度目こんどめに貴様きさまに會あふ時ときには、頭あたまの先さきから足あしの先さきまで、金筋きんすぢだらけだ。よく顔かほを見ておけ、其時そのときに間違まちがつて無禮ぶれいを致いたさぬ様やうに……」

「へん、自分じぶん一人ひとり手柄てがらをしようと思おもつても、其奴そいつア駄目だめだぞ。そんな偉相えらさうな事ことを云いふと、貴様きさまがビツクリして腰こしを抜ぬかした事ことをランチ將軍しやうぐん様にスツパぬいてやらうか。手柄てがらをしようには俺おれと一緒いっしょでないと駄目だめだぞ。自分じぶん一人ひとりの手柄てがらにしようとは、餘あまり蟲むしがよすぎるぢやないか」

「其方そのほうの手柄てがらも認みとめてやらぬ譯わけにも行ゆくまい。やがて沙汰さたを致いたすから、暫しばらく待まつてをれよ。エへん」

と咳拂せきばらひをしながら、早はやくも將軍しやうぐんになつた氣分きぶんで、言葉付ことばつき迄までおごそかに、反そり身みになつて大股おほまたに兩手りやうての拳こぶしを握にぎり、大道だいだう狭せましと打振うちふりながら、えも言いはれぬ得意顔とくいがほで、長ながいコンパスを、のそりのそりとふん張ばつて行ゆく。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 松村眞澄録)

## 第二章 黒士會（一―二三五）

思はぬ不覺をとつた治國別は、龍公を勞はりながら、

「オイ龍公、どこも怪我はなかつたかなア。大變な不覺をとつて、深く落ち込んだものだ」

「ハイ有難うムいます、別にどこも怪我は致して居りませぬが、餘り深い企みに乗ぜられ、深い穴へ落されて、チツとばかり不快でたまりませぬ。アハ、、、」

「ウフ、、、、貴様も餘程三五教式になつたな。如何なる艱難に出會つても、其態度でなくちや駄目だ」

「アナ有難や、穴尊しや、三五教の神様、ヤツパリ、バラモン教は三五教の反對で穴有教ですなア」

「オイ何時迄もこんな所に蟄居して居つても約らぬぢやないか。モウいい加減に這ひ上る工夫をしたら何うだ」

「さうですな、幸ひ澤山な槍を立ててゐやがるし、此通り、蜘蛛の巣の如く、吾々

の身體にまきつくやうに網をはつてゐよるのだから、槍の先を皆ぬいて、先ぐり之をくりつけ、槍の梯子でも拵へて上つてやりませうか。グツグツしてゐると、アークの奴澤山の子分をつれて来て、上から槍の雨でも降らされると困りますで、ナア二其時は、これ丈澤山の槍だから、下から上へ向けて槍の雨を降らしてやればいいのだ。マアゆつくりと風の當らぬ空井の底で休養でもして上ることによいかい。時に穴の縁には誰かゝるぢやないか」

「彼奴ア、タールといふ男です。随分馬鹿ですけれど、人間のいゝ奴ですから、どちらへでも傾く代物です。一つ彼奴を言向け和したらどうでせうかな」  
「お前の初陣に一つやつて見よ、治國別はここに、龍公の言靈戦を觀戦するか  
ら……」

龍公は、

「ハイ有難う」

と云ひながら、空を打仰ぎ、

「バラモン教の先鋒隊片彦將軍が秘書役、龍公、今更めてタールの奴に申付ける。

此龍公は、汝の知る如く、河鹿峠に於て治國別の爲に一敗地にまみれ、全軍遁走する折しも、腑甲斐なき味方の敗殘見るに忍びず一計を案じ、松公と共に詐つて治國別に降參を装ひ、ここ迄導いて來たのだ。一時も早く此方を繩梯子なりと吊り下して救ひ出せよ。さすれば汝は、アークにまさる手柄者として、ランチ將軍に奏上してやらう。どうぢやタール、此方の神算鬼謀は恐れ入つたであらうがなア」

「ハイハイ、そんな事とは存じませず、誠に以て御無禮を致しました。サア何うぞお上り下さいませ。幸ひここに繩梯子がムいますから、今つり下します。どうぞ貴方丈上つて下さい。そして治國別はどうなりましたか」

「最早治國別にかまふ必要はなくなつた。繩梯子さへつり下したらいいのだ」

「それは眞に氣の毒な様、氣の毒でない様なことでムいますな。芋刺しにでもおなりなさつたのですか。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と云ひながら、繩梯子を暗い陥穽へ吊り下した。治國別は繩梯子を傳うてトントンと上りゆく。



「ヤア龍公さま、あゝ結構々々、怪我がなくて何よりでした。どうぞ私の御無禮は平に許して下さいませ」

「タールとやら、拙者は龍公ではムらぬ。治國別だよ」

「ヤア、これはこれは真にはや、何ともかとも申上げられませぬ。マンマンマンお目出度うムいます。そして龍公は何うになりましたか」

「ウン、龍公は都合好くなつた。マア大丈夫だよ」

「それはマア可哀相なことを致しました。澤山に血が出ましただらうな」

「ウン、今に幽霊となつて、井戸の底から青い火をとぼし、ヒューとやつて来るだらうよ」

此時早くも龍公は穴の口へ九分ばかり登つて来てみた。そして兩人の話を小耳にはさみ、俄に幽霊気分となつて、目をクルリとむき、口をポカンと開け、舌をたらし、腰をフニヤフニヤさせ、両手を力なげにグナリと前に突出し、

「恨めしや」

と妙な聲を絞り出した。タールは、

「キヤツ」

と其場に尻餅をつき、

「ア、、、、」

と口をあけて慄うてゐる。

「アハ、、、、オイ、タールさま、嘘だ嘘だ。龍公が惡戯をしてゐるのだ。オイ龍公、朝つぱらから幽霊も、根つからはやらないぞ」

「オイ、タール、實の處は濟まなかつたが、井戸の底から俺の言つた事は皆嘘だ。地獄の様な所へ落されたのだから、地獄相應の伴りを云つたのだよ。最早井戸の底から比ぶれば、天國にも比すべき、此平地へ上つて來たのだから、嘘伴りは云ふこた出來ない。サア是から、ランチ將軍の館へさして案内をしてくれ」

「ヤ、それで俺も一寸ばかり安心した。併しながら、そんな所へ行かないで、私も一緒に伴れて、宣傳使様に逃げて貰ふ譯には行きまますまいか。なモシ治國別様とやら、決して悪いこた申しませぬ、今にアークが澤山の軍勢を引連れて、貴方を召捕りに來るに違ひありません。サ早く引返して下さい。其代り私もお供さし

て貰ひますから』

「ハ、ハ、ハ、ハ、敵を見て旗を捲き、矛を納めて退却するといふことはない、三五教は目的に向つては退却はない。只驀進あるのみだ』

かく話す所へ、馬に跨り、先頭に立つてやつて来たのはアークであつた。アークは數十人の騎士を引連れ、轡を並べてバラバラと治國別一行を取圍み、三五教の治國別とやら、最早かうなつては叶ふまい。サ尋常に手をまはし、縛につけ。ランチ將軍の御前に引連れくれむ』

と大音聲に呼ばはつた。  
治國別は平然として、

「イヤ、アークとやら、出迎へ大儀、治國別は汝が要求なくとも、堂々とランチ將軍に面會すべく進んで来たものだ。必ず心配致すな、逃げも隠れも致さぬ』

「左様なことを申して、吾々に油斷をさせ、隙を窺ひ、遁走致す所存であらう。其手は食はぬぞ。ヤア部下の者、治國別を始め、反逆者の龍公諸共召捕れ、繩をかけよ』

と下知げちをする。治國はるくにわけ別は平然へいぜんとして、天あまの數歌かずうたを奏上そつじやうするや、一同いちどうの騎士きしは身體しんたい強直きやうちよくし如何いかにともするに由よしなく、パタリパタリと馬上ばじやうより椿つばきの花はなが雨あめにあうて落ちるが如ごとく、地上ちじやうに顛倒てんたうし始はじめた。アークも馬上ばじやうから眞逆まつさかさま様に轉落てんらくし、治國はるくにわけ別の脚あし下に大だいの字じになつて、ふん伸びて了しまつた。治國はるくにわけ別は龍公たつこうに向むかひ、天あまの數歌かずうたを奏上そつじやうせしめた。龍公たつこうは稍中ややしんちうに不安ふあんを感じかんながら、一生いつしやうけんめい懸命けんめいになつて天あまの數歌かずうたを二回にくわいばかり奏上そつじやうした。不思議ふしぎや一同いちどうの騎士きしはすこしの怪我けがもなく強直きやうちよくした身體しんたいは元もとに復ふくし、手早てばやく又馬またうまに跨またがり、駒こまに鞭むちうち、一生いつしやうけんめい懸命けんめい、疾風しつぷうの如ごとく陣屋ぢんやをさして逃げ歸かへり行く。後あとに残のこるはアーク只一人ただひとり、何どうしたもののか、身體からだの自由じゆうが利きかない。□ 神様かみさま、有難ありがたうムいます。私わたくしの様な惡黨あくたうが尊たふとき數歌かずうたを奏上そつじやう致いたしまして、即座そくざに效かう驗けんを現あらはし下くださいましたのは、全まったく神様かみさまの御惠みめぐみ御稜威みづゑと存ぞんじます。決けつして龍公たつこうの力ちからではムいませぬ。どうぞ此上このうへ益々ますます厚あつく私わたくしの身體からだを御使用ごしやう下くださいます様にやうお願いねがひ致いたします。就ついては此アーク一人このひとりのみ、まだ言靈ことたまの神德しんとくを頂いただかずに、此通このとほり強直きやうちよく状態じやうたいになつて居をります。どうぞ之も私これわたくしの口くちを通とほしてお救すくひ下くださいます様やう、御願おねがひ致いたします。あゝ惟神靈かむながらたま幸倍坐世ちはへませせ□

と一生懸命に合掌する。何程祈つても、數歌を奏上しても、アークの強直状態は舊に復らなかつた。

「モシ治國別様、何うしたものでせうか、アーク一人は神様がお許し遊ばさぬのでせうかな」

「ウン、此アークは治國別に危害を加へむと致したのだから、拙者が祈願致してやらねば、駄目だらう」

と云ひながら、暫く暗祈黙禱をつづけ、全身に神格の流入充溢せし時を窺ひ……許す……一言を宣れば、不思議やアークの身體は舊に復した。アークは治國別の前に跪き、涙をたらしながら、重々の無禮を謝した。

「アークとやら、大變なお骨折りでムつたなア。併しながら治國別はお蔭に仍つて此通り、カスリ疵一つ負うて居らねば、汝に對して少しも恨むることはない。

否寧ろ神々様の御警告だと思ひ感謝してゐる。神様は汝が手をとほし、此治國別に、油斷の大敵たることをお示し下さつたのであらう。さすれば汝は吾に對して、

唯一の導師だ。大に感謝する。サア、アーク殿、そなたもバラモン軍の中に於て、

可なり相當の地位を持つてゐる人物らしい。さぞ陣中にも御用もあらう。早く歸つて治國別即刻ランチ將軍に面會の爲、參上致すと傳へてくれ」

「ハイ、何とも申上げ様がムいませぬ。併しながら私はこれより仰せに従ひ、ランチ將軍の前に罷り出で、三五教の教理を申上げ、一時も早く貴方の前に降服致す様取計らひませう。然らば御免下さいませ」

といふより早く駒に跨り、一鞭あてて雲を霞と陣中指して歸り行く。

「ハ、ハ、ハ、ハ、たうとうアークの大將、へコたれよつたな。併しまア偉相にランチ將軍を改心させるなんて、御託を云つて行きよつたが、彼奴も駄目だ。そばへゆくと、猫の前へ出た鼠のやうにピリピリふるうて、何もよう云はないのだからなア。ランチ將軍の目の動き方や顔の色ばかり考へて、ハートに浪を立たせる代物だから、到底成功は覺束ない。別れる時のお正月言葉だ。キツとランチ將軍の後について、治國別征伐なんて、洒落てやつて來るでせうよ。宣傳使様、決して油斷はなりませぬで、あゝいふことはバラモン教一般の常套手段ですからなア」

「ウン、さうかも知れないが、吾々は決して人を疑ふこた出來ない。何事も惟神

に任まかしておけばいいのだ」

「オイ龍公たつこうさま、さう見みくびつたものぢやないよ。バラモン教けうの中なかにもチツとは骨ほねもあり、花はなも實みもある人物じんぶつも交まぜつてゐるからな。アークは此頃このころ、バラモン教けう軍ぐんの中うちで、一いっしゆ種しゆの決死隊けつしたいともいふべき團體だんたいを作つくつてゐるのだ」

「有名無實いふめいむじつの團體だんたいが幾いくらあつたつて、役やくに立たつものかい。そんなことを云いつて空から威張おどりをするのだらう。コケ威おどした、曰いはく何々團なになにだん、曰いはく何々會なになにくわいと、雨後うごの筍たけのこほどにそこら中ちゆうに奇々怪々ききくわいくわいな會くわいが創立さうりつされるが、宣言せんげんは立派りつぱでも實行じつかうが出來できるためしはないぢやないか。そしてアークの創立さうりつした會くわいはどんな會くわいだ、法螺ほらの貝かひか、溝どぶの貝かひか、どうで口クくちなものぢやなからう」

「馬鹿ばか云いふな、吾々われわれ國土こくしがよつて、國土會こくしくわいといふものを作り、最善さいぜんのベストを盡つくしてゐるのだ」

「ハハア、まつくるけになつて死ぬし黒死病こくしびやうの會くわいだな。ウンそれで分わかつた、ペストを盡つくすのだ。それよりもバラモン省しやうへ掛合かけあつて、一匹いっぴきの鼠ねづみを十錢じっせんづつに買上かひあげさせさへすりや、それの方が餘程よつほど近道ちかみちだよ」

「貴様にはテンデ話が出来ないワ。國土會と云つたら、國家を憂ふる志士の團體だ」

「獅子か虎か狼か豹か鼠か知らぬが、どうでロクな奴の集まる團體ぢやなからう、アークが發頭人だと聞いちや、餘り信用も出来ぬぢやないか。そして何か會の趣意書でも出来てゐるのか」

「先づ不平黨の張本人アークさまが主唱者で、おれ達が贊助員だ。此趣意書を一寸拜讀してみよ」

と得意氣に懷から小さい印刷物を取り出して見せた。龍公は手に取り、趣意書を読み下せば左の文章が書いてある。

### 趣意書

國事に非なれども、天下第一人の聽從すべき權威者なし、所謂慨世の士、口を開けば思想の變化を言ひ、思想に對するには思想を以てせざる可らざるを説く、其言や不可なしと雖も、漫然たる抽象論は此際寸效なし。況んや公黨公人相率る



て世を欺き、己を欺き、只自ら守るに急に於て、心術の陋劣を暴露して憚らず、益々思想の變化を助長しつつあるに於ておや。吾々國民は寧ろ百人の論客よりも一人の志士の立つべきを思ふ。それ難に赴くは士の本領なり、大にしては天下國家の難、小にしては一地方一個人の難、吾黨の士は苟くも辭せず、身を挺して之を救はむことを欲す。もし吾黨の士一度立つて解決せざる案件あらば、それは士道の汚辱たらむのみ。何とならば吾國士會は名正しからざれば、斷じて立たず、誓約十則に示すが如く、悉く士道に率由して行動すればなり、敢て天下に宣す。

年 月 日

國士會

### 十則

- 一、國士はバラモン教男子たることを誇りとす。
- 二、國士は難に赴くを以て本領とす、但し時處位によるべし。
- 三、國士は誓つて無名の戦ひを宣せず。但しランチ將軍の命なれば敢て辭せず。

四、國士は對者の爲に計つて忠なるを期す。但三五教に對しては此限りにあらず。  
五、國士は本來の敵を有せず、故に勝敗に超越す。（河鹿峠の言靈戰に於ける吾軍の行動は其好適例なり）

六、國士は一諾が一死に値するも悔いず、但し最愛の女性に限る。

七、國士は精神を主とし、形式を従とす。但しバラモン軍中に在りては、或は適用せざることあるべし。

八、國士は過去を追はず未來を信ず、但バラモン教の大棟梁大黒主の最後は必ずしも光明ならざること。

九、國士は無意義なる一日を天に恥づ、但酒宴の時は假令三日四日たりとも之を恥づることなし。

十、國士は一人の知己を有すれば足れり、但し異性なれば最もよしとなす。

「なアんだ、立派なことを竝べてゐるが但書がサツパリ駄目ぢやないか。これだからバラモン式は當にならないといふのだ。羊頭をかかげて狗肉を賣るのだから

なア」

「これが現代の處世法の最優秀なる手段だ。バラモン教の眞髓をうがつたものだ、之でなくちゃ世の中が渡れないからな」

「アハ、ハ、ハ、モシ先生、どうです、國土會も、随分奇抜なことを云ふぢやありませんか」

「ウン結構だ、詐らざるバラモンの告白だ。イヤもう感心致した」

「私だつたら、こんな會へは入會しませぬな。エキスキューズ・ミー………とやりますよ」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ドラ行かう。タールさまに案内して貰はうかなア。否國土會の贊助員さま、御先導を願ひます」

龍公「國土會員萬歳、アハ、ハ、ハ、」

かく笑ひ興じながら、治國別外二人は浮木の村の陣屋を指して、宣傳歌を歌ひながら、朝露をふんで勢よく進み行く。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 松村眞澄録)

第三章 寒迎（一―二三六）

將軍しやうぐんの陣營ぢんえいさして進すすみ行ゆく。龍公たつこうは意氣いき揚やう々やうとして先さきに立たち、四方よもの景色けしきを眺ながめながら呂律ろれつも合あはぬ新派しんぱ口調くくてうで歌うたひ出だした。

☐ 月山つきやまに入いらず

天てんは曉あげざれど

雲雀ひばりや百鳥もどりの

忙せはしき聲こゑに勵はげまされ

眠ねむたき眼まなこを擦こすりながら

早はやくも荒野あらのに

歩あゆみを起おこしぬ

露持つゆもつ草葉くさはを

草鞋わらぢに踏ふめば

袖そで吹ふくあしたの風かぜは

美うるはしく薰かをりて

汗あせを拭ぬぐひ胸むねを洗あらふ

旅路たびぢの愉快ゆくわいさよ

坂照山さかてるやまの月清つききよくして

松風まつかぜに添そふ

笙しやうの音ねも

いとど床ゆかしく聞きこえ來きたりぬ  
□

タールは、

「オイ龍公たつこうさま、笙しやうもない、笙しやうの音ねも何なにも聞きこえて居ゐないぢやないか。エー、詩人しじん

といふものはソナ嘘うそを言いつても良よいのか」

「そこが詩人だよ。詩といふ字は言偏に寺といふ字を書くからなア。寺は死人の行く所だ。笙々違つた所で正味が面白ければ可いぢやないか。どうせ生きたる人間の作るものぢや無いからな、半詩半笙の人間か、又は現世に用のない老爺や三文蚊士の言ふことだ。俺も一寸詩人の眞似をして見たのだ」

「正味ぢやない、趣味のことだらう」

「正笙ぐらゐ違つたつて別に詩才はないぢやないか。アハ、ハ、ハ、」

「モシ先生、アノ月さまも矢張り詩人ですか、中空にぶるぶると慄へて居るぢやありませんか。太陽さへあれば、月は必要のないものですなア。太陽の光に壓倒されて追々と光が弱り、殆ど死んだやうに見えて來たぢやありませんか」

「ウン、さう見えるかな。それでは一つ龍公さまに習つて、治國別が詩でも詠んで見ようかなア。」

數百萬年の太古から  
冷え切つた死んだ様な

寂かな月しづかなつきが

大空たいくうに獨り輝かがやいてゐる

それは

地上ちじやうの萬有ばんいうに

瑞光ずゑくわうを投なげて

仁慈じんじの露つゆを

蒼生さうせいの上うへに降くだし

生命いのちの清水しみづを

與あたへむがために

和光わくわう同塵どうぢんの

温姿をんしを現げんじ給たまふためだ

月つきは盈みち或あるひは虧かけ

或あるひは没ぼつして

地上ちじやうの世界せかいに

明暗めいあんの神機しんきを示しめし

仁慈みろくの神業かむわざを

永遠えいゑん無窮むきうに

營いとなませ給たまふからだ

人間にんげんの眼まなこより

冷然れいぜんたる月つきと見みゆるは

温情をんじやうないはう内包せつりの攝理に

その靈光れいくわうを隠かくさせ給たまふためだ。

序ついでに今いま吹ふく風かぜの音おとを詠よんで見みよう。

そよそよと吹ふく

風かぜの音おと

脚步きやくほの響ひびき



草葉くさばの聲こゑを聞きけば

萬物ばんぶつみな

こころ有ありて

何事なにごとか神祕しんぴを

心暗こゝろくき吾耳わがみみに

語かたるあるに似にたり  
□

治國はるくにわけ別わかれは神かみの愛あいと信しんと智ち慧ゑい證じやう覺かくに充みたされ、さしもの強敵きやうてきの陣營ぢんえいに向むかつて武器ぶき

をも持もたず進すすみ行ゆくについでても、殆ほとんど下女げぢよが春秋はるあきの簒入やぶいりに親里おやざとに歸かへる様やうな心持こゝろもちで

途々みちみち歌うたを歌うたひながら進すすみ行ゆく其雄々そのををしさ。龍公たつこうもタールも何時いつとはなしに治國はるくにわけ別わか

の悠揚いゆうやう迫せまらざる態たい度どに感化かんくわされて、すつかり天國てんこくの旅行りよかう氣分きぶんになつて了しまつた。ター

ルは、

もし、先生せんせい様さま、平等愛びやうびんあいと差別愛さべつあいとは何處どこで違ちがふのでせうか。差別愛さべつあいから平等愛びやうびんあい

に進すすむか、平等愛びやうびんあいから差別愛さべつあいに分離ぶんりするのでせうか。私はわたくし差別的平等愛さべつてきびやうびんあい、平等的べんびんてき

差別愛だと聞いて居りますが、どちらから出発点を見出だせば宜いのでせう』  
『差別愛とは偏狭な戀愛の様なものだ。平等愛とは普遍的の愛だ。所謂神的愛だ。  
今一つ駄句つて見よう』  
と治國別は、

『生來の差別愛より

神的なる

平等愛に進む徑路は

實に

慘憺たる血涙の

道を行かねばならぬ

これが

不斷煩惱得涅槃の

有難い消息が秘められてあるのだ。

序ついでに、も一首いつしゆ信仰しんかうと法悦ほふえつの信樂しんらくに就ついて駄句だくつて見みよう。

信仰しんかうによつて

不信ふしんなる吾人ごじんの頑壁ぐわんぺきが

身心しんしん脱落だつらくし崩壊ほうくわいし去さる時ときは

神かみの寶座ほうざより

吹ふき來きたる靈風れいふうの鞞ふいごに

解脱げだつ新生しんせいの歡喜くわんきを爲なし

猛火まうくわも燒やく能あたはず

波浪はらうも沒ぼつする能あたはず底ていの

金剛こんがう不壞ふゑの法身ほつしん

おのづから

吾われに本具ほんぐ現成こんじやうするを

自覺じかくし得うるに至いたる

その時こそは

百千の夏日昇りて

一時に灼鑠たるも

ただ是

自性法界を莊嚴するの七寶

清淨妙心を照映するの

摩尼寶珠なるべきのみだ。

吾人が法悦の信樂は

現代の冷たい哲學の鋸や

慧しい科學の斧に由つて

忽ち幻滅の悲運に

會ふやうな

ソナナ空想的のものでは無い

主の神の持し給へる  
愛の善と信の眞とによつて  
智慧と證覺の上  
立脚したる大磐石心だ

只今のお歌によつて、私も大變に法悦の信樂を味はひました。漸く今日の日輪様もお上りになつたと見え、坂照山の頂は大變に明るく輝いて來ました。一つ歌でも詠んで見ませう  
とタールは歌ふ。

燃えさかる希望に充ちし心もて  
昇る旭を拜みにけり。  
遠山の峰は眞白し今はしも  
昇らむとして雲映え居れり。

より強く生きむと思ふ吾前に

昇る旭の大いなるかな

龍公「山荒れて風の捲きくる郊外は

あたりも見えず雪に暮れけり

「アハ、ハ、ハ、オイ龍公、寢惚けちやいかぬよ、「雪に暮れけり」とは何だ。な

ぜ「雪に明けけり」と云はぬのだ

「これは昨晩の貯藏品だ。あんまり永く貯藏しておくとは寢息物になるから、先づ古い粗製品から賣つて、それから又新しい奴を賣り出すのだ。あたら名句を腹の中で腐らして了つちや經濟がもてぬからな。さあ之からが新規蒔直した。

山明けて風そよそよと吹く野路は

あたりも清く胸も静けき。

と宣り直すのだ。エヘン

何と立派な歌だなア

まだまだ之から、とつときを放り出すのだ、エヘン。

巖かに旭を浴びて坂照山の

高嶺は雲の上に聳ゆる。

とは如何だ

タール 巖かに生きむとするか氣高くも

錦の山は空に聳ゆる

「いや、何れも秀逸だ。こんな立派な詩人と同道して居ると治國別も殆ど顔色な  
しだ。さあボツボツと行かうぢやないか」

斯く云ひつつ三人は朝露を踏んで枯草茂る野路を進み行く。前方よりはランチ  
將軍數十人の騎馬隊を引き率れ、此方に向つて走り來る其勢ひ、山嶽も蹴飛ばす  
ばかりに思はれた。先頭に立つたのは最前治國別に救はれて逃げたアークである。

アークは馬を飛び下り、治國別の前に進み寄り、叮嚀に會釋しながら、  
「先刻はえらい御厄介に預かりまして有難う存じます。就きましては、直様本陣  
に立歸り、將軍様に貴方の事を申上げた處、將軍様も大變にお喜び遊ばしお迎へ  
に出なくちやなるまいと仰有いまして、今此處に御出陣なさいました。さあ私の  
馬に乗つて本陣迄お越し下さいませ様に」

「やあ、それは御苦勞だつた。そしてランチ將軍殿は此處に居られるのかな」

「ハイ、あの金色燦爛たる軍帽を冠つて居られますのが將軍様で△います」

「いや何と立派な服装だな。然らば一つ御挨拶を致さねばなるまい」

斯く云ふ折しも、ランチ將軍は馬をヒラリと飛び下り、治國別の前に揉み手を



し乍ら現はれ來り、

「拙者は大黒主の神司に仕へ奉るランチ將軍と申す者、此度主君の命によつてイソの館へ攻め寄せる途中、吾先鋒隊片彦將軍は貴方等の言靈とやらに散々に打ち捲られ、脆くも敗走致した様子、神力無雙の三五教の宣傳使に對し到底吾々如き非力無徳の者にては敵對ひまつる事相叶はぬ次第なれば、浮木の森へ陣營をはり幕僚と協議の結果、全軍を率ゐて貴方の膝下に歸順するより外なしと衆議一決した以上は、もはや貴方等に對して敵對行爲は毛頭とりませぬ。何卒吾陣營へおいで下さつて尊きお話を聞かして下されば、實に望外の幸福でゝります」

と眞しやかに述べ立つる。治國別は一々ランチの言葉を信ずるにはあらねども、此時こそは彼を正道に導く好機會なりと心に定め、何喰はぬ顔にて、

「然らば仰せに従ひ、貴軍の陣中へ参りませう」

ランチ將軍は自分の乗り來し名馬に治國別を乗せ、自分は控へ馬に跨り、意氣揚々と陣營さして歸り行く。

門の前に立止まり、ランチ將軍は治國別を見返り、

「見る蔭もなき俄造りの陣營、遠來の客を遇するには不都合千萬なれど、何卒ゆるゆる御休息を願ひ上げまする。」  
と慇懃に挨拶をする。治國別は、

「ハイ、有難う。」

と僅かに答禮しながら奥へ奥へと進み入る。

數多の軍卒共は退屈紛れに土俵を築き素人相撲をとつてゐる。龍公、タールの兩人は其相撲に見惚れて治國別の奥深く進み入つたのを氣がつかず、負投げ、腰投げ、突出し、河津等の四十八手の使ひ方を批評しながら、

「アハ、ハ、ハ。」

と笑ひ、遂には手を拍つて囃し出した。此中で一番の力自慢のエキスは四股踏み鳴らし、土俵の真中に仁王立ちとなり、

「さア誰なつと来い、消しかかりだ。」

といきりきつて居る。来る奴来る奴片つ端から投げつける、其手際のよさ。龍公はエキスの態度と弱武者の腑甲斐なさに憤慨し、何時の間にか兩の手が腰へまは

り、帯をスルスルと解いて了ひ、眞裸となつて土俵の眞中へ飛び出した。さうしてドンドンと四股を踏み鳴らしてゐる。エキスは之を見て癢に觸つたと見え、  
「おい、貴公は龍公ぢやないか。此間から何處へ逃げて居つたのだ。そんな弱蟲の出る所ぢやない。俺達と相撲をとるなんぞと云ふ野心を起すものぢやないぞ。野見の宿彌の再來とも云ふべき此エキスさまに相手にならうと思ふのか。エー、措け措け、恥をかく様なものだから」

「ヘン、馬鹿にすない。俺でも若い時や幕の内まで入つたものだ。襦子の締込み、バレンツの相撲束ねの櫓鬘、大黒主の前でも大胡床をかき、立つて水のみ、手鼻汁をかむ、十と六俵の土俵に出たら、獅子奮迅、土つかずの龍公さまだ。いつも土俵の上で横になつた事はない、いつも立ちつづけだから龍公さまだ。又の名を勝公さまだ。さあ一つ揉んでやらう」

「エー、生命知らず奴、土の中へ植ゑてやらう。吠え面かわくな」

「そりや俺の云ふ事だ。末期の水でも飲んでしつかりせい」

と云ひ乍ら四本柱に括りつけた鹽をポツポツと左右に打振り、水をも飲まずに四

股を踏み出した。エキスも負けぬ氣になり鹽を一掴みグツと握つて龍公にぶちかけ、水をも飲まずドンドンと地響きさせながらペタペタと四つに組んで了つた。半時ばかり龍虎の争ひ、いつ勝負の果つべしとも見えない。タールは一生懸命になり、軍扇を握り土俵に行司氣取りに飛び出し、

「はつけよい はつけよい のこつた のこつた、後がないぞ、はつけよいや」と土俵の周圍を右左に廻つてゐる。大勢は固唾を呑んで此勝負如何にと見つめて居る。流石のエキスも力盡きハツと吐く息の氣合を窺ひ、ポンと右の手をぬいて禪の三辻を龍公がたたくとコロコロコロと土俵の中を三つ四つ廻つて西の溜へドスンと雪崩が落ちた様に轉げ込んで了つた。エキスは大に面目を失し、眞裸の儘スタスタと陣中奥深く姿を隠した。ワイワイと稱讚の聲、拍手の音、四邊も揺ぐばかりであつた。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 北村隆光録)

第四章 亂癡將軍（一二三七）

馬は君の危急を知らず、鷹は悪人の頭上を飛ぶとかや、ランチ將軍、片彦將軍は、イソ館の攻撃戦の容易ならざるに頭を悩まし、反間苦肉の策を弄して漸く治國別を陣中に迎へ入れ、如何にもして此強敵を亡ぼさむかと煩悶苦惱の最中にも拘はらず、部下の木端武者共は、お祭り氣分になつて氣樂相に相撲をとり、さざめき合つて居る。

陣屋の奥の間にはランチ將軍、片彦將軍を始め治國別の三人、和氣靄々として酒酌み交し、和睦の宴に耽つてゐる。そこへ慌しくやつて來たのは力強の相撲好きのエキスであつた。

「エー、將軍様に申し上げます。只今龍公が三五教へ寢返りを打ち、其スパイとなつて、吾陣中へ舞ひ込んで参りました。彼奴は御存じの通り中々の力強でムリますれば、到底一通りではとつ捉まへる譯には参りませう、何卒貴方の御秘藏の曲輪を暫くお貸し下さいませう。其曲輪によつて彼をフン縛り、一伍

一しじふ件けんを白はく状じやうさせねば、駄だ目めですからな」

ランチ「何なに、龍たつこう公こうが……三五あななひけう教けうのスパイになつたとな。アハ、ハ、ハ、ハ、決して案あんずるには及およばぬ。現げんに三五あななひけう教けうの御おん大たい將しやう、治はる國くに別に様さまは此この通とほり吾われ々われと和わ睦ぼくを遊あそばし、主しゆ客やく打うち解とけて酒しゆ宴えんの最さい中ちゆうだ。それよりも龍たつこう公こうを大たい切せつに致いたして、酒さけでもふれまつたら宜よからう」

「ヤ、之これは失しつ禮れい致いたしました。そこにムるのは、尊うほに高たかき治はる國くに別に様さまでムりましたか。これはこれは存ぞんぜぬ事こととて御ご無ぶ禮れいを申ましました」

「ア、龍たつこう公こうさまは如何どうしてゐられますかな」

「ハイ、大たい變へんな元げん氣きで相す撲もつをとつてゐられます。實じつの處ところは、私わたしも今いま一ひと勝しょう負ぶして來きたところですよ」

「貴あなた方も隨ずい分ぶん立り派つぱな體たい格かくだが強つよいでせうな。龍たつこう公こうさまとの勝しょう負ぶは、如何どうなりまし  
たか」

「ハイ、い……いや……もう、とんと……何なんでムります」

「ハ、ア、何いづれ劣おとらぬ龍りゆう虎この争あひ、要えうするに行ぎやう司じの預あづかりと云いふ處ところですか。まア

まあ分けをとつておけば互に恨みが残らいで結構ですよ。アハ、ハ、ハ、ハ、

「へー、その、……エー、……何でムります。つひ、馬に蹴られました、マーケ  
夕と云ふのですな」

「【うま】く云ひますね。二番勝負でしたか、一番勝負でしたか」

「ハイ、一番と云へば一番、二番と云へば二番ですな。真中で水を入れたもので  
すから、先の一番は拙者が負けました。後の一番は先方が勝ちましたよ」

ランチ外二人は、

「アハ、ハ、ハ、」

と大口を開けて笑ふ。

ランチ「おい、エキス、まあ一杯やつたら如何だ」

「（都々逸）相撲にや負けても怪我さへなけりや

ランチ将軍が酒飲ます

アハ、ハ、ハ、いや有難うムります。此頃は何と云つても政府が物價調節、下落の方  
針を採つてゐるのですから、【まけ】さへすればいいのです。負けて勝取ると云

ふ事ことがありますからな。吾々共われわれどもから範はんを示しめさなくちや、如何どうしても不良商人ふりやうせうにんが暴ばう利りを貪むさぼつて仕方しかたがありませんからな」

片彦かたひこ「アハ、ハ、ハ、負惜まけをしみの……何處どこまでも強い男をとこだな」

將軍しやうぐんさま、貴方あなただつて負けるのは上手じやうづでせう。治國別はるくにわけさまの言靈戰ことたませんに向つた時ときは何うでしたな。エヘ、ハ、ハ、ハ、

和睦わぼくの濟すんだ上うへは河鹿峠かしかたつげの事ことは云いはない様やうにして呉くれ。勝敗しやうばいは時ときの運うんだからな」

かかる所ところへ龍公たつこうとタールは軍扇ぐんせんを持もつたまま恐おそる恐おそる進すすみ來きたり、

龍公たつこう「一寸將軍ちよつとしやうぐんさま様に伺うかがひますが、治國別はるくにわけの宣傳使せんでんしはお見みえになつて居をりますか」

と戸との外そとから尋たづねて居ゐる。

片彦かたひこ「さう云いふ聲こゑは龍公たつこうぢやないか。何處どこをうるついでみたのだ。まア這はい入れ」

「はい、御免ごめんを蒙かうむります」

と云いひながら戸とをガラリと開あけて、タールと共ともにつかつかと進すすみ入いり、

龍公たつこう「まだ新年しんねんに早はやうムりますが、皆みなさま、まけましてお目出度めでたうムります」

片彦かたひこ「馬鹿ばか！」



「いえいえ、エー……誤解して貰つちや困ります。實は只今馬場に於て此處に居ます此エキスの關取と格闘をやりました處、脆くもエキスが負けましたので、エキス君に對して御挨拶を申し上げたのでムリます」

ランチ「アハ、ハ、ハ、片彦さま、何事も、もう此上は水に流すのだな」

「仕方がありません。常ならば許し難き代物ですが、今日は和睦の祝に忘れてやりませう。おい龍公、貴様は餘程幸福者だ」

「本當にお察しの通り私は幸福者ですよ。到頭三五教の言靈を覚えちまつたものですから、最早今日となつてはバラモン教の百人や千人位は、とつて放る位は何でもありません。エツへ、へ、へ、」

ランチ「龍公、久し振りだ。一杯やらうかい」

「ハイ、有難う。例の酒ぢやありませんか」

「決して鳩毒は這入つて居ないよ。これ此通り俺が飲んでゐるのだから」

「成程、それなら恐れながら、將軍様のお飲りになつたのを頂きませう。餘程劍

呑ですすからな」

「心の鬼が身を責めるのだ。其方は餘程悪いことを企んでると見えるな。心に悪ければ人を恐るとか、又心に企みあれば人を疑ふと云ふ事があるぢやないか。何か貴様は野心を包藏してゐるのだらう」

「野心は貴方の方にあるのでせう。かうして治國別を此處へ導いて來たのは、うまく酒に酔はし、隙を狙つてしようと思ふ考へだと云ふ事はチャーンと此天眼通で調べてあるのですよ。此龍公だつて、最早今日となつては神の神力と智慧に充たされ、今迄のヒヨツトコ野郎とは聊か譯が違ふのですから、斯様な大膽な事を云つてゐられるのですよ。一つ言靈を發射して御覽に入れませうかな。エへへへへ」

「しようもない事を覚えて來たものだな」

片彦「何程、威張つた所で駄目だらうよ。そりや大方治國別様の事を云つてゐるのだらう。虎の威をかる狐とは貴様の事だらうよ。オホへへへ」と心中にやや恐れながら豪傑笑ひに紛らしてゐる。

治國「いや大變に頂戴を致し酩酊しました。エー何處かで休息さして貰ひたいも

のですな」

ランチ「アー、大變にお疲れでせう。では奥の間にユルリと御休息なさいませ。

やア龍公、貴様も一緒に供して奥の間に休んだら如何だ」

「ハイ、有難う、治國別様にグツスリと寝んで頂きまして、此龍公は萬一に備ふるため、不寢番を致しませう」

「おい龍公、まだ疑つてゐるのかな」

「平生のやり方が、やり方ですから、何程和睦をなさつたと云つても、何うして

油斷が出来ませうか。おい、タール、貴様も俺について来い」

片彦「いや、タールには至急甲付け度い事があるから、龍公一人奥の間に宿直を

致したがよからう。さア治國別さま、案内を致しませう」

と先に立つて立派な一段高い俄造りの奥座敷に案内した。

此居間は燕返しになつて居て、一つ針金を引張ると眞暗な深い穴に落ち込む様になつてゐる。さうして此處は水牢になつてゐる。治國別、龍公の兩人は此間に足を踏み込むや否や、忽ち座敷はクレリと燕返しに藝當を演じ、眞暗な谷底へ落

ち込んで了つた。水は一尺ばかりより溜つてゐないが、兩人は岩窟にいささか頭を打ち、憐れや忽ち氣絶して了つた。ランチ將軍、片彦、エキスは此場に走り來り、手を拍つて愉快氣に笑ひ散らした。

片彦「ヤア、ランチ殿、河鹿峠の大物を斯くの如く計略にかけて岩窟内へ落した以上は、最早天下に恐るべきものはありますまい。サア之から一杯やりませう」と又もとの座へ引返し一生懸命に大亂癡氣騒ぎを始め出した。

ランチ「どうも陣中の事と云ひ、男ばかりが酒を飲んで居つてもはづまぬぢやないか。片彦殿、部下の奴共に少し澁皮の剥けた女を探さして此處へ貢がしたら如何でせう。もはや治國別を殺した以上は大黒主様へ對しても云ひ譯の立つと云ふもの、餘り急ぐにも及びますまい。まづ此處で一年ばかり野營をして英氣を養ひ、河鹿峠を乗り越えてイソ館へ乗り込む事に致しませう。何うせ三五教は此處を通らなくちゃ、ハルナの都へ行く事は出來ませぬから、一年間も女なくてはやりきれないでせう」

「成程、然らばエキス、其方御苦勞ながら二三人の部下を引率れ怪しの森に陣取

り、一は三五教の宣傳使の通過を取調べ、一は美人の通過するあらば有無を云はせず、ひつ捕らへて陣中へ連れ来る様取計らへよ」

「ハイ、委細承知仕りました」

と此處にエキスはコー、ワク、エム外二人を率ゐ、怪しの森に守衛を命じおき、自分は陣中を彼方此方と看守りする事となつた。

後にランチ、片彦兩將軍はクビリクビリと酒を傾けながら雑談に耽つてゐる。

ランチ「アー、都合よくいつたものだな。鬼春別將軍、久米彦將軍が今日の吉報

を聞いたたら嘸喜ばれるだらう。然し吾々は居ながらにして功名を樹てたのだから

實に幸福だ。之と云ふのも、全く自在天様の御神力だ」

「成程、全く自在天の御神力に間違ひはありません。之についてアーク、タールの兩人も之から拔擢してやらねばなりません。一つ將軍から直接にお杯を與

へておやりなされば、將來のため奨励となつて宜いでせう」

「成程、貴將軍の云はるる通りアーク、タールの兩人を此處へ呼び出させよう」

ランチは手を拍つて從卒を招いた。從卒ビルは恐る恐る進み出で、

「お呼びになりましたのは私でムリですか」

「ウン、只今アーク、タールの兩人を之へ呼び出して来い、否引き連れて参れ」

「ハイ、承知致しました」

と此場を立出で、肩肱怒らし屋外に出でて行く。

アーク、タールの兩人は眞裸體となつて治國別の遭難を知らず土俵で四股を踏んで居る。そこへビルは鼻高々と勅使氣取りになつて現はれ来り、

「アイヤ、そこに居るアーク、タールの兩人、申渡す仔細がある。某についてランチ將軍の御前まで罷りつん出よ」

と下知した。アーク、タールの兩人はビルの怪しきスタイルに吹き出し、

アーク「アハ、ハ、將軍の從卒だと思つていやに鯨子張つて居やがるな。何だ、

鉛の福助人形見た様なスタイルしやがつて「罷りつん出よ」もあつたものかい。

貴様のスタイルこそ古物屋の店前へ日の丸の扇を持つて坐つてゐる大文字屋福助ソツクリだ、アハ、ハ、ハ、笑はしやがるわい」

「こりやこりや兩人、ビルの言葉でないぞよ。勿體なくもランチ將軍様の御仰せ

だ。ビルの言葉は即ちランチ將軍の御言葉だ。さあさあキリキリお立ち召され」  
「エー、仕方がないなア。自分より五六段も低い奴に威張り散らされて、堪つたものぢやない。之だから宮仕へは嫌といふのだ。本當に木の角杭の様な代物に威張り散らされて何處に男が立つものか。なあアーク」

「ウン、さうともさうとも、然しながら主命はもだし難しだ。さア行かう」

此處に二人はビルに導かれ、ランチ將軍の居間に進んだ。然しながら此二人は已に已に心機一轉して、内心三五教の信者となつて居た。二人の心が斯くも變つて居るとは神ならぬ身の知る由もなく、ランチ、片彦兩將軍は二人を此上なきものと愛で慈しみ、一切萬事の相談をなすべく幹部に拔擢して了つたのである。

（大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 北村隆光録）

見渡す限りの枯野原

萬木の梢は羽衣を脱ぎ

肌をたち切るばかりの

寒風に戦慄してゐる。

獨り松柏のみは蒼々たり

ヒヨやツムギや百舌鳥雀などが

悲しげな聲調を搾つて

浮世の無情を訴へてゐる。

吾目に收容さるるものは

生氣の褪せた

細氷の波を敷きつめた

銀冷の世界のみだ。

萬有一切はあらゆる活動を休止し

所謂



冬籠りの最中である

かかる冷酷無残の光景を眺めて

貧しき人は何れも寒氣と飢餓に泣く

反對的に富めるものは

雪見の宴を張り

嬋妍たる美姫を招き

青樓に酒杯をかたむけ

體主靈從的歡樂に耽る

社會は眞に様々なものだ

冬日積雪のために

勞働の機を得ず

生命の糧を求めて泣くもあれば

冷たき雪の景色をながめて

酒類にひたり

一宵千金を浪費濫用して

猶も惜しまぬものあり

顧みれば凡て社會の諸行は無常なり

因果應報の神理に暗き

現代人は科學的知識のみを漁りて

永遠の天國を知らず

又根底の國の何たるを解せず

醉生夢死無意義なる

生涯を送るあり

世間の無情冷酷を歎きて

嚴寒の空に戦き慄ひつつ

面白からぬ冬日を送るもあり

人生の暗黒面は

椿の花の梢を去る如く

ぼたりぼたりと地上ちじやうに降ふる  
悲喜ひき交々こもこもの社しゃ會くわいのおとづれ  
人ひとの身みの四邊しへんを包つつむ怪あやしさ。

ア、されどされど

愛善あいぜんの火ひと信真しんしんの光ひかりに

自みづから眼醒まなこさめたる吾人ごじんは

光榮くわうえいなり幸さいはひなり

天地てんちの主しゆなる神かみの

玉たまの如ごとき神格しんかくの内流ないりうを

全身ぜんしんに漲みなぎらしつつ

智慧ちゑと證覺しよつかくにひたりてより

世よ人びとの怖おそるる針はり刺さす如ごとき嚴げん冬とうも

萬ばん物ぶつ聲こゑを潛ひそむる冷つめたき

死しんだやうな夜よ半はの空くう氣きも

吾ご人じんには暖あたかき春しゅん陽やうの思おもひあり

ア、主すの神かみよ主すの神かみよ

わが身み魂たまを機き關くわんの一部分いちぶぶんとして

いや永とこ久しへに使つかはせ給たまへ

無む限げん絶ぜつ對たい無む始し無む終しうの神しん格かく者しや

愛あい善ぜんの肉にくと

神しん眞しんの血ちを以もつて

吾われ等らの上うへに太たい陽やうの如ごとく月つきの如ごとく

降くだらせたまへ

惟かむ神な靈が幸たまはへませ  
□

と歌つて郊外の散歩をして居るのはアークであつた。一人はタールのバラモン信者である。

「オイ大將、俄に悟つたらしいことを云ふぢやないか。俺は悪黨だからアークと名をつけたのだ、それだからどこ迄も徹底的に悪をやると主張して居たが、たうとう治國別の宣傳使とぶつつかつて俄に屁古垂れたぢやないか」

「俺があゝの宣傳使と出會つたお蔭で、今日の地位になつたのぢやないか、エーン、能く考へて見よ、ランチ將軍、片彦將軍の帷幕に參じ、重要會議に參列する身分となつたのは、矢張り治國別さまのお蔭ぢや、併し治國別さまはどうなつたのだらうかなア。よもやあゝの人格者がオメオメとランチ將軍の陷穽に陥る筈はあるまいしなア……何だか俺は氣がかりでならないのだ。何處迄も俺達は表面ランチ將軍に服従し、治國別さまの身邊を氣を付けなければならぬ義務があるのだ。それにつけてもビルの奴、癩に觸るぢやないか、ランチの從卒ぢやと思つて、無茶苦茶に威張り散らすのだからなア」

「威張りたい奴は威張らして置くさ。朝から晩迄馬のお世話ばかりさされて居る

のだから、一寸は威張らしてやつたて好いぢやないか。誰だつて何かの特權がなければ勤まらぬからなア、彼奴だつてさう馬鹿にしたものぢやないよ。俺だつて貴様だつて二三日前迄は随分慘めなものだつたからな。併し人間は一旦ドン底に落ちて來ねば駄目だ。「人生の破調は神を輸入す」とか、どこやらの哲學者が吐いたぢやないか。一旦失脚せなくては、眞の神に接し神の神力を受ける事は出來ないものだ」

「さうだなア。何でもエマーソンとか云ふ哲人の言葉だと聞いてゐるが、随分「エラーソン」に云つたものぢやないア。アハ、ハ、ハ、」

「古今東西の偉人傑士と云ふ奴は、大抵孤兒か貧兒か、もしくは私生兒或は極めて慘めな不仕合せ者であつた事を考へて見ると、人間と云ふものは、何うしても悲境の淵に沈んで、社會の辛酸を嘗めて來なくては到底駄目だよ。人間の父母の恩愛は、動もすれば舐犢の愛に流れ易きものだ。貴族の倅が鞭撻ない手に育てられ、人となつた所謂寵兒は、往々にして放蕩遊惰の鈍物となるの事實は、世間には随分澤山あるものだからなア。世の諺にも、親はなくても子は育つと云ふぢや

ないか。人間は何うしても神様の保護を受けなくては、一力で存在する事は出来ないか。誠の神の愛に觸れなくちや駄目だ。俺は神様の愛の呼吸と云ふ歌を作つて見たのだが、一つ謹んで拜聴する氣はないか」

「どうせ、貴様の事だから碌な歌は詠めはしよまい。併し後生のためだから、一つ辛抱して聞いてやらう」

「タールは、エヘンと咳拂しながら、

「吾輩の詩歌は左の通りだ。」

天父の聖心にある

大愛の鼓動は

直に美しく

而も嚴肅なる

自然の情調として

促々として吾身に迫り

動やもすれば私欲しよくやねん野念やねんのために

昂進かうしんし攪亂かくらんする

吾心わがしんしん身の脈搏みやくはくを鎮靜ちんせいし

かくて從容しよつようとして

捨身しやしんむゐ無爲むゐの

本然ほんぜんてきくわつどう的活動たつどうに入いらねば止やまない。

如何いかに安息あんそくを求もとめて

涼すずしき山奥やまおくや

靜しづかな海濱かいひんに遊あそぶも

若もし夫それ

心しんれい靈れいの内分ないぶんに

神かみと俱ともに働はたらき

天界てんかいを藏さうして

天地てんちと呼吸こきふを齊ととのふべき



靈覺を缺かむか

安息も立命も

只一場の好夢にも比すべき

憐れなる欺幻に

過ぎないであらう

成程ちぎる秋茄子、根つから面黒くないわい。併しながら、治國別さまに感化

されて俄詩人となつたぢやないか。もう是だけ詩文が綴れるやうになりやタール

も文壇の花として、持て囃されるかも知れないよ。アハ、ハ、ハ、

併し俺は何うしたもののか、バラモン軍に籍を置くのが、きつう嫌ひとなつたの

だが、それだと云つて外にする事もなし、仕方が無いから先づ暫くは腰掛だと思

うて、ランチ將軍や片彦將軍のお髯の塵を心ならずも拂ふ事としようかなア。こ

れが處世法の最も優秀なる道だらうよ

さうだ、治國別さまが陣中にお出になつたのだから、何と云うても此處は辛抱

せなくてはなるまい。ランチ、片彦兩將軍も何れは歸順するだらうからなア。さ  
うすれば吾々は三五教の宣傳使となつて天國を地上に移寫する事になるのだ。こ  
れが人間として最も勝れたる行ひだ。否人間として最も嬉しき事業だ」  
「時に何だか向ふの方から、甚い勢で鳴物入でアーク神がやつて来るではないか。  
ヨウヨウ棺が来るぞ、而も二挺だ」

「如何にも章魚にも足八本だ。ヨウあいつはエキスぢやないか。又獲物を旨くち  
ヨ口まかして持ち込んだのだらう。彼奴は又、ランチ將軍の御覺え目出度うなつ  
て威張り出しちや、大變だぞ」

エキスは意氣揚々として、蝶螻別、お民を駕籠に乗せ、四五人の番卒と共に此  
方に向つて歸つて来るのであつた。エキスはアーク、タールの兩人を見るより、  
さも得意氣に、

「ヤア其方はアーク、タールの御兩所、お出迎へ大儀でムる」

アーク、タールの兩人はエキスに「お出迎へ大儀」と云はれ、殆ど目下扱ひを  
せられたやうな氣分になつて業が沸いて耐らないけれど、態と素知らぬ顔をして

何氣なう、

アーク「やあエキス殿、御苦勞でムつた。嘸ランチ將軍が、お喜び遊ばす事だらう。さうして其駕籠の中の客人は一體何人でムるかなア」

エキスはさも横柄に、鬼の首を竹篋で切り取つたやうな誇り顔で、

「大切なるお客人、某の辨茶羅、ア、否、器量によつてお迎へ申して來たのだ。

御本人の誰人なるかは、ランチ、片彦兩將軍にお目にかける迄發表する事は出來ない。さア御兩所、先に立つて御案内めされ」

「随分威張つたものだなア。エ、仕方がない」

「エキスに隨いて奥へ進む事にしようぢやないか。大分に最前から郊外散歩をやつたからなア」

エキスは道々歌ひ出した。

「バラモン教の大教主　大黒主の部下となり

産土山の高原に　館を建てて世の中を

掻き亂し行く曲津神

神素盞鳴の牙城をば

屠らむために進み行く

ランチ將軍、片彦の

其陣中に名も高き

ヒーロー豪傑このエキス

神變不思議の妙法を

縦横無盡に發揮して

神素盞鳴の尊さへ

攻めあぐみたるウラナイの

教の司とあれませる

蠓蠓別の教主をば

吾言靈に靡かせつ

軍用金を獻納させ

將軍様の片腕に

勧めむためとやうやうに

お供をなして歸りけり

蠓蠓別の勇將が

もはや吾手に入るからは

神變不思議の妖術を

使うて世人を苦しむる

三五教の宣傳使

假令幾萬ありとても

如何でか恐るる事もある

これも全くバラモンの

尊き神の引き合せ

ランチ、片彦兩將も

嘸や満足なさるだらう

此陣中に俺のよな  
功名手柄を現はした

勇士が又とあるものか  
アーク、タールの兩人よ

これから俺は將軍の  
帷幕に參じ汝等を

それ相當の職掌に  
使うてやらう樂しんで

御沙汰をまつがよからうぞ  
お前も何時迄番卒の

小頭みたよな役をして  
居つた所で詰らない

世の諺に云ふ通り  
立ち寄るならば大木の

密葉の影ぞ親方と  
箸は太いがよいと云ふ

社會の眞理を悟るなら  
今日から俺の御家來と

なつて神妙に仕へよや  
今から注意を與へ置く

あゝ惟神々々  
バラモン教の大御神

御靈幸はへましませよ

アークは蠓蠓別の乗つて居る棒端をグツと握り、

「オイ、此駕籠、一寸待った」

エキス「待ったとは何うぢや、一時も早く將軍のお目につけねばならぬ大切なお客様だ、邪魔ひろぐと容赦は致さぬぞ」

アークは、

「こりやエキス、其方は今何と申した。吾々兩人は兩將軍の片腕となつて帷幕に參列する重役だ。貴様の不在中に任命式が行はれたのだから、知らぬのも無理はないが、餘りの暴言ぢやないか。此方に對し「出迎へ大儀」などと部下扱ひをなすとは以ての外の汝の振舞ひ、吾々は上役の職權をもつて其方を放逐致さうか」

「ソ、そんな事ア俺は知らなかつたのだ。間違つて居れば許して貰はなくしては仕方がない。併し最も大切な客人をお連れ申して來たのだから、さう頭ごなしに吠鳴りつけられぢや、このエキスも引合はぬぢやありませんか」

「知らなければ仕方がない、差許す、併しながら、今約束をして置くが、エキス、其方は、將軍様のお見出しに預かつて、吾々と同役になつても決して威張つてはならないぞ。なあエキス、こりやエキスの野郎、よいかエキス」

タール「やい、エクス、今アーク重役さまの言葉を能く腹に入れたか。やいエクス、エー聞いただらうなあエクス、何うだいエクス、返答は」

「さう澤山さうにエクスエクスと云つて貰つちや、お客さまに對し外聞が悪いぢやありませんか。一口仰有つたら分つて居るぢやありませんか」

アーク「今は俺が上役だから、今の中に澤山さうに呼びつけにして置かぬと、重役になつたら、もう呼ぶ事が出来ないからなア。エクス、さうだらうエクス、きつと羽張つてはいけないぞ。こりやエクス」

「アハ、何か旨い液吸うて来たに見えるな。それでエクスエクスとアークさまが云ふのだらう」

「旨い液を吸うて来たのだ。盗人の上前をはねて二千兩、蠚蠚別から五千兩、都合七千兩のエクス（「液吸う」）だから、これ位云うてもよいのぢや」

エクスは、

「ウフ、ウフ、」

と私かに笑ふ。

第六章 美人草(一二三九)

翩翩として降り頻る柔かき雪を被つてコー、ワク、エムの三人は怪しの森影にチヨロチヨロと火を焚き、車座になつて無聊を慰むべく雑談に耽つて居る。

コー「浮木の森で將軍が半永久的の陣營を立てて居る以上は、茲一年やそこらは、どうせイソ館に向つて進軍する氣遣ひもあるまい。陣中に女がなくちや淋しくて仕方がないと云つて、浮木の里の女狩りを將軍の命令でやつて見たところ、何奴も此奴もお化けのやうな代物ばかりで、二目と見られぬデカボチヤばかりだ。そこで將軍様がエキスの大目付に内命を下し、立派な女が見つかったら、献上せよ。さうしたら重要な地位に使用つてやらうと、仰有つたさうぢやが、何とかして一つ美人を(とつ)捕へたいものだなア」



ワク「だつてかう物騒な世の中、女なんかは土龍のやうに皆深山の土窟に隠れて仕舞ひ、容易に出て来る氣遣ひはないわ。それでも此處にかうして待つて居れば、やつて来ないものでもないなア」

コー「蝶蜎別の追っかけて来たお民とかいふ女は中々のナイスだつたネー。俺も男と生れた甲斐には是非一度はアンナ女と添うて見たいものだ。女の癖に力もあり膽力も据わつてゐるなり、丸きり天女の降臨のやうだつたネー。俺はアノお民の態度には全然參つて了つた。ハ、ハ、ハ、ハ、」

ワク「昔から男として女の心と身體の美しさを賞め稱へるに就ては、どんな偉大な美術家だつて詩人だつて未だ十分に成功したものは無い。粘土を捻つて人間を拵へたといふ神様や猿や犬などには夫れ程に感じないだらうが、少くも吾々の目に映る女の魅力は大したものだ。しなやかに長い髪の毛、それを色々の形に整理して面白く美しく飾り立てた頭、皮下の脂肪分のために骨ばらず筋張らない肉體、トルソだけでもいやモット小部分だけでも、吾々の禮拜すべき價値が充分にあるやうだ。アノ髯の生えぬ滑々した頬だけでも結構だ。むつちりと張つた乳房だけ

でもよい。握れば銀杏になり開けば梅干になる指のつけ根の關節に、可愛らしい  
壓おさのやうなクボミの這入る手頸てくびだけでも結構だ。足だつて柔かくて氣持きもちちがよい。  
そこへ持つて来て、女は身を粧よそほふことに時間と精魂せいこんとを盡つくして省かへりみない美しい優やさ  
しい本能ほんのつをもつてゐるから、玉は益々ますますその光を増ますばかりだ。聲帯せいたいが高調かうてうに張は  
れてゐることも男の耳には嬉しい清い響ひびきを傳達でんたつする。一體いつたいに受動的じゆうどうてきな性情せいじやうから  
舉措物きよそものしつ靜かに、しとやかに、言葉にも稜かどが無く控へ目なのも女の美點びてんだ。女とい  
ふものは何處どこに一つ點てんの打ち處うちどころがないやうだ。天地開闢てんちかいびやく以來、如何なる天才てんさいが現あら  
はれても、遂つひに賞ほめ切れず稱たたへ盡つくされなかつた女の心こころと身體からだとの優美いうびを、何程なにほど俺  
たちが躍起やくきとなつて述べた所で詮せんなき次第だ。只々ただただ謹つつしみ敬うやまひ、永遠無窮えいゑんむきうの平和へいわの  
守神まもりがみと崇あがめ奉まつるより外ほかはない。ア、惟神靈かむながらたま幸倍ちはへませ坐世だ。アハ、ハ、ハ、  
エム「おいワク、お前は女權擴張會ぢよけんくわくちやうくわいの顧問こもんにでも選えらまれて居ゐるのか。大變たいへんに女權ぢよけん  
擁護ようごの辨論べんろんをまくし立てやがるぢやないか。俺おれの見る所ところでは女をんなといふ奴やつは不思議ふしぎ  
な程ほど見掛みかけ倒たふしで不器用ぶきような始末しまつの惡わるいものはないやうだ。一寸ちよつと賞ほめりや、のし上あが  
る、叱しかれば泣なきよる、殺ころせば化ばけて出でるといふ厄介やくがい至極しごくな代物しろものぢやないか。何なにを

させても到底男には叶はない。チツト男子の擁護をしても餘り罰は當るまいぞ」  
「ヘン、男に昔から碌な奴があるかい。松竹梅の三人姉妹だつて出雲姫だつて祝  
姫だつて、天教山の木花姫だつて偉大な仕事を爲し遂げた女は澤山にあるぢやな  
いか。寡聞ながらも俺はまだまだ澤山に女丈夫の出現した事を聞き及んで居るの  
だ。常世姫だつてウライ教の今通つたお寅婆アさまだつて、俺達より見れば偉  
いものぢやないか、エーン。俺よりも俺の嬢の方が遙に器用に針を運ぶことを承  
認して居るのだ。兒だつて男では産むことは出来ないからな。何うしても女は社  
交界の花だよ。それどころか男の爲すべきことの様に思はれて來た仕事にかけて  
も、どしどしと行つて退けるのだ。例へば議會に代議士を訪問して何事かべらべ  
ラと仰有ると、大抵の事件は無事通過する様になる事を思へば、俺なんかよりも  
女房の方が遙に政治的の頭腦が發達して居るものだと眞に敬服して居るのだ。そ  
んな次第だから女は一口に不器用だと言つて葬つて了ふ譯には行かないよ」  
「實際何でも一寸器用にやつてのける點は女の方が偉いかも知れぬ。併し不思議  
なことには開闢以來未だ一人として男が逆鋒立をしても叶はぬやうな圖抜けた女

は出たことではないぢやないか。音楽などでは随分一流までは行くものもある、然しながら一流といふ點までは決して頭が届いた例がない。ジヤンダークだつて大黒主の傍へ持つて云つたら二流か三流だ。紫式部やサラベルナルが偉いと言つたつて、一流の一流といふ程のものではない。方面を變へて女の爲すべき事のやうに思はれて来た仕事でも一流の一流といふべき位置は残らず男子に占められて居るのだ。料理や針仕事でも一流の職人は矢張り男子だ。少し考へて見たら女は不器用なものだと言はれても仕方が無からうよ。又戀愛なんぞは女が先に立つて、頭からのめり込むやうに深く這入つて行つたらと思ふのだが、俺に言はしたら是とて一流の一流たる戀愛になると、女は何時でも男子に手を引かれて一足づつ跡からつて行く。戀の炎さへプロミセウスに取つて来て貰ふとは、女は實にエタアナルのアイドルだと云はなければならぬぢやないか」

「サウ女を輕蔑するものでないよ。女房に死なれた男子が一流の母たることは出来やうが、決して一流の一流といはるべき母たることは出来ない。ここが如何に男子が逆鋒立になつて氣張つて見ても叶はない點だ。このことのみは争ふべくも

ない事實だよ」

「元始女性が太陽だらうと雌猿だらうと構はないが、人間が胎生動物であつて女が子宮といふ立派な製人器を持つて居ることは間違ひない。いやなら兒は産まな  
いでも夫れは御勝手だが、する仕事は不器用だし、戀をしても淺薄だとなると、  
女の生きてゐる甲斐は何處にも無いぢやないか。所詮女は男に隸屬すべきものだ  
からなア」

「俺は、女は男に隸屬したものだとは考へられないと同時に、獨立したものだとも  
思はない。それは丁度男が女に隸屬したものでも獨立したものでもないのと同  
じことだ。然し俺は決して女の自由を男の手の内に握らうとは言はない。モツト  
女が自由であることを祈るものだ」

「女の自由　　ヘン猪口才な、女の癖に自由を叫ぶのは怪しからぬぢやないか。  
思想、感情、習俗、生活などを自分のものにしようとする謀叛だ、男のおせつか  
いから引き離さうとするのだ。一切の權利を女の方へ引つたくらうとする野望な  
のだ。女らしくなるのを嫌つてゐるのだ」

「女自身の思想、感情、習俗、生活、さう言ふものを確立しようとする現代婦人の氣持は、女が時代に醒めたことを現はして居るのだから、現代の婦人は甚だ頼もしいぢやないか」

「けれども、それを男子から取戻さうとして、女のチャンピオンが男子の中に荒れ込んで来て益々男子の中にズルズルと没入して行く様は見ても痛ましい。男子が女から取り上げたものを議場や慈善愛國の念や飛行機の上や大學や家長の名や乗合自動車の中に隠匿して、私して居る様に思つてるのは、少々見當違ひの詮索だと云はなければならぬ。そんな所から、本當の女の自由が取戻されるか何うか、マアマア女權擴張會のために充分活動して見るがよからうよ。若しも男子が女から何物かを取つて来てゐたとすれば、それは女が何をしても不器用で、とても見て居られないから男子が代つてやつて居る迄の事だ。併し俺は職業の話をして居るのぢやない。思想でも感情でも習俗でも生活でも……さう云ふものを立派に女自身の手で處理して呉れたならば、男子はそれだけ助かるのだ。それだけの手間や勞力をモット男向きの方面へ有利に使ふことが出来るのだ。決して男子は

女をんなに對たいして返かへし惜をしみはせないよ。この頃ころの新あたしい女をんなだとか目め醒ざめたとか云いふ女をんなのして居ゐることには矛盾むじゆんばかりだ。自分じぶんの家うちには勝手かたての知しれない手間てまの雇やとひに働はたらかせて置おいて、義理ぎりもへちまも無ない隣となりの家いえの大掃除おほさうぢに、役やくにも立たたぬ瘦腕やせうでで手傳てつだひに行いつて居ゐるやうな形かたちがある。家内うちは手廻てまはらず隣家りんかは邪魔じやまになるばかり煽動おだてされると、何なん氣きが付つかない所ところが實じつにお氣きの毒どくだ。人ひとの悪わるい連中れんちゆうに少すこしばかり煽動おだてされると、何なんの不自由ふじゆうもない貴婦人きふじんの身みを以もつて四辻よつ辻に立たち、造花ざうくわの押賣おしうりまでやるのだ。斯かうなると馬鹿ばかを通とほり越こしていつそ洒落しやれたものだ。女をんなが女をんなであることに飽あき足たらなかつたり、恥はづかしがつたりしても、それは焼直やきなほさない限りかぎ、神様かみさまだつて人間にんげんだつて誰たれだつて、何どうしてやる譯わけには行ゆかないわ」

「おい、エム、さう言いつたものぢやないよ。女をんなだつて出で來きないものはない。總理そうり大臣だいじんぐらゐは勤つとまるよ」

「女をんなが總理そうり大臣だいじんぐらゐに成なれない事ことは無ないのは當然たうぜんだ。現げんに高かうはないが加藤明子かとうめいしだつて成なつて居ゐるぢやないか。此頃このころの總理そうり大臣だいじんならデクの坊ぼうでも立派りっぱに勤つとまるからなア。併しかし同おなじデクの坊ぼうでも男子だんしの方が少すこしばかりは良よくやる。だからさう云い

ふことは齒痒からうが暫く男子に任しておいて、男子には逆鋒立ちをしても、女の眞似の出来ない方面のことに身を入れた方が良いわ。それは外でもない女は母たることだ。それだけでは生甲斐が無いやうに感ずる程、精力の過剰があつたら、一流の母たることに務めるべきだ。それでも未だ飽き足りなかつたら一流中の一流、理想の母たることに努めたら良いだらう。たつた一人の子供でも退屈するほど暇な、そして骨の折れない仕事ではなく、またそれほど働き甲斐のない仕事でもない天人の養育機關だからなア。大道で往來の人々に對してビラを撒くほど易い仕事ではないのだから」

「オイ間違つちや可けない、俺の謂つた一流の一流たる母親と云ふのは、世間の所謂良妻賢母といふたぐひでは無い。そんなことなら男子でも相應にやれるわ」

「では何うすると云ふのだ」

「サアそこが男子には逆鋒立になつても追付かないところだ。宜しく御婦人にお任せするのだなア」

「俺の言ひ方に大分に毒があつたから、俺が女嫌ひだと思つちや困るよ。俺の嫌



ひなのは、女だか男子だか判然しないやうな中性の女だ。普通の女らしい女は大好きなのだ。ハ、、、、

「アハ、、、、、到頭本音を吹きよつたなア」

コー「何と云つても女の心と肉體の美しさは稱へても稱へ切れないものだ。優しい思ひやりの深い控目な心、むき出しでも綺麗な心、澤山の悪心を持ちながら之を要するに小さい可愛らしい心、嘔吐きでそして直に後悔する心、どこから考へても可い。俺は一切の女が大好きだ」

エム「女といふ奴性來の愚者だから、何うでもなるものだよ。女を喜ばせようと思つたら百萬言を費して其心を褒めてやるよりも、たつた一言、髪なり、鼻つきなり、眼元なり、爪の光澤なりを褒めてやつた方が効果が多いものだ。アハ、、、、」

コー「誰が何と云つても俺は女の心とその肉體を褒め稱へ禮拜して平和の女神と崇めるのだ。それが男子たるものの道義心だ。なんと云つても女はエターナル・アイドルだ」

ワク「アハ、ハ、ハ、」

エム「エへ、へ、へ、」

かく笑ひ興ずる所へ、雪のやうな白い顔をした妙齡の美人が二人、涼しい聲を張り上げ歌を歌ひながら此方の森をさして進み来る。三人は目敏くも是を眺めて目引き袖引きしながらコーは小聲で、

「おい、ワク、エム、俺の言靈は偉いものだらう。女を賞めて居たら忽ち艶麗な美人が出現しましたぢやないか。噂をすれば影とやら、實に尤物だぞ。どうかしてあいつを旨く虜にし、將軍様の前につき出し、吾々三人が功名手柄をしようぢやないか」

エム「面白いなア、確りしようぞなア。ワク、貴様の婦人反對論者でも、あの美人には一言もあるまい。エーン」

「成程靈光に打たれて頭がワクワクしさうだ。素的のものだな」  
かく話す所へ早くも二人の美人は近よつて来た。

甲女「もしもし、一寸お尋ね致しますが、ランチ將軍様や片彦將軍様の御陣營は、

何方に参りますかな」

コー「ヤア、貴女方は將軍様の所在を尋ねて何となさる御所存ですか」

「會ひさへすればよいのです。私が會つた上で、雨になるか、風になるか、將た

雷鳴か、地震か、今の所では見當がつきませぬ。兔も角も案内をして下さいな」

「用向も聞かずに、うっかり案内をしようものなら大變だなア。ワク、エム、ど

うしようかなア」

ワク「態あ見い、一生懸命女を賞めて居たが、さらばとなればその狼狽方は何だ。

それだから、俺が女は駄目と云つたのだ。こんなものを連れて往かうものなら、

バラモン軍の爆裂弾になるか知れやしないぞ」

乙女「ホ、ホ、ホ、皆さま御心配なさいますな。何と云つても高が女です、立派

な男さまばかりの中へ女が二人位往きましても何が出来ませう。男に對する女、

何と云つても異性が加はらねば、どうしても本當の男の威勢は出ませぬぞ」

コー「さうだなア、ヤ承知致しました。何とまあ、三日月眉で、目のパツチリと

したお色の白い髪の艶と云ひ、まるで天人のやうですワイ」

「ホ、ホ、ホ、ホ、こんなお多福をそのやうに鶯るものぢやありません。どうぞ妾等  
兩人を將軍様の陣營に案内して下さいませいな」

「ハイハイ案内致しませうとも。併しながら貴女のネームを聞かぬ事にや案内の  
仕方がありません。何卒お名乗りを願ひます」

甲女「私は三五教の宣傳使清照姫、も一人は妹分の初稚姫でムります」

「何、清照姫に初稚姫、そいつは大變だ。ヤア平にお断り申します」

「何とまあ、弱い男だこと、女の二人位が恐ろしいのですか」

「ヤア別に恐ろしくもありませんが、お前さまは三五教の女豪傑だ。そんな事を  
云つてバラモン教を潰して仕舞ふ考へだらう。おい、ワク、エム、何うしようか  
なあ」

ワク「ウンさうだなあ」

エム「何うしたものだらう、困つた問題が起つたものだ」

甲女「あゝ辛氣臭い、こんな方に相手になつて居ては駄目だ。さあ初稚姫さま、  
此方から進んで將軍様を訪問致しませう」

此方から進んで將軍様を訪問致しませう

此方から進んで將軍様を訪問致しませう

此方から進んで將軍様を訪問致しませう

「さうですなあ、こんな腰の弱い番卒に交渉やつて居つたつて駄目ですわ、それなら姉さま、参りませう」

と早くも二人は手を引、通り過ぎようとする。コーは慌てて両手を擴げ、大の字になつて小道を踏ん張りながら、

「まあまあ待つて下さい。さう強硬的に出られちや、八尺の男子も顔色無しぢや、エ、仕方がない、御案内致しませう。おいワク、エム兩人、お前は此所に確りと守衛を勤めて居つて呉れ。俺は將軍様の前まで御兩人を御案内して来るから」

エム「手柄を獨占しようとは、ちと蟲がよ過ぎるぞ。一層の事三人寄つて御案内する事にしようかい。後の守衛はテル、ハルの兩人にまかして置けばよいのだ。

おいテル、ハルの兩人、確り守衛を頼むぞ」

テル「私もお供を致しませう」

エム「罷りならぬ。上官の命令だ、怖けりや木の蔭になとすつ込んで待つて居れ。ハルと兩人抱き合つて慄うて居るが好からうぞ」

ハル「ア、仕方がないなあ、テル、強いものの強い、弱いものの弱い時節だから

なあ

エム「こりや兩人、二百五十兩儲けたぢやないか、金の冥加でも二人神妙に守衛をして居るだけの價値はあるぞ」

テル「ハイ」

ハル「仕方がありません」

コ「サア、お二方、御案内を致しませう」

甲乙二女は、叮嚀に會釋し、ニコニコ笑ひながら三人の足跡を踏んで、ランチの陣營さして大膽不敵にも進み行く。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 加藤明子録)

## 第二篇

### 中有見聞

第七章 酔の八衢（一二四〇）

天に輝く日月も 黒雲とざす時は

忽ち其光を没する如く 智仁勇兼備の

三五教の宣傳使治國別も 忽ち妖雲に靈眼を交錯されて

悪虐無道のランチ將軍が 奸計に陥り

暗黒無明の地下の牢獄へ 忽ち顛落し

氣絶せしこそ是非なけれ。

肺臓の呼吸は漸く微弱となり、情動は全くとまると共に、心臓の鼓動休止し、

治國別は龍公と共に、見なれぬ山野を彷徨することとなつた。行くともなしに、

吾想念の向ふまま進んで行くと、一方は屹立せる山嶽、一方は巨大なる岩石に挾

まれた谷間の狭い所に迷ひ込んだ。ここは中有界の入口である。中有界は、善靈、

悪霊の集合地帯である。一名精霊界とも稱へる。

龍公は四邊の不思議な光景に、治國別の袖をひき、

「モシ先生、此處はどこでせうかな。ランチ將軍の奥座敷で酒を呑んで居つたと思へば、局面忽ち一變して、斯様な谷底、何時の間に來たのでせう」

「どうも變だなア、幽かに記憶に残つてゐるが、何でも片彦の案内で、立派な座敷へ入つたと思へば、忽ち暗黒の穴へおち込んだやうな氣がした。ヒヨツとしたら吾々は肉體を脱離して、吾精霊のみが迷つて來たのではあるまいかな」

「何だかチツと空氣が違ふ様ですな。併し斯様な所に居つても仕方ありません。行ける所まで進ませうか」

治國別は少時雙手を組み、幽かな記憶を辿りながら、二つ三つうなづいて、  
「ウンウンさうださうだ、ランチ、片彦將軍の計略にウマウマ乗ぜられ、生命をとられて了つたのだ。ア、困つた事をしたものだな」

「モシ先生、生命をとられた者が、かうして二人生きて居りますか、變な事を仰有いますなア」



「人間界から言へば、所謂命をとられたのだ。併し乍ら人間は靈界に籍をおいてゐる。肉體はホンの精靈の養成所だ。靈界から言へば、死んだのではない、復活したのだ。サア之から吾々が生前に於て、現界にて盡して來た善惡正邪を検査する所があるに違ひない。そこで一つ検査を受けて天國へ昇るか地獄へおとされるかだ」

「エ、そりや大變ですな、マ一度娑婆へ歸る工夫はありますまいかな」

「何事も神素盞鳴の大神様の御心の儘だから、精靈界にふみ迷ふも、或は天國へ復活するも、現實界へ逆戻りするのも、吾々人間の左右し得べき所でない。最早かくなる上は、神様にお任せするより道はなからうよ」

「私はあなたから、死後の世界があると云ふ事は聞いて居りましたが、斯うハツキリと死後の生涯を續けるとは思ひませなんだ。氣體的の體を保ち、フワリフワリと中空をさまよふものだと考へて居りましたが、今となつては、吾々の觸覺といひ、知覺といひ、想念といひ、情動といひ、愛の心といひ、生前よりも層一層的確になつたやうな心持が致します。實に不思議ぢやありませんか。死後の世界

はあると云ふ事は承はつて居りましたなれど、是程ハツキリした世界とは思ひませなんだ」

「人間の肉體は所謂精靈の容物だ。精靈の中には天國へ昇つて天人となるのもあれば、地獄へおちて鬼となるのもある。天人になるべき靈を稱して、肉體の方面から之を本守護神と云ひ、善良なる精靈を稱して正守護神といひ、惡の精靈を稱して副守護神と云ふのだ」

「人間の體の中には、さう本正副と三色も人格が分つて居るのですか」

「マアそんなものだ。吾々は天人たるべき素養を持つてゐるのだが、肉體のある中に天人になつて、高天原の團體に籍をおく者は極めて稀だ。今の人間は大抵皆地獄に籍をおいてゐる者ばかりだ、少しマシな者でも、漸くに精靈界に籍をおく位なものだよ。此精靈界に於て善惡正邪を審かれるのだから、最早過去の罪を償ふ術もない。あゝ之を思へば、人間は肉體のある中に、一つでも善い事をしておきたいものだなア」

かく話す所へどこともなく、一人の守衛が現はれて來た。

守衛は治國別に向ひ、

「あなたは三五教の治國別様では△いませぬか」

「ハイ左様で△います。エ、一寸お尋ね致しますが、ここは天の八衢ではございませぬかな」

「お察しの通り、ここは精靈界の八衢で△います、サア是から關所へ案内を致しませう」

「有難う△います。オイ龍公、ヤハリ吾々は最早娑婆の人間ぢやないのだよ。覺悟せなくちや可けないよ」

「假令八衢へ來た所で、此通り意思想念共に健全なる以上は、決して死んだのぢやありませんから、何とも思ひませぬワ」

「龍公さまとやら、お氣の毒ながら、あなたは八衢に於て少しく暇取るかも知れませぬ。そして治國別様とお別れにならなきやならないでせう」

「エ、何と仰有います、別れよと仰有つても私は治國別様の家來ですから、どこ迄も伴いて行きます。家來が主人の後へ従いて行かれぬと云ふ、何程靈界でもそ

んな道理はありますまい」

「それは御尤もですが、併しながら貴方の善と信と智慧と證覺とが、治國別様と同程度になつて居れば、無論放さうと思つても放れるものぢやありません。併しながら貴方の圓相が餘程治國別様に比べて見劣りが致しますから、私の考へでは、どうも御一緒は六かしいやうに感じられます。併しながら八衢の關所までお出になつて、伊吹戸主の神様のお審きを受けねば、到底私では決定を與へる事は出来ませぬ。又決定を與へる文の資格も權能もありませんからなア」

治國「惟神靈幸倍坐世、三五教を守り給ふ國治立の大神、豊國主の大神、守り給へ幸はへ給へ」

龍公はしきりに、

「惟神靈幸はへませ。一二三四五六七八九十百千萬」

と數歌をうたふ。守衛は谷道に立止まり、

「治國別様、此龍公さまをあなたにお任せ致しますから、どうぞ此處をズツと東へ取つてお出で下さいませ。少しくあの山をお廻りになると、稍平かな所がムい

ます。そこが天の八衢の關所で△いますから、私は之から又次へ出て来る連中が  
ありますから、それを案内して來ます。左様なら、之で失禮を……」

と言ひながら電光石火の如く、空中に一の字を畫いて、光となつて西方指して飛  
んで行く。二人は崎嶇たる山道をドシドシと、三十丁ばかり登りつめた。見れば  
萬公が首を傾け、口をポカンとあけ、憂鬱氣分で此方を指して進んで来るのを、  
四五間ばかり手前で見つけた。龍公は、治國別の袖をひいて、

「モシ先生、あこへ来るのは萬公ぢやありませんか。何だか心配らしい顔をして  
歩いて來るぢやありませんか」

「ウン確に萬公だ、併しながら言葉をかけちやいかないよ。向ふが【もの】言ふ  
まで黙つてゐるがいい。先方が【もの】言つても、こちらは【もの】言つちや可  
けないよ」

かく話す折しも、萬公は行步蹣跚として、二人の前に立ちふさがり不思議相な  
顔をして、二人を眺めてゐる。治國別は心の内にて、天の數歌を奏上してゐる。

龍公はあわてて、治國別の戒めた事を打忘れ、

「オイ萬公ぢやないか、何だみつともない、其ザマは、シツカリせぬかい」  
と背中をポンと叩きかけた拍子に、萬公はプスツと煙の如くに消えて了つた。

「ア、萬公かと思へば、何だ、化物だなア。ヤツパリ靈界は靈界だなア。萬公に冥土の狐奴、化けてゐやがつたのだなア」

「エ、仕方のない男だなア、ありや萬公に間違ひないのだ。肉體はまだ現界に居つて精靈のみが俺達の身の上を案じて、捜しに来てゐるのだ。肉體のある精靈に言葉をかけるものぢやない。肉體のある精靈は靈界にゐる者が言葉をかければ、

すぐに消えるものだ。それだから俺が氣をつけておいたのに、困つた男だな、これから伊吹戸主の神様の關所へ行くのだから、餘程心得ないと可かないぞ」

「ハイ、キツと心得ます。あなたがモシヤ天國へお出でになつたら、私をどこ迄も伴れて行つて下さりませうねエ」

「どこへ俺が行つても従いて來るといふ眞心があるのか、それなら俺は若も天國へ行く時には、八衢の神に願つて伴れてゆく。併しながら、俺も随分若い時にウラル教で惡事をやつて來た者だから、善惡のハカリにかけられたら、大抵は地獄

行だ。地獄へ落ちてもついて来るかなア。萬劫末代上れない惡臭紛々たる餓鬼道

へおちても従いて来る考へか

先生がメツタにそんな所へ落ちなさる氣遣ひがありますものか。どこ迄もお供を致します

地獄へでもついて来るなア

ハイ、従いて行きます。其代りにモシモ私が地獄へ落ちた時には、先生もついて来てくれますだらうなア

そりやキマつた事だ。お前を見すてて行く事が何うして出来よう。靈界も現界も凡て愛といふものが生命だ。愛を離れては天人だつて、精靈だつて、人間だつ

て存在は許されないのだ

あゝそれを聞いて安心致しました。どうぞ、どこ迄も私を伴って行って下さい

ヤア、あこに赤門が見える、どうやらアコが關所らしいぞ。サア急いで行かう

治國別は先に立つて進んで行く。赤門の側へ近付いて見れば、二人の守衛が立つてゐる。一人は光明輝く優しい顔付の男とも女とも知れぬ者、一人は赤面の唐

辛をかんだやうな顔した男、衡の前に儼然として控へてゐる。

「ヤア皆さま、御苦勞ですなア、ここで吾々の罪の輕重を査べて頂くのですかな」  
「優しき守衛は面色を和らげて、

「イ、ヤ、あなたは査べるには及びませぬ、どうぞ奥へお通り下さいませ……」  
「人のお方、一寸ここへ残つて下さい。査べますから……」

「ヤア此奴ア大變だ。サ先生、斷り云つて下さいな」

「靈界の規則だから仕方がないワ。先づ地獄行か天國行か査べて貰ふがよからうぞ」

「モシモシ、門番さま、現代の娑婆では何事も簡略を尊びますから、そんな看貫でかけるよな七面倒臭い事はおやめになつたら何うですか」

「赤顔の守衛はグルリと目をむき、龍公を睨みつけながら、  
「不届き者ツ、靈界の法則を蹂躪するかツ」

と呶鳴りつける。龍公はちぢみ上り、不承不承にカンカンの上へ身を載せた。一方は地獄行、一方は天國行と金文字で記してある。



「地獄行の方が下つたら、氣の毒ながら、之から苦しい暗い所へ落ちて貰はにや  
なりませぬ。又天國行の方が重かつたら、天國へ行つて貰ひませう。ここは一厘  
一毛も掛値のない、正直一方の裁判所だから、地獄へ假令落ちて、決して無實  
の罪ぢやないから、満足だらう」  
と云ひつつ、懷から帳面を出して、

「三五教の信者龍公龍公」

と、厚い緯に長い帳面を繰り廣げてゐる。

「ハ、ア、お前はアーメニヤの生れだな、そしてウラル教に這入つて居つたな。  
随分後家倒しや女殺をやつて來たとみえる。チャンとここに記いてゐるぞ」

「モシモシ善の方面を一つ査べて下さい」

「宜しい、ハ、ア、善の方は丸がしてある」

「ヤア有難い、満點ですかア」

「なに、零點だ。零點以下廿七度といふ冷酷漢だと見えるわい。氣の毒ながらマ

ア地獄行かなア、併し未だお前は生死簿には死期が來てゐない。まだ五六十一年は

娑婆で活動すべき代物だ。娑婆へ歸つたならば、地獄へ落ちない様に、善を行ひ、神を信仰し、人の爲に誠を盡すがよからうぞ。今此儘で肉體を離れようものなら、氣の毒ながら地獄落だ」

「エ、さうすると、マ一度娑婆へ歸れますかな」

「まだ心臓に微弱な鼓動が繼續してゐる、そして肺の呼吸も微弱ながら存在してゐるから、キット娑婆へ歸るだらう」

「ヤア、それは有難い、併し宣傳使さまは何うですか。一寸帳面を調べて下さいませぬか」

「宣傳使様は天國行の靈だから、此帳面には記してない。モシ白さま、あなた一寸調べて見て下さい」

「白い顔の守衛は懐から帳面を取出し、  
三五教三五教」

と云ひながら、見出しを讀み中程をパツとめくつて、  
「ヤア此方もまだ、壽命がありますわい。現世に於てまだまだ數十年、活動して

貰はなくちや、ハア、なりませぬよ。併しながら、伊吹戸主の神様の御意見を聞かなくちやシツカリしたこた言へませぬワ」

「私の罪の測量は免除して下さいませぬならうな」

「エ、今すぐに地獄へやるべき精霊でもないから、查べた所で駄目だ。数十年の後に更めて八力る事にしませう」

「ヤアそりや有難い、皆さま、エライお氣をもませました」

「ハ、、、吾々は日々之が役目だから、別に氣も揉ましないが、お前は随分氣をmondadaraう」

「モシ先生、今の白い守衛のお言葉をお聞になりましたか、あなたは今から天國の資格がある相ですなア」

「ヤア實に汗顔の至りだ。まだ壽命があるさうだから、モ一度現界へ往つて、大神様の爲、世の中の爲に、一働きをさして頂かうかなア」

「斯く話す所へ、へべレケに酔うた一人の男、行歩蹒跚として八衢の赤門にドンと行當り、

「ド、ドイツぢやい、バ、バカにすない、俺を誰だと考へてゐる？ おれはヤケ酒の權と云つたら、誰知らぬ者のない哥兄さまだぞ、エ、ーン、こんな所へ赤い門を立てやがつて、往來の妨げをするといふ事があるかい。叩きこはせ叩きこはせ」

「コリヤ コリヤ、ヤケ酒の權太とやら、ここを何處ぢやと心得てゐる」  
「ドコモ、クソもあつたものけえ、ここは帝大の入口だ、赤門ぢやないか。俺が酒に酔うと思つて餘り馬鹿にするない、俺だつて足があるのだから、赤門位はくぐるのだからなア。永らく校番を勤めて居つたのだから、學士連中よりも赤門の勝手はよく知つてゐるのだい。何時の間に門番奴、代りやがつたのだ、エ、ーン、何だ其面ア、眞白けな面しやがつて、男だてら白粉をぬり、チツクをつけ、おれやそれが癩にさはつてたまらぬのだ。今の學士や青年に學生といふ奴ア、皆貴様のやうな代物ばかりだ。何でえ、そんなコハイシヤツ面しやがつて、睨んで、何が恐いか、江戸つ兒の哥兄さまだぞ。鬼瓦みたやうな面しやがつて、門番が酒に酔つぱらつてそんな赤い顔するといふ事があるかい。今日から免職だ。」

サア、トツトと去ね……」

赤「コリヤコリヤ權太、ここは冥土の八衢だぞ。何と心得て居るか」

「ヤア、成程、道理でチツトそこらの様子が違ふと思つて居つたワ。どこぞ、こ  
こらにコツプ酒でも賣つてる所はないか、エ、ー、チツト案内してくれたら何う  
だ」

「此奴ア、餘り、酔うてゐるので手に合はぬ。コレ白さま、一寸伊吹戸主の大神  
様に、何う致しませうと云つて伺つて來て下さらぬか」

白はうなづきながら門内に姿を隠した。暫くすると、金冠を頂いた佛畫でみる  
閻魔大王の如き嚴しい容貌をした伊吹戸主の神、四邊を光明に照しながら、悠々  
と現はれ給うた。此光明に照らされて、龍公は目もくらむばかり、ヨロヨロと大  
地に倒れ、地上にかぶりついて慄うてゐる。治國別は莞爾として判神に向ひ、叮  
嚀に會釋してゐる。判神も亦治國別に向つて禮を返した。  
赤「コリヤ權太、伊吹戸主様のお出ました。サア此處で其方の罪を查べるのだか  
ら、此衡にかかれ」

「こりや衡をようせよ、八カ리가悪いと地獄へ落ちるぞ。高い高い酒を賣りやつて、八カリで誤魔化さうと思つても駄目だ。朝から晩まで汗水たらして働き、日の暮になつて、一日の疲れを休むべく大切の金を使つて、俺たち貧乏人は酒を買ひに行くのだ。それに八カリを悪うすると冥加が悪いぞ」

「チエツ、エ、まだ酔うてゐやがる。コリヤここは地獄の八丁目だぞ」  
「地ゴク御尤もだ、八升でも九升でも、タダの酒なら何ほでも持つて來いだ、メツタにあとへは引かぬのだからなア」

赤は劫をにやし、ピシヤツと横面を力に任せて擲りつけた。權太はビックリして、ハツと氣がつけば、光明輝く判神が儼然と吾前に立つてゐる。そして赤鬼が衡を持つて大きな目で睨みつけてゐる。

「モシ、ここは何といふ所でムいます」  
「目が醒めたか、ここは八衢だ、今其方の娑婆に於ける行ひの善惡を調べて、之から地獄へやるか、天國へ救うてやるかといふ所だ。サア判神様の前だ、神妙にこの衡の上にのれ。そして正直に白状するのだぞ。其方の娑婆に於て盡した善惡

は全部此處につけとめてあるから、正直に申上げよ」

「ハイ、申上げます、私は……エ……権太と申すのは仇名でムいまして、……

エー實は、酔どれの熊公と申しやす」

「成程、それに間違ひない、其方は餘り酒に喰ひ酔うて、社會的勤めを致さない

によつて、お寅といふ女房に逃げられた事があらうがな」

「ハイ恐れ入りました。確にムいます」

「そして其後其方は焼糞になり、隣の屋敷迄抵當に入れて金を借り、皆呑んで了

つただらう」

「ハイ、夫れに相違はムいませぬ」

「それから浮木の村で其方の女房だつたお寅が侠客をして居つた時、幾度も酒に

酔うてグヅを巻きに行つたであらうがな」

「ハイ、それも其通りでムいます」

「併し何時とても袋叩きに遇ひ、無念をこらへて辛抱致した、それ丈は感心だ。

此忍耐力に仍つて、今迄の悪事は棒引だ」

「ハイ有難うムいます」

「それから其方は小北山のウラナイ教の本山に行つて、お寅と蝶螻別を脅迫し、一千兩の金をフンだくり、皆呑んで了つたであらうがな」

「ハイ、それに相違はムいませぬ」

「なぜさういふ悪い事を致すのか」

と聲を尖らして言ふ。

「餘リムカツパラが立つてたまりませぬので、ウ、ウ、ウ、ついグヅつてやる氣になりました。どうせお寅婆アの事だから、一文生中も出す氣遣はひない……が……」

「……ダダでもこねて、無念晴しをしようと思ひやして、一寸試みにゴロついでみた處、悪黨婆アに似合はず意外にも氣が折れて、一千兩くれましたので、これ幸ひと懐にたくし込み、それから呑んで呑んで呑み續けました。まだここに五百兩ばかり残つてゐます、どうぞ、……地獄の沙汰も金次第と言ひますさうですから、」

「此金をあなたに上げますから、……地獄行丈はこらへて下さいませ……」

「馬鹿を申せ、至正至直、寸毫も虚偽を許さぬ此八衢に於て、賄賂を提供すると」



は以ての外だ。其方がお寅から奪ひとつた一千兩の罪は實に重いけれど、其爲には  
お寅婆アと魔我彦とに改心の動機を與へた功德に仍つて、其方の功罪を比較し、  
第三天國へ遣はすべき所であつたが、此神聖なる八衢に於て賄賂を使はむと致し  
た罪に仍つて、ヤツパリ地獄落だ。有難う思へ  
「それなら、モウ此五百兩は提供しませぬから、どうぞ天國へやつて下さい。頼  
みます」

「モシ伊吹戸主の神様、如何取計らひませうか」

「此權太事、酔どれの熊はまだ五百兩の酒代を殘してゐるから、此金がなくなる迄  
娑婆へ歸してやつたがよからう。冥土へかやうなムサ苦しい金などを持ち込まれ  
ては、大變だから……」

「コリヤ權太、其方はまだここへ來るのは早い、此五百兩の金がとこ、酒を呑  
で了ふ迄、娑婆へ歸つたがよからう。長生きがしたくば、此金を使はずに、酒を  
辛抱して居つたがよからうぞ」

「ハイ有難うございます、併しながら何程死ぬのが厭だと云つても、現在五百兩

の金を持ちながら呑みたい酒を呑まずに居れませうか。それならコレからマ一度娑婆へ出てお酒を頂戴して参ります」

赤は、

「サア早く歸れ」

と云ひさま、背中をポンと叩いた拍子に、權太は煙となつて消えて了つた。權太の熊公はお寅から奪ひ取つた金で酒を呑み歩き、衣笠村の酒屋の門口でブツ倒れ、一時は人時不省になつてゐたが、漸く目がさめ、

「あゝあ、怖い夢を見た。モウ酒はコリコリだ」

と言ひながら、懐から金を取り出し、人通の多い街道に出で、乞食らしい者の通る前に一圓二圓とまきちらし、施しをなし、遂には善良なる三五教の信者となり、善人の評判を取つて一生を送る事となつた。此熊公の物語は後に述べる事があるであらうと思ふ。あゝ惟神靈幸はへませ。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 松村眞澄録)

第八章 中有（一二四一）

人間が此世にギヤツと生るるや、其意思の方面から見た時は即ち其吾の儘なる時は惡き事ばかりである。人間は何程立派に博愛だ、善道だ、忠だ、孝だと云つて居つても、詮じつめれば、只自己のみ都合の好い事ばかりを考へて容易に他の事を顧みないものである。斯の如く己のみ良からむ事を願ふ利己心の強い人間は他人の不幸を見て、結句心地よく思ふものが多い様である。他人の不幸が却て自分等の利益となる場合には殊更に福でも降つて來た様に思つて北叟笑をするものである。何故なれば、かかる利己的の人間は總じて他人の利福や名譽たると財力たるとを問はず、何とかして自分の所有になさむ事をのみ願ふものである。かかる不善なる意思を根本的に改めて善に遷らしめむが爲に、誠の神様より人間に對し諸々の眞理を會得すべき直日の靈の力を賦與されてあるものである。此眞理を判別する所の直日の靈の光によつて、其意思より起る所の一切不善の情動を覆滅し斷絶せしめむとし給ふのである。人間が天賦の智性中の眞、未だ意思中の善と

相和合せざる時は所謂中程の状態にあるものだ、現世の人間は大抵此状態に居る者が多い。彼等は眞理の何たるを知り、又知識の上や理性の上にて眞理を思惟する事は出来るけれども、其實地行ふ所の眞理に至つては、或は多く或は少なく又絶無なるものがある。或は悪を愛する心即ち虚偽の信仰よりして眞理に背反せる動作をなすものがある。故に人間は高天原と根底の國との何れか一方に適従する所あらしめむが爲め、靈肉脱離後即ち死後先づ中有界一名精靈界に導き入れられるものである。高天原に上るべきものには此中有界に於て善と眞との和合が行はれ、又根底の國へ投げ入れらるべき精靈には此八衢に於て悪と虚偽との和合が行はれるものである。何故なれば高天原に於ても根底の國に於ても善悪不決定の心を有する事を許されないからである。即ち智性上に此を思つて意思の上には必ず如き事は許されない。必ずや其志す所を諒知し其知る所を志願せなくてはならない事になつてゐるからである。治國別、龍公兩人が今や精靈界に進み、天界地獄の中間状態にその身を置いて伊吹戸主神に種々の靈界の消息を承はつた其大略を此處に述べる事とする。

先づ地獄界の入口は如何なるものなりやを示すならば、一切の地獄界は此精靈界の方面に對しては硬く塞がつてゐるものである。只僅かに岩間の虚隙に似たる穴があり裂け口があり、或は大なる門戸があつて暗い道が僅かに通じ紛々たる臭氣を帯びた風が吹いてゐるのみである。地獄の入口には守衛が厳しく立つてゐて、猥りに人間の出入するを許さないことになつてゐる。故に地獄界を探險せむとせば、伊吹戸主神の許しを受けなくてはならない。之も容易には許されない事になつてゐる。

一旦現界へ歸つて現界の人間に靈界の事を説き諭す宣傳使か、或は緊急の必要ある場合に限つて許さるるものである。瑞月が高熊山の聖場に於て地獄界を探險したのも矢張り八衢の神の許可を受けて行く事を得たのである。高天原へ上る道も亦四方が塞がり高天原の諸團體に通ずべき道は、容易に見當らないのである。僅かに一條の小さい道が通つてあつて守衛が之を守つてゐる。然しながら高天原へ上るべき資格のないものの目には到底見る事は出来ないものである。又中有界は山嶽と岩石との間にある険しい谷に似た所が多い。此處彼處に折れ曲りの所が

澤山たくさんにあり、又また非常ひじやうに高たかい處ところや低ひくく窪くぼんだ處ところもある。或あるひは大川おほかはが流ながれ或あるひは深ふかい谷たにがあり、廣野くわうやがあり種々しゆじゆざつた雑多けしきの景色てんかいが展開てんかいしてゐる。そして高天原たかあまはらの諸團體しよだんたいに通つうずる諸々もろもろの入口いりぐちは、高天原たかあまはらに上のぼるべき準備じゆんびを終をへたる天人てんにんの資格しかくを持つてゐる者ものでなくては見みる事ことは出で来きない。故ゆゑに中ちゆう有う界かいに迷まようてゐる精靈せいれいや地獄行ぢごくゆきの精靈せいれいの目めには到底たうてい發見はつけんする事ことは出で来き得えないのである。精靈界せいれいかいから天國てんこくの各團體かくだんたいに通つうずべき入口いりぐちは只一筋ただひとすぢの細い道みちがあるばかりである。此道このみちをダンダンと上のぼり行ゆくに從したがつて道みちは分わかれて數條すうてうとなり、追々おひおひ分わかれて幾十條いくじふてうとも分わからなく各團體かくだんたいにそれぞれそれぞれの道みちが通つうじてゐるのである。又また根底ねそこの國くにに通かよふ所ところの入口いりぐちは、之これに入いるべき精靈せいれいの爲ために開ひらかるるものであるから、其外そのほかの者ものは其入口そのいりぐちを見みる事ことは出で来きない。入口いりぐちの開ひらくのを見みれば薄暗うすくらうて恰あたかも煤すすけた蜂はちの巢すの樣やうに見みえて居ゐる。さうして斜ななめに下向かかうしておひおひと深ふかい暗くらい穴あなへ這は入いつて行ゆく事ことになつてゐる。此暗このくらい入口いりぐちを探さぐり探さぐりて下くだつて行ゆくと、先さきになつて又また數個すうこの入口いりぐちが開あいてゐる。此入口このいりぐちの穴あなから惡臭あくしう紛々ぶんぶんとして鼻はなをつき出でて來くる其不快そのふくわいさ、自然しぜんに鼻はなが曲まがり息塞いきふさがり眉毛まゆげが枯かれる樣やうな感かんじがして來くるものである。故ゆゑに善靈ぜんれい即すなはち正守護神せいしゆごじんは甚はなはだしく之これを忌いみ嫌きらふが故ゆゑに此

悪臭を嗅ぐやいなや恐れて一目散に走り逃げ去るものである。然し乍ら地獄の團體に籍をおいてゐる惡靈即ち副守護神は、此暗黒にして惡臭紛々たるを此上なく悦び樂しむが故に、喜んで之を求め勇んで地獄の入口に飛び込むものである。世間の大方の人間が己の自性に屬する惡を喜ぶ如く、死後靈界に至れば其惡に相應せる惡臭を嗅ぐ事を喜ぶものである。此點に於ては彼等惡靈の人間は貪婪飽くなき驚や鷹、狼、虎、獅子、豚の類に比ぶべきものである。彼等の精靈は腐つた屍骸や堆糞等の嘔吐を催さむとする至臭至穢物を此上なく喜び、其臭氣を尋ねて糞蠅の如くに集まつて來るものである。是等の人間の靈身は高天原の天人の氣息や芳香に合ふ時は、内心の苦しみに堪へず悲鳴をあげて泣き倒れ苦しみ悶えるものである。實に大本開祖の神示にある身魂相應の神の規則とは實に至言と云ふべしである。凡て人間には二箇の門が開かれてある。さうして其一つは高天原に向つて開き、一つは根底の國に向つて開いてゐる。高天原に向つて開く門口は愛の善と信の眞とを入れむがために開かれ、一つは所在惡業と虚偽とに居るものの爲めに地獄の門が開かれてあるのだ。さうして高天原より流れ來る所の神様の光明は

上方じやうほうの隙間すきまから僅わづかに數條すうじょうの線光せんくわうが下さがつて居ゐるに過すぎない。人間にんげんがよく思惟しゐし究きう理りし言説げんせつするは此この光明くわうみやうによるものである。善ぜんに居をり又また従したがつて眞しんに居をるものは自おのづから高天原たかあまはらの門戸もんこは開ひらかれてゐるものである。

人間にんげんの理性心りせいしんに達たつする道みちは内外ないぐわいふた二につに分わかれて居ゐる。最もつとも高たかき道みち即すなはち内分ないぶんの道みちは愛あいの善ぜんと信しんの眞しんとが大おほかみより直接ちよくせつに入り來くる道みちである、さうして一ひとつは低ひくい道みち、即すなはち外部ぐわいぶの道みちである。此この道みちは根底ねそこの國くにより所在あらゆる罪惡ざいあくと虚偽きよぎとが忍しのび入いるの道みちである。此この内部外部ないぶぐわいぶの道みちの中間ちうかんに位くらゐして居ゐるのが所謂いはゆる理性心りせいしんである。以上いじやうふた二につの道みちは之これに向むかつてゐる故ゆゑに高天原たかあまはらより大神おほかみの光明くわうみやう入り來きたる限かぎり人間にんげんは理り性せい的てきなる事ことを得うれども、此この光明くわうみやうを拒こほみて入いれなかつたならば其人間そのにんげんは自じ分ぶんが何程なにほど理り性せい的てきなりと思おもふとも其その實じつ性せいに於おいては已すでに已すでに滅ほろびて居ゐるものである。人間にんげんの理り性せい心しんと云いふものは、其その成なり立たちの最さい初しよに當あたつて必かならず精靈界せいれいかいに相さう應おうするものである。故ゆゑに其その上うへにある所ところのものものは高天原たかあまはらに相さう應おうし、其その下したにあるものは必かならず根底ねそこの國くにへ相さう應おうするものである。高天原たかあまはらへ上のぼり得うる準備じゆんびを成なせるものにあつては、其その上方じやうほうの事じぶつ物がよく開ひらけて居ゐるけれども、下か方ほうの事じぶつ物は全まつた全まく閉塞へいそくして、罪惡ざいあくや虚偽きよぎの内流ないりうを受うけないものである。



之に反し根底の國へ陥るべき準備をなせるものにあつては、低き道即ち下方の事物は開けて居るが内部の道即ち上方の事物、靈的方面は全く閉鎖せるが故に愛善と信眞の内流を受ける事が出来ない。之を以て前者は只頭上即ち高天原を仰ぎ望み得れども、後者は只脚下即ち根底の國を望み見るより外に途はないのである。さうして頭上を仰ぎ望むは即ち大神を拜し靈光に觸れ無限の歡喜に浴し得れども、脚下即ち下方を望むものは誠の神に背いて居る身魂である。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 北村隆光録)

## 第九章 愛と信(一・二・四二)

大本開祖の聖言には愛の善と信の眞とを骨子として説かれてある事は神諭を拜讀した人のよく知る所なれば、今更口述者が改めて述べる迄もないから、其聖言は略する事とする。

善ぜんとは即すなはち此この世よの造つくり主ぬしなる大おほ神かみの御ご神しん格かくより流りう入にふし來きたる神しん善ぜんである。此この神しん善ぜんは即すなはち愛あい其そのものである。真しんとは同おなじく大おほ神かみの御ご神しん格かくより流りう入にふし來きたる所ところの神しん真しんである。此この神しん真しんは即すなはち信しんである。さうして其その愛あいにも善ぜんが有あり惡あくが有ある。愛あいの善ぜんとは即すなはち靈れい主しゆ體たい從じう、神かみより出いでたる愛あいであり、愛あい惡あくとは體たい主しゆ靈れい體じうと云いつて自し然ぜん界かいに於おける自じ愛あい又または世せ間けん愛あいを云いふのである。今いま口こう述じゆつ者しやが述のぶる世せ間けん愛あいとは決けつして世よの中なかの所謂いはゆる博はく愛あいや慈じ善ぜん的てき救きう濟さいを云いふのではない。己おのが種しゆ族ぞくを愛あいし、或あるひは郷きやう里りを愛あいし、國こく土どを愛あいする爲ために他たを虐しひた、或あるひは亡ほろぼして自じ己こ團だん體たいの安あん全ぜんを守まもる偏へん狹けふ的てき愛あいを指さしたのである。それから又また信しん仰かうには真しんと偽ぎとが有ある。真しんの信しん仰かうとは心こころの底そこから神かみを理り解いし、神かみを愛あいし、神かみを信しんじ、且かつ死し後ごの生しやう涯がいを固かたく信しんじて神かみの御み子こたる本ほん分ぶんを盡つくし、何なに事ごとも神かみ第だい一いちとする所ところの信しん仰かうである。又また偽いつはりの信しん仰かうとは所謂いはゆる偽ぎ善ぜん者しや共どもの其その善ぜん行かうを飾かざる武ぶ器きとして内ない心しんに惡あくを包ほう藏ざうしながら、表へう面めん宗しう教けうを信しんじ神かみを禮らい拜はいし、或あるひは宮ぐう寺じなどに寄き附ふ金きんをなし、其その金きん額がくを石いし又または立たて札ふだに記しるさしめて、自じ分ぶんの器き量りやうを誇ほこる所ところの信しん仰かうである。或あるひは商しやう業げふ上じやうの便べん利りのため、或あるひはわが處しよ世せい上じやうの都つ合がふのため、表へう面めん信しん仰かうを装よそふ横わつち着やく者ものの所しよ爲ゐを稱しやうして偽いつはりの信しん仰かうと云いふのである。要えうするに神しん佛ぶつを

松魚節として自愛の道を遂行せむとする悪魔の所爲を云ふのである。斯くの如き  
信仰は神に罪を重ね自ら地獄の門扉を開く醜行である。眞の神は愛善と信眞の中  
にこそましませ自愛や偽信の中にまします筈はない、斯る自愛や偽信の中に潜入  
する神は所謂八岐大蛇、悪狐悪鬼餓鬼畜生の部類である。高天原の天國及び靈國  
にあつては人の言葉皆其心より出づるものであるから、其云ふ所は思ふ所であり、  
思ふ處は即ち云ふ所である。心の中に三を念じて口に一つを云ふ事は出来ない。  
是が高天原の規則である、今天國と云つたのは日の國の事であり、靈國と云つた  
のは月の國の事である。

眞の神は月の國に於ては瑞の御靈の大神と現はれ給ひ、日の國に於ては嚴の御  
靈の大神と現はれ給ふ。さうして嚴の御靈の大神のみを認めて瑞の御靈の大神を  
否むが如き信條の上に安心立命を得むとするものは、残らず高天原の圏外に放り  
出されるものである。斯くの如き人間は高天原より嘗て何等の内流なき故に次第  
に思索力を失ひ、何事につけても正當なる思念を有し得ざるに立ち至り、遂には  
精神衰弱して唾の如くなり、或は其云ふ所は癡呆の如くになつて歩々進まず、其

手は垂れて頻りに慄ひ戦き、四肢關節は全く力を失ひ、餓鬼幽靈の如くなつて仕舞ふものである。又瑞の御靈の神格を無視し、其人格のみを認むるものも同様である。天地の統御神たる日の國にまします嚴の御靈に屬する一切の事物は残らず瑞の御靈の大神の支配權に屬して居るのである。故に瑞の御靈の大神は大國常立大神を初め日の大神、月の大神其外一切の神權を一身にあつめて宇宙に神臨したまふのである。此大神は天上を統御したまふと共に、中有界、現界、地獄をも統御したまふは當然の理である事を思はねばならぬ。さうして嚴の御靈の大神は萬物の父であり、瑞の御靈の大神は萬物の母である。總て高天原は此神々の神格によつて形成せられて居るものである。故に瑞の御靈の聖言にも「我を信ずるものは無窮の生命を得、信ぜざるものは其生命を見ず」と示されて居る。又「我は復活なり、生命なり、愛なり、信なり、道なり」と示されてある。然るに不信仰の輩は高天原に於ける幸福とは、只自己の幸福と威力にありとのみ思ふものである。瑞の御靈の大神は、總ての神々の御神格を一身に集注したまふが故に、其の神より起り來る所の御神格によつて高天原の全體は成就し、又個々の分體が成就して

居るのである。人間の靈體、肉體も此神の神格によつて成就して居るのは無論のことである。さうして瑞の御靈の大神より起り來る所の神格とは即ち愛の善と信の眞とである。高天原に住める天人は、總て此神の善と眞とを完全に攝受して生命を永遠に保存して居るのである。さうして高天原はこの神々によつて完全に圓滿に構成せらるるのである。

現界の人間自身の志す所、爲す所の善なるもの又思ふ所、信ずる所の眞なるものは、神の御目より御覽したまふ時は、其善も決して善でなく、其眞も決して眞でない、瑞の御靈の大神の御神格によりてのみ、善たり眞たるを得るものである。人間自身より生ずる善又は眞は、御神格より來る所の活力を缺いで居るからである。御神格の内流を見得し、感得し、攝受して茲に立派なる高天原の天人となる事を得るのである。さうして人間には一靈四魂と云ふものがある。一靈とは即ち眞靈であり、神直日、大直日と稱するのである。さうして神直日とは神様特有の直靈であり、大直日とは人間が神格の流入を攝受したる直靈を云ふのである。さうして四魂とは和魂、幸魂、奇魂、荒魂を云ふのである。この四魂は人間は云ふ

に及ばず、高天原にも現實の地球の上にも夫々の守護神として儼存しあるのである。そして荒魂は勇を司り、和魂は親を司り、奇魂は智を司り、幸魂は愛を司る。さうして信の眞は四魂の本體となり愛の善は四魂の用となつて居る。さうして直靈は瑞の御靈の大神の御神格の御内流即ち直流入された神力である。故に瑞の御靈の御神格は總ての生命の原頭とならせたまふものである。此大神より人間に起來するものは神善と神眞である。故に吾々人間の運命は此神より來る神善と神眞を、如何に攝受するかによつて定まるものである。そこで信仰と生命とにあつて是を受くるものは其中に高天原を顯現し、又之を否むものは已むを得ずして地獄界を現出するのである。神善を惡となし、神眞を偽りとなし、生を死となすものは又地獄を現出しなくては已まない。現代の學者は何れも自然界の法則や統計的の頭腦をもつて不可測、不可説なる靈界の事象をおほけなくも測量せむとなし、瑞の御靈の神示を否むものは暗愚迷妄の徒にして所謂盲目學者と云ふべき厄介ものである。到底靈界の事は現實界の規則をもつて窺知し得べからざる事を悟らな

いたためである。神は斯の如き人間を見て癡狂者となし、或は癡呆となして救濟の

道なきを悲しみ給ふものである。斯かる人間は總て其精靈を地獄の團體に所屬せしめて居るのである。斯かる盲學者は神の内流を受けて傳達したる靈界物語のある個所を摘發して吾知識の足らざるを顧みず、種々雑多と批評を加へ、甚だしきは不徹底なる自己の考察力をもつて之を葬り去らむとする罪惡者である。高天原の團體に其籍を置き、現代に於て既に天人の列に列したる人間の精靈は吾人の生命及び一切の生命は瑞の御靈の御神格より起來せる道理を證覺し、世にある一切のものは善と眞とに相關する事を知覺して居るものである、斯かる人格者の精靈を稱して地上の天人と云ふのである。

人間の意思的生涯は愛の生涯であつて善と相關し、知性的生涯は信仰の生涯にして眞と相關するものである、さうして一切の善と眞とは皆高天原より來るものであり、生命一切の事又高天原より來る事を悟り得るのが天人である。故に靈界の天人も、地上の天人も右の道理を堅く信ずるが故に、其善行に對して他人の感謝を受ける事を悦ばないものである、もし人あつて是等の諸善行を彼の天人等の所有に歸せむとする時は天人は大に怒つて引退するものである。人の知識や人の

善行は皆其人自してしかるものと信ずる如きは悪靈の考へにして到底天人共の解し得ざる所である。故に自己のためになす所の善は決して善ではない、何となれば夫れは自己の所爲なるが故である。されど自己のためにせず善のためになせる善は所謂神格の内流より来る所の善である。高天原は斯の如き善即ち神格によつて成立して居るものである。

人間在世の時に於て自らなせる善、自ら信ずる眞をもつて、實に自らの胸中より来るものとなし、又は當然自分の所屬と信じて居るものはどうしても高天原に上る事は出来ない、彼の善行の功德を求めたり、又自ら義とするものは斯の如き信仰を有して居るものである。高天原及び地上の天人は斯の如きものをもつて癡呆となし、俗人となして、大に忌避的態度を取るものである。斯の如き人間は不斷に自分にのみ求めて、大神の神格を觀ないが故に、眞理に暗き癡呆者と云ふのである。又彼等は元より大神の所屬となすべきものを己に奪はむとするが故に神より天の賊と稱へらるるのである。所謂人間は大神の御神格を天人が攝受するとその信仰に逆らうて居るものである。瑞の御靈の大神は高天原の天人と共に自家存



在いの中うちに住すみたまふ、故ゆゑに大神おほかみは高天原たかあまはらに於おける一切いっさい中ちゆうの一切いっさいである事ことは云いふ迄までもない事ことである。

(大正一二・一・八 舊一一・一一・二二 加藤明子録)

## 第一〇章 震しん士し震しん商しやう〔一二四三〕

治はる國くに別わけ、龍たつ公こう兩りやう人にんは伊吹戸主いぶきどぬしの神かみの關所せきしよに於おて優待いうたいされ茶果さくわを饗應きやうおうせられ、少しば時らく休きう息そくしてゐると、其前そのまへをスタスタと勢いきほひよく通とほりかかつたデツプリ肥こえた六十男ろくじふをとこがある。

赤顔あかがほの守衛しゆゑいはあわてて、其男そのをとこを引ひきとめ、

「コラ待まてツ」

と一喝いっかつした。男をとこは後振返あとふりかへり、不機嫌ふきげんな顔かほをして、

「何なんだ天下てんかの大道だいだうを往來わうらいするのに、待まてと云いつて妨さまたげる不道理ふだうりな事ことがあるか、

エー、俺をどなたと心得て居る。傷死位寤死等死爵鬼族姪僞員欲野深藏といふ紳士だ。邪魔を致すと、交番へ引渡さうか

「オイ、其方はここをどこと心得て居る」

「言はいでもきまつた事だ。野蠻未開の北海道ぢやないか」

「其方は何うして此處へ來たのだ」

「空中視察の爲、飛行機に乗つて居つた所、プロペラの加減が悪くて、風波でこ

んな方へやつて來たのだ。何うだ俺を本國へ案内してくれないか、さうすりや腐

つた酒の一杯も呑ましてやらぬこともないワイ」

「コリヤコリヤ欲野深藏、ここは冥途だぞ、天の八衢を知らぬか」

「鳴動も爆發もあつたものかい、そんなメイドウな事を云ふない、俺こそはフサ

の國に於て遠近に名を知られた紳士だ……否紳士兼紳商だ。男のボーイに酒をつ

がす時には男酌閣下で、自分一人ついで呑む時には私酌閣下だ。エー、ン、そん

なおどし文句を竝べて、鳴動だの、破裂だのと云はずに、俺の案内でもしたらど

うだ、貴様もこんな所で二錢銅貨の様な顔をして、しやちこ張つて居つても、氣

が利かぬぢやないか。銅錢ロクな奴ぢやあるまいが、俺も大度量をオツ放り出して、椀給で門番にでも救うてやらう」

「コリヤ深藏、貴様はチツとばかり酒に喰ひ酔うてゐるな、今紳士紳商だと吐したが欲にかけたら親子の間でも公事を致したり、又人の悪口を針小棒大に吹聴致し、自己の名利榮達を計り、身上を拵へた眞極道だらう、チャンとここな帳面についてゐるのだ、何程娑婆で羽振がよくても靈界へ來ては最早駄目だ。サ、この衡にかかれ、貴様の罪を測量してやらう」

「さうすると、此處はヤツパリ冥途でげすかなア」

「氣がついたか、貴様は積惡の酬に仍りて、地震の爲に震死した震死代物だらう」  
「成程、さう承はれば臍げに記憶に浮かむで來ますワイ。飛行機に乗つたと思つたのは……さうすると魂が宙に飛んだのかな」

赤面の守衛は帳面をくりながら、

「其方は欲野深藏と云つたな、幼名は澁柿泥右衛門と申さうがな」

「ハイ、ヨク、深い所まで御存じでムいますなア、それに間違ひはムいませぬ」

「其方は娑婆に於て、殺人鐵道嵐脈會社の社長兼取締役を致して居つたであらう」

「ハイ其通りでムいます」

「優先株だとか、幽霊株だとか申して、澤山な蕪や大根を、金も出さずに吾物に致しただらう」

「ハイそんな事もあつたでせう、併しそれを致さねば現界に於ては、鬼族院僞員になる事も出来ず、紳士紳商といはれる事も出来ませぬから、娑婆の規則に依つて止むを得ず優勝劣敗的行動を致しました、コリヤ決して私の罪ではありませぬ、社會の罪でムいます、何分社會の組織制度が、さうせなくちやならない様になつてゐるのですからなア」

「馬鹿申せ、そんな法律が何時發布されたか」

「表面から見れば、左様な事はありませぬが、其内容及精神から考へれば、法文の裏をくぐるべく仕組まれてあるものですから、之をうまく切抜ける者が、娑婆の有力者と云ふ者です、總理大臣や或は小爵や柄杓や疝癩などの高位に昇らうと思へば、眞面目臭く、法文などを守つて居つちや、娑婆では犬に小便をかけられ

猫にふみつぶされて了ひますワ。郷に入つては郷に従へですから、娑婆ではこれでも立派な公民、紳士中でも錚々たる人物でムいます、ここへ来れば、凡ての行方が違ふでせうが、娑婆は娑婆の法律、靈界は靈界の法律があるでせう、まだ靈界へ来てから善もやつた事がない代りに、悪をやる暇もありませぬ、娑婆の事迄、死んだ子の年をくる様に、こんな所でゴテゴテ云はれちや、やり切れませぬからなア。エ、何だか氣がせく、斯様な所でヒマ取つては、第一タイムの損害だ、娑婆で金貸しをして居つた時にや、寢とつても起きとつても、時計の針がケチケチと鳴る内に、金の利息が、十圓札で一枚づつ、輪轉機で新聞を印刷する様に、ポイポイと生れて来たものだが、最早ここへ来ては無一物だ、之から一つ冥途を開拓して、娑婆に居つた時よりも一つ勉強家となり、大地主となつて、冥途の一生を送りたい。どうぞ邪魔をして下さるな」

と云ひながら、大股にふん張つて、關所を突破せむとする。

此騒ぎに伊吹戸主の神は關所の窓をあけて、一寸覗かせ給うた。欲野深藏は判神の靈光に打たれて、アツと其場に悶絶し、蟹の様な泡を吹いて苦み出した。忽ち

館やかたの一方いっぽうより數人すうにんの番卒ばんそつ現あらはれ來り、欲野深藏よくのふかざうの體からだを荷車にぐるまに乗せ、ガラガラガラガラと厭いやらしき音おとをさせながら、何處どこともなく運び去さつた。之これは地獄道ぢごくだうの大門口おほもんぐち内ないへ放り込こみに行つたのである。深藏ふかざうは暗くらき門内もんないへ放り込まれ、ハツと氣きがつき、ブツブツ小言こごとを小聲ここゑで囁ささやきながら、トボトボと欲界地獄よくかいぢごくを指さして進すすみ行くのであつた。

抑そもそも此この八衢やちまたの關所せきしよは天國てんごくへ上のぼり行く人間にんげんと地獄ぢごくへ落おちる人間にんげんとを查しらべる二つの役人やくにんがあつて、天國てんごくへ行くべき人間にんげんに對たいしては、色いろの白しろき優やさしき守衛しゆゑいが之これを查しらべ、地獄ぢごくへ行くべき人間にんげんに對たいしては形相かぎづかひ凄すさまじい赤あかい顔かほした守衛しゆゑいが之これを查しらべる事ことになつてゐる。

龍公たつこうは此この光景くわうけいを見て、何なんとも云いへぬ怖おそれを抱いだき治國はるくに別の袂たもとを固かたく握にぎり、不安ふあんの顔付かほつきにて少すこしばかり慄ふるへながら、息いきをこらして數多あまたの精靈せいれいの取查とりしらべらるるのを冷々ひやひやしながら眺ながめて居ゐる。暫しばくすると錫杖しゃくじやうをガチヤンガチヤンと言いはせながらやつて來たのは、バラモン教けうの宣傳使せんでんしであつた。宣傳使せんでんしが此この赤門あかもんをくぐらうとするや白しろ、赤二人あかふたりの守衛しゆゑいは門口もんぐちに立塞たちふさがり、

「暫らくお待ちなさい、取調ぶる事がある」

と呼びかけた。宣傳使は後振り返り怪訝な顔をして、

「拙者は大自在天大國彦命の御仁慈と御神徳を天下に紹介致すバラモン教の宣傳使でゐる。拙者をお呼止めになつたのは何用でゐるかな」

赤「ここは靈界の八衢だ。其方が生前に於ける善惡の行爲を査べた上でなくては、此門を通行させることはなりません。ここに御待ちなされ」

「ハテ心得ぬ、吾々は大黒主の命を奉じ、月の國を巡回致し、デカタン高原に向ふハリスと申す者、決して吾々は死んだ覚えはゐらぬ。いい加減に戯談を云つておきなさるがよからう。大黒主の御命令、片時も猶豫してゐる譯には參らぬ」

「又もや行かむとする。赤は目を怒らし、大喝一聲、  
「偽宣傳使、暫く待てツ」

と呶鳴りつけた。ハリスは此聲にハツと氣が付き、あたりをキヨロキヨロ見廻しながら、

「ヤアどうやらこれは靈界の様でゐる、いつの間に斯様な所へ來たのかなア」

「其方は世界の人民に神の福音を宣べ傳へ天國へ案内すると申しながら、其實際に於て靈界の存在を信ぜず、神を認めず、半信半疑の状態に在つて、數多の人間を中有界又は地獄へ幾人落したか知れない偽善者だ。今ここで淨玻璃の鏡にかけて、其方が靈肉共に犯したる罪惡を査べてやらう」

「イヤもう恐れ入りました。仰せの通り社會の人民に對し、勸善懲惡の道を説き又は天國地獄の存在を朝から晩迄説き諭して參りましたが、實際に於て左様な所があるものか、人間は此肉體を去らば、後は煙の如く消え失せるものだ、コーラに示されたる天國地獄の状態は、要するに、社會の人心を調節する方便に過ぎないものだ」と信じて居りました。それ故何うしてもハツキリとした事は申されず、自分も半信半疑ながら天國地獄の消息を説諭して來たのでムいます。今となつて考へてみれば、死後の世界が斯くも儼然として存在するとは、實に驚愕の至りでムいます」

「其方は宣傳使のレツテルをつけて世人を迷はした罪は大なりと雖も、又一方に於て臙げながら、神の存在を無信仰者に傳へた徳に依つて、地獄行丈は許して遣



はす、少時しばらく此この中有界ちゆううかいにあつて心こころを研みがき神かみの善ぜんと眞しんは何い如かなるものなるかを了れう解かいし得うる迄まで、修業しうげふを致いたしたがよからう。ここ三十日さんじふにちの間あひだ、中有界ちゆううかいに止とどまることを許ゆるしてやるから、其間そのあひだに智慧ちゑと證覺しよつかくを得え、愛あいの善ぜんと信しんの眞しんを了れう得とくし得うるならば、靈相みたまさう應おうの天國てんごくへ昇のぼり得うるであらう。此期限このきげん内に萬々まんまん一いち改過遷善かいくわせんぜんの實じつをあげ得えざるに於おいては、氣きの毒どくながら地獄ぢごくへ落おとさねばならない、サア早はやく東ひがしを指さして進すすんだがよからう』

「ハイ、特別とくべつの御憐愍ごれんびんを以もつて地獄落ぢごくおちの猶豫期間いうよきかんをお與あたへ下くださいまして有難ありがたうごさいます。左様さやうなればこれから中有界ちゆううかいを遍歴へんれきし、力ちから一杯善いっぱいぜんの爲ために善ぜんを行おこなひ、迷まよひ來くる精靈せいれいに對たいし、十分じふぶんの努力どりよくを以もつて、私わたしの悟さとり得えたる所ところを傳つたへるでごさいます。精靈せいれいに對たいし、十分じふぶんの努力どりよくを以もつて、私わたしの悟さとり得えたる所ところを傳つたへるでごさいます。』

「コリヤコリヤ、ハリス、其方そのほうが覺さとり得えたと思おもつたら大變たいへんな間違まちがひであるぞ、皆神みなかみさまの御神格ごしんかくの内流ないりうに依よつて、知覺ちかくし、意識いしきし、證覺しよつかくを得うるものだ。決けつして汝なんぢ一いち力りきの物ものと思おもつたら、忽たちまち天てんの賊ぞくとなつて地獄ぢごくへ落おちねばならないぞ、ええか、分わかつたか』

「ハイ、分わかりましてごさいます、然しからば之これより東ひがしを指さして修業しうげふに參まゐります』

「期限内に必ずここへ歸つて來るのだぞ、其時改めて汝の改過遷善の度合を査べ、汝が所住を決定するであらう」

「どうも御手敷をかけまして、眞にすみませぬ、左様なれば御免下さいませ」  
と云ひながら、始めの勢どこへやら、悄然として次第々々に其影はうすれつつ、靄の中に消えて了つた。

龍公は治國別の袖をひき、小聲になつて、

「モシ先生、宣傳使も靈界へ來ては、カラキ一シ駄目ですなア、現界では丸で救の神様の様に言はれて居つても、茲へ來ると本當に見る影もないぢやありませんか」

「ウン、さうぢや、俺達もまだ天國へは行けず、中有界に迷うて居るのだからなア、それだから吾々は八衢人足と、信者以外の連中から云はれても仕方がないのだ」

「何うしたら天國へ行けるでせうかな」  
「さうだ、心のドン底より、神さまの神格を理解し、神の眞愛を會得し、愛の爲

に愛を行ひ、善の爲に善を行ひ、眞の爲に眞を行ふ眞人間とならなくちや到底駄目だ。俺達も少しばかり言靈が利くやうになつて、自分が修行した結果神力が備はつたと思つて居つたが、大變な間違ひだつた、何れも皆瑞の御靈神素盞鳴尊様の御神格が吾精靈を充たし、吾肉體をお使ひになつて居つたのだつた。之を思へば人間はチツとも我を出すことは出来ない、何事も自分の智慧だ力だ器量だと思ふのは、所謂大神の御神徳を横領致す天の賊だ。斯様な考へで居つたならば、到底何時迄も中有界に迷ふか、遂には地獄道へ落ちねばならぬ、有難や尊や、神様の御恵に依つて、ハツキリと靈界の様子を見せて頂き、實に感謝の至りである。之から吾々は、今迄の心を入れ替へて、何事も神様に御任せするのだなア、自分の力だと思へば、そこに慢心の雲が湧いて来る。謹んだ上にも謹むべきは心の持方である。あゝ惟神靈幸倍坐世<sup>□</sup>と合掌し感涙に咽ぶのであつた。龍公も亦無言のまま手を合せ、感謝の涙にくれてゐる。伊吹戸主神は二人に會釋し、スーツと座を立つて、館の奥深く入らせ給うた。二人は後を眺むれば、伊吹戸主神の姿は丸き玉の如く光り輝き、其神姿は

判然と見えず、月の如き光が七つ八つ或は九つ圓球の周圍を取巻き、次第々々に奥の間に隠れ給ふのであつた。

凡て智慧と證覺のすぐれたる神人を、それより劣りし證覺者が拜する時は、光の如く見えて、目も眩くなるものである。神の神格は神善と神眞であり、それより發する智慧證覺は即ち光なるが故である。二人は愕然としてもものをも言はず、再び八衢の關所に目を放ちここに集まり來る精靈の様子を瞬きもせず窺つてゐた。

(大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 松村眞澄録)

## 第一章 手苦駄女(一二四四)

人間の肉體は所謂精靈の容器である。そして天人の養成所ともなり、或は邪鬼、惡鬼共の巢窟となるものである。斯の如く同じ人間にして種々の變化を來すのは、人間が主とする所の愛の情動如何に依つて、或は天人となり、或は精靈界に迷ひ、

或は地獄の妖怪的人物となるのである。さうして、人間が現世に住んでゐる間は、すべての思索は自然的なるが故に、人間の本體たる精靈として、其精靈の團體中に加はることはない、併しながら其想念が迥然として肉體を離脱する時は、其間精靈の中にあるを以て或は各自所屬の團體中に現はることがある。此時或精靈が彼を見る者は容易に之を他の諸々の精靈と分別することが出来るのである。何とならば肉體を持つてゐる精靈は、前に述べた萬公の精靈の如く、思ひに沈みつ、默然として前後左右に徘徊し、他を省みざること、恰も盲目者の如くに見ゆるからである。若しも精靈が之とものを言はむとすれば、彼の精靈は忽然として煙の如く消失するものである。人間は如何にして肉體を脱離し、精靈界に入るかと云ふに、此時の人間は睡眠にも居らず、覺醒にもあらざる一種異様の情態に居るものであつて、此情態に在る時は、其人間は、只自分は充分に覺醒して居るもののみ思つて居るものである。而して此際に於ける諸々の感覺は醒々として、恰も肉體の最も覺醒せる時に少しも變りはないのである。五官の感覺も、四肢五體の觸覺も特に精妙となることは肉體覺醒時の諸感覺や觸覺の到底及ばざる所で

ある。此情態にあつて、天人及び精霊を見る時は、其精氣凜々として活躍するを認むべく、又彼等の言語をも明瞭に聞く事を得らるのである。尚も不可思議とすべきは、彼等天人及び精霊に親しく接觸し得ることである。此故は人間肉體に屬するもの、少しも此間に混入し來らないからである。此情態を呼んで靈界にては肉體離脱の時と云ひ、現界より見ては之を死と稱するのである。此時人間は其肉體の中に自分の居る事を覺えず、又其肉體の外に出て居ることをも覺えないものである。人間は其内分即ち靈的生涯に於て精霊なりといふ理由は、其想念及び意思に所屬せる事物の上から見てしか云ふのである。何とならば此間の事物は人の内分にして即ち靈主體従の法則に依つて活動するから、人をして人たらしむる所以である。人は其内分以外に出づることを得ないものであるから、精霊即ち人間である。人の肉體は人間の家又は容器と云つても可いものである。人の肉體にして即ち精霊の活動機關にして、自己の本體たる精霊が有する所の諸々の想念と諸多の情動に相應じて、其自然界に於ける諸官能を全うし得ざるに立到つた時は、肉體上より見て之を死と呼ぶのである。精霊と呼吸及心臓の鼓動との間に内的交

通なるものがある。それは精靈の想念とは呼吸と相通じ、其愛より來る情動は心臓と通ずる故である。夫だから肺臓心臓の活動が全く止む時こそ、靈と肉とが忽ち分離する時である。肺臓の呼吸と心臓の鼓動とは、人間の本體たる精靈其ものを繋ぐ所の命脈であつて、此二つの官能を破壊する時は精靈は忽ちおのれに歸り、獨立し復活し得るのである。

斯くて肉體即ち精靈の軀殼は其精靈より分離されたが故に次第に冷却して、遂に腐敗糜爛するに至るものである。

人間の精靈が呼吸及心臓と内的交通をなす所以は、人間の生死に關する活動に就いては、全般的に、又個々肺臓心臓の兩機關に據る所である。而して人間の精靈即ち本體は肉體分離後と雖も、尙少時は其體内に残り、心臓の鼓動全く止むを待つて、全部脱出するのである。而して之は人間の死因如何に依つて生ずる所の現象である。或場合には心臓の鼓動が永く繼續し、或場合は長からざることがある。此鼓動が全く止んだ時は、人間の本體たる精靈は直に靈界に復活し得るのである。併しながらこれは瑞の御靈の大神のなし給ふ所であつて、人間自己の能く

する所ではない。

而して心臓の鼓動が全く休止する迄、精霊が其肉體より分離せない理由は、心臓なるものは、情動に相應するが故である。凡て情動なるものは愛に屬し、愛は人間生命の本體である。人間は此愛に依るが故に、各生命の熱があり、而して此和合の繼續する間は、相應の存在あるを以て、精霊の生命尚肉體中にあるのである。

人の精霊は肉體の脱離期即ち最後の死期に當つて其瞬間抱持した所の、最後の想念をば、死後暫くの間は保存するものであるが、時を経るに従つて、精霊は元世に在つた時、平素抱持したる諸々の想念の内に復歸するものである。さて此等の諸々の想念は、彼れ精霊が全般的情動即ち主とする所の愛の情動より來るものである。人の心の内分即ち精霊が、肉體より引かれるが如く、又殆ど抽出されるが如きを知覺し、且つ感覺するものである。古人の諺に最後の一念は死後の生を引くと云つてゐるのは誤謬である。どうしても平素の愛の情動が之を左右するものたる以上は、人間は平素より其身魂を清め、善を云ひ善の爲に善を行ひ、且つ



智慧ちゑと證覺しょうかくとを得えておかなくてはならないものである。

さて治國別はるくにわけ、龍公たつこうは極めて謹慎きんしんの態度たいどを以もつて、赤あか、白しろの守衛しゆゑいがここに進すすみ來くる精靈せいれいとの問答もんたふを一言ひとことも洩もらさじと、小男鹿さをしかの耳みみふり立たてて聞きき入いつた。そこへノコノコやつて來きたのは男女なんによふたり二人の精靈せいれいであつた。赤面せきめんの守衛しゆゑいは兩人りやうにんに向むかひ、  
「ヤアヤアそれなる兩人りやうにん、暫しばらく待まて。ここは八衢やちまたの關所せきしよだ。汝生前なんぢせいぜんの行動かうどうに就ついて取查とりしらべる必要ひつえうがある」  
と呶鳴どなりつけた。二人ふたりはオツオツしながら、

「ハイ」

と云いつたきり、路上ろじやうにうづくまつて了しまつた。

「其方兩人そのはうりやうにんは何者なにものだ」

「ハイ、私は呉服屋ごふくやの番頭ばんとうで徳とくと申まをします」

「私は叶枝かなえと申まをす藝者げいしやでムいます」

「ウンさうだらう、其方兩人そのはうりやうにんは情死じやうしを致いたして、ここ迄まで氣樂相きらくさうに手てに手てを取とつて意い茶やついて來きたのだらう。さてもさても暢氣のんきな代物しろものだなア」

「ハイ、誠に面目次第もムいませぬ。中々何うして何うして、氣樂所か、今此先で、三途の川を渡り、お婆アさまに散々膏をとられた上、いろいろと恥をかかれ、ヤツとのことで此處まで逃げて参りました」

「其方徳とやら、暫く此方へ来て待つてをれ。女の方から查べてやる」

「ハイ、どうぞ一緒に、なることならば………查べて頂き度うムいます。二世も三世も、假令野の末山の奥、どこへ行つても離れないといふ固い約束を結んで参つたのでムいますから、假令一分間たりとも離れることは出来ませぬ」

「そんな勝手な事が、靈界では通ると思ふか。暫く控へて居らう………オイ白さま、暫く此徳を豚箱の中へ放り込んでおいて下さい」

「コレ徳さま、辛からうが、少時の間だから、マアこちらへ来てゐなさい。三五教の宣傳使も一服してゐられるから………豚箱なんどに入れやしないから、靈界のお茶でも呑んで、叶枝さまの查べが濟むまで、此方でお休みなさい」

徳は涙を流しながら………

「ハイ有難うムいます。あなたの様に同情のあるお言葉でいつて下されば、半日

や假令一日位離れた所で別に苦しいことはムいませぬ。頭から役人面して、怖い顔で呶鳴り立てられると一寸の蟲にも五分の魂、チツとはムカツきますからなア

赤は目を怒らし、

黙れ！ 人間の分際として左様なことを申すと直様地獄へ落してやるぞ

ハイ……どうせ、私は男地獄、叶枝は女地獄と、娑婆でさへも仇名をとつてきた位でムいますから、地獄落は覺悟して居ります。併しながら、どんな辛い所でも構ひませぬから、二人一緒にやつて下さい。そればつかりが一生の御願でムいます

エ、喧しい、白さま、早く徳を隔離して下さい

サア徳さま、こちらへお出でなさい

オイ、叶枝、おれのことを忘れちゃならないよ。俺もお前のこた、一瞬間も忘れないからなア

叶枝は何の應答もなく、うつむいてメソメソ泣いて居る。徳は色白き守衛に導かれ館の玄關指して行く。

赤は帳面をくりながら、

「オイ女、其方は随分悪い事を致して居るが、逐一此處で白状致すのだぞ」

「ハイ、別に悪い事を致した覚えはムいませぬよ」

「バカを申せ、其方は藝者で在りながら、藝を賣らずに肉を賣つてゐるぢやないか」

「ハイ、藝を賣つても肉を賣つても、商賣に二つはムいませぬ。歌を唄つたり三味をひいたり、太鼓や鼓を拍つのは遊藝でムいます。そして肉をうるのは岩戸開きの神樂舞、曲藝をやつて、お客さまに喜ばせ樂します清き商賣でムいます。それ故相場師が博奕打の様に片一方が喜び片一方が悔むといふよなことは、決してやつた覚えはムいませぬ。どのお客さまも此お客さまも、皆、アハ、ハ、オホ、ハ、ハ、エ、ハ、ハ、と笑ひ興じ、まるで天國の春に逢うたやうだと仰有つて、喜んで下さる方ばかりでムいます。兩方のよい商賣といふのは、藝者と頼冠り位なものです。これ程人間を喜ばして來た藝者に罪がムいますなら、政治家や宗教家、一番悪いのはお醫者さま、其外娑婆に居る一般の人間は皆大惡人でムいます。私

は一旦言ひ交した男に心中立てをして、命まですてて、ここ迄やつて来た貞節な女でムいます。どうぞ私の清い美しい心をお調べ下さいまして、どうぞ天國へやつて下さいませ。そしてあの徳さまだつて、決して悪い人ぢやムいませぬ。どうぞ私と一緒に天國の旅をさして下さいませ様に御願致します」

馬鹿を申せ、徳のこと迄、貴様がゴテゴテ云ふ場所ぢやない。貴様のことはかり白状すればいいのだ。何だべらべらと自己辨護ばかりやりやつて、おマケに情夫の事迄口出しするとは、中々以ての外の代物だ。斯うなると何うしても、貴様達兩人は一緒におくことは出来ぬ」

「あ、左様でムいますか、折角ここ迄ついて来ましたけれど、あなた様の御命令で引分けて下さるのなら、冥土の規則だと思つて、妾はチツとも異議は申しませぬ。實の所私は無理心中をさせられましたのです。現界といふ所は思ふ様に行かぬ所でムいまして、好きなお方は色々故障が出来て、常住會ふ譯には行かず、お金はなし、これに反して、嫌ひで嫌ひで仕方のない男は金を持つて、丸で大根畑へネチがついた程、うるさい位しがみつきに來ますなり、本當に浮世がイヤにな

つて了つたのですよ。……

嫌なお客に笑うてみせて

好きの膝にて泣きくらす

といふ憐れな生涯を續けて來ました。實際のこと申しますれば、あの徳といふ男、御存じの通り、頭迄がトク頭病で、そしてヅぬけたトク等の馬鹿でムいます。

【とく】とお查べの上、どうぞ私と一所に居らない様に、特別の御取扱を御願致します」

「アハ、、、、貴様は餘程やり手だつたと見えるのう。およそ幾人ばかり地獄へおとしたか」

「ハイ、私が落したのぢやムいませぬが、勝手にお客さまの方から落ちたのです」  
「それでも貴様が原動力だ。直接におとさいでも、間接に落して居るのだ。現に今來た徳公でもさうぢやないか」

叶枝は稍言葉馴れ、娑婆で人間をあやつつて來た地金を出し、赤の肩先を平手

で三つ四つポンポン叩き、おチヨボ口に袖をあてながら、

「ホ、ホ、ホ、あの六かしい顔わいな。わたえ、そんな赤い面した、目のクルリと大きい、口の大きい男らしい男、本當に好きだワ。なア赤さま、チツと可愛がつて頂戴ね」

「コリヤ怪しからぬ、何と心得てゐる。ここは言はば靈界の豫審廷だぞ。審判官に向つて、何といふ失禮なことを申すか」

「ホ、ホ、ホ、あのマア、六かしい顔しやんすことえな。あたえ、ますます可愛くなつてよ」

「エ、馬鹿に致すな。何と心得て居る」

「お氣に障りましたら御免なさいませ。併しながら靈界だつて、愛の情動に變りはありませんまい。現界の役人だつて六かしい顔をして被告人を裁いてゐやはりませんが、女の被告が行きますと、忽ち目を細うし、涎をくらはります。あんだだつて、女に對する男やおまへんか、さう七六かしう、四角ばつてゐなしては、世の中が殺風景でたまりませぬワ。どこもかも行詰り、不景氣風に吹捲られて、娑婆

の人間は青息吐息の爲體、憂鬱に沈んでゐる亡者共を、妙音菩薩にも比すべき藝者が、慰安を與へ、小口から天國に救うて上げて來たのですよ。お前さまだつて、何時迄もこんな所に、そんな六かしい顔をして、しやちこばつてゐるよりも、私と一緒に天國へでも新婚旅行と洒落たらどうだす………餘り悪い心持やしませぬで。わたえの荷位は持たして上げますワ

「エ、仕方のない代物だなア。貴様餘程娑婆で暴威を揮うて來たのだらう。中々辨舌はうまいものだ」

「ホ、ホ、ホ、その聲で蜥蜴くらふか時鳥、外面如菩薩内心如夜叉、表裏反覆常なきは世の中の真相ですよ。お前さまもチツと世間を知つて來なさい。さうすりや、そんな偏狹な頭が改造されて、新しい男の仲間に入れないものでもありません、大臣だつて國會議員だつて、元帥だつて、紳士紳商だつて、片つ端からこの靨の中へ、皆吸ひ込んで了ふ技能を持つてゐる、天然の美貌、千變萬化の魔力を使ふ女ですもの、門番さまの一人や二人位、嚙んだり吐いたりするのは、屁のお茶でもありませんせぬワ。お前さまも有名な藝者の叶枝にこれ文言葉をかけて貰



うたら、餘程の光榮ですよ、本當に仕合せな御方ねえ

龍公は思はず知らず、

ウツフ、

と吹き出した。

貴様の調べは一朝一夕に行かない。人の庫を呑み、山を呑み、田畑を呑み、數多の亡者を製造した「したたか」者だから、又追つて調べてやる。サア立てツと云ひながら、松の木の荒皮の様な腕をグツと突出し、葦の芽の様な柔こい腕をグツと握り、岩の戸をパツとあけて、岩窟内へ放り込みおき、再び徳を此場に引ずり來り、鹿爪らしい顔をして查べ始めた。

其方は生前に何商賣を致して居つたか

ハイ、最前申した様に呉服屋の番頭に間違ひムいませぬ

其方は幾らの月給を貰つて居つたか

ハイ、月に親方の食事持で十圓ばかり頂いて居りました

其方は月に十五六回も叶枝の側へ通うたであらう。チャンと此帳面に記してあ

るぞ」

「ハイ仕方がありません、仰有る通で△います」

「一度遊びに行くといく幾らの金が必要か」

「ハイ、少い時が七八圓、多い時は五十圓も要ります」

「僅か一ヶ月十圓の給料で、何うして其金が出るのだ」

「ハイ、私の役徳によつて、それ丈生み出します」

「バカを申せ。帳面づらをゴマかしたのだらう」

「帳面づらをゴマかすのは悪う△いますか。娑婆の人間は筆の先で一遍に五萬兩、

十萬兩とゴマかして居りますよ。現に積善銀行を御覽なさい。二千萬圓も筆の先

でゴマかしたぢや△います。それでもヤツパリ紳士とか紳商とか、有力者と

かの名を恣にして居ります。そして政府は餘り之を厳しく詮議立て致しませぬ。

之を思へば一つでもウマく帳面づらをゴマかした奴が、所謂社會の善人です。私

の様な者をお責めなさるよりも、モツと大きな奴をお査べなさりませ。月に金の

百兩や二百兩誤魔化した弱い人間や、米の一升や金の五十錢位盗んだ憐れな人間

を查しらべるよりも、なぜモツと大きな悪人あくにんの巨頭きよとうをお查しらべなさらぬのですか。そんなことで何どうして八衢やちまた審判所しんぱんしよの權威けんゐが保たもたれませうか。現界げんかいに於おいても微罪びざい不檢ふけん擧ぎよの内規ないぎが行おこなはれて居をりますよ」

「馬鹿ばかを申まをせ、現界げんかいと違ちがつて、靈界れいかいの審判所しんぱんしよは、一厘いちりん一毛いちまうの相違さうゐも許ゆるさぬのだ。假令たとへ塵切ちりぎれ一本いっほんでも取とつた奴やつは盜人ぬすびとだ」

「それなら何故なぜ冥土めいどの法律はふりつを現界げんかいへ發布はつぷして下くださらぬのか。私達わたしたちは現界げんかいの最善さいぜんを盡つくさうと思おもへば、靈界れいかいへ來きて咎とがめられる、本當ほんたうに善惡ぜんあくの去就きしうに困こまります。それ程ほど、今いまとなつて小ちひさいこと迄まで詮議せんぎ立てなされるのなら、なぜ夢ゆめになりとも、冥土めいどの法律はふりつは斯かうだと知しらしては下くださらぬのだ。丸まるで人間にんげんを陷おとしあなへおとすよな、そんな殘酷ざんこくな法律はふりつがどこにありますか。私わたしは決けつして左様さやうな不徹底ふてつていな不完全ふくわんぜんな法律はふりつ命令めいれいには絶ぜつ對服從たいふくじゆつ致いたしませぬ。それよりも、あなた、大切な私わたしの女房にようぼうをどこへ隠かくしましたか。あべこべに誘拐いうかい罪ざいで、冥府めいふの審判所しんぱんしよへ告發こくはつ致いたしますぞ」

「今の娑婆しやばに居ある奴やつは、ドイツも此奴こいつも、皆弱肉強食みなじやくにくきやうじゆく、優勝劣敗いゆうしやうれつぱいを以もつて最善さいぜんの生せい活法わつはふときめてゐやがるからサツパリ始末しまつに了をへない。スツカリ良心りやうしんが痲痺まひし、癩てん

狂癡呆の境遇に陥落して居るのだから、罪の斷じやうもない、癡狂者や癡呆に對し、法律の適用は出来ないから、貴様は放免する。其代り一生八衢の四辻に立つて、亡者の道案内など致すがよからう」

「構うて下さるな、自由の權です。お前さま達が人間を審く權利がどこにあるか。人間を審く者は神様より外にない筈だ。ヘン餘り偉相に言ふな、婦人誘拐者奴が、今度は俺の方から承知をしないのだ。サ早く叶枝をここへ出せばよし、出さぬに於ては死物狂ひだ。荒れて荒れて荒れまはしてやらうか」

「あゝあ、困つた氣違の夫婦がやつて來たものだなア。現界の人間は何奴も此奴も皆こんなものだ。なア白さま、コリヤ一つ現界から根本改良やらねば駄目だなア」

「あゝさうだから、大神様から嚴の御靈、瑞の御靈の神柱を現界に送り、今や改造に着手されつつあるのですよ。やがて四五年も先にゆけばキツと効果が現はれ、癡狂者や癡呆や、盲聾の數が減るでせう。さうすれば吾々も御用が勤めよくなるでせう」

「モシ先生、嚴の御靈、瑞の御靈の神柱が現界へ出してあると言はれましたなア。大方變性男子、變性女子の事ぢやありますまいか」

「ウンさうだ。俺達も餘程シツカリ致さねばならないわい。お前も之から十分注意をして娑婆へ歸つたら、舍身的活動をやるのだなア」

(大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 松村眞澄録)

### 第三篇 天國巡覽

#### 第一二章 天界行(一二四五)

高天原の各團體に居住する靈國天人及び天國の天人は愛を生命とし、而して一

切を廣く愛するが故に人の肉體を離れて上り來る精靈の爲にも所在厚誼を盡し、  
懇篤なる教訓を傳へ、或は面白き歌を歌ひ、舞曲を演じ、音樂を奏しなどして、  
一人にても多く之を高天原の團體へ導き行かむと思ふ外、他に念慮は少しもない  
のである。之が所謂天人の最高最後の歡喜悅樂である。併乍ら精靈が人の肉體を  
宿とし、現世に在りし頃善靈即ち正守護神の群に入るべき生涯や、或は天人即ち  
本守護神の群に至るべき生涯を送つて居らなかつたならば、彼等精靈は之等の天  
國的善靈を離れ去らむと願ふものである。斯の如くにして精靈は遂に現世に在つ  
た時の生涯と一致する精靈と共に群居するに非ざれば、どこ迄も此轉遷を休止せ  
ないものである。

斯の如く自己生前の生涯に準適せるものを發見するに及んで、彼れ精靈は茲に  
又在世中の生涯に相似せるものと共に送らむとするものである。實に靈界の法則  
は、不思議なもの云ふべきである。

凡て人間の身には善と惡と二種の精靈が潜在してある事は前に述べた通りであ  
る。而して人間は善靈即ち本守護神又は正守護神に仍つて高天原の諸團體と和合

し、惡靈あくれいすなは即ち副守護神ふくしゆごじんに仍よつて地獄ぢごくの團體だんたいと相應さうおうの理りに依よりて和合わがふするものであ  
る、此等これらの精靈せいれいは高天原たかあまはらと地獄界ぢごくかいの中間ちうかんに位くらゐする中有界ちううかいすなは即ち精靈界せいれいかいに籍せきを置おいて  
ゐる。此精靈このせいれいが人間にんげんに來きたる時ときには、先まづ其記憶中そのきおくちうに入り、次つぎに其想念中そのさうねんちうに侵入しんにふ  
するものである。而しかして副守護神ふくしゆごじんは記憶及想念中きおくおよびさうねんちうにある惡き事物じぶつの間に潛入せんに入し、正  
守護神しゆごじんは其記憶そのきおくや想念中さうねんちうにある最も善き事物よきじぶつの裡うちに侵入しんにふし來るものである。され  
ど精靈自身せいれいじしんに於おいては其人間の體中そのにんげんたいちうに入り、相共あひともに居をる事は少しも知しらないもので  
ある。而しかも精靈せいれいが人間にんげんと共ともなる時ときは凡すべて其人間の記憶そのにんげんきおくと想念さうねんとを以もつて、精靈自身せいれいじしん  
の所有物しやうぶつと信しんじてゐる。又また彼等精靈かれらせいれいなるものは、人間にんげんを見みることはない。何故なにゆゑな  
れば、現實げんじつの太陽界たいやうかいに在ある所の者ものは、彼等精靈かれらせいれいが視覺しかくの對境たいきやうとならないからであ  
る。大神おほかみは此等これらの精靈せいれいをして、其人間そのにんげんと相伴あひともなへる事ことを知らざらしめむが爲ために大御おほみこ  
心こころを用もちひ給たまふ事こと頗たぶる甚深じんしんである。何故なにゆゑなれば彼等精靈かれらせいれいがもし此事このことを知る時ときには、  
即ち人間にんげんと相語あひかたることあるべく、而しかして副守護神ふくしゆごじんたる惡靈あくれいは人間にんげんを亡ほろぼさむ事ことを  
考かんがへるからである。副守護神ふくしゆごじんすなは即ち惡靈あくれいは根底ねそこの國くにの諸々もろもろの惡あくと虚偽きよぎとに和合わがふせる  
ものなるが故ゆゑに、只一途ただいちづに人間にんげんを亡ほろぼし地獄界ぢごくかいへ導みちびき、自分じぶんの手柄てがらにしようとし希き

求するの外、他事ないからである。而して副守護神は啻に人間の心霊即ち其信と愛とのみならず、其肉體をも擧げて亡ぼさむことを希求するものである。故に彼等の惡靈が人間と相語らふことがなければ、自分は人間の體内にあることを知らないのだから、決して害を加へないのである。彼等惡靈は其思ふ所、其相互に語る所の事物が、果して人間より出で来るものなりや否やを知らないのである。何となれば彼等精靈の相互に物言ふは、その實は人間より来る所のものなれども、彼等は之を以て自分の裡よりするものなりと信じ切つてゐる。而して何れの人も自分に屬する所を極めて尊重し、且之を熱愛するが故に、精靈は自ら之を知らないけれども、自然的に人間を愛し、且つ尊重せなくてはならない様になるのである。これ全く瑞の御靈大神の御仁慈の御心を以て、かく精靈に人間と共なることを知らしめざる様取計らひ給うたのである。

天國の團體に交通する精靈も、地獄界と交通せる精靈も亦同じく人間に付添うてゐるのは前に述べた通りである。而して天國の團體に交通してゐる精靈の最も清きものを眞靈又は本守護神と云ひ、稍劣つたものを正守護神と云ひ、地獄と交通



する精靈を惡靈又は副守護神といふのである。併し人間が生るるや直に惡の裡に  
陥らねばならない事になつてゐる。故に當初の生涯は全く此等精靈の手の裡に在  
りと云つてもいいのである。人間にして若しおのれと相似たる精靈が付添うて守  
るに非ざれば、人間は肉體として生くることは出来ない。又諸々の惡を離れて善  
に復ることも出来ないことになるのである。人間の肉體が惡靈即ち副守護神に仍  
つて、おのれの生命を保持し得ると同時に又善靈即ち正守護神に仍つて、此惡よ  
り脱離することを得るものである。人間は又此兩者の徳に仍つて、平衡の情態を  
保持するが故に意思の自由なるものがある。此自由の意思に仍つて以て、諸々の  
惡を去り又善に就くことを得、又其心の上に善を植ゑつくることを得るのである。  
人間が若しも斯の如き自由の情態に非ざる時は、決して改過遷善の實を擧ぐるこ  
とは出来ない。然るに一方には根底の國より流れ來る惡靈の活動するあり、一方  
には高天原より流れ來る善靈の活動するありて、人間は此等兩者の中間に立ち、  
天國、地獄兩方の壓力の間に挟まらなくては、決して意思の自由はあるべきもの  
でない。

又人間に自由のない時は、生命あることを得ない。又善を以て他人に強ゆる事は出来ない、人から強ひられたる善其ものは、決して内分の靈魂に止まるものではない、心の底に何うしても滲み込む事は出来ない、但自由自在に攝受した所の善のみは、人間の意思の上に深き根底を下して、宛然其善をおのれの物の如くする様になるものである。

靈的現的一切の

所在ものに相對し

自然的なる事物より

推考するに非ざれば

思索すること能はざる

現代人の通弊は

神的即ち靈的の

人格さへも肉的や

自然的なるものなりと

思惟する故に彼の輩の

結論する所見る時は

果して神は一個なす

人格ならば大いさは

全大宇宙と同等に

あるべきものと唱導し

果して神が天地を

統御とうぎよ按配あんばいするとせば  
 世上せじやうに於おける君王くんわうの  
 如ごとくに多數たすうの官人くわんじんを  
 用もちゆるならむと臆測おくそくす  
 げにも愚おろかの至いたりなり  
 かかる愚昧ぐまいの人間にんげんに  
 對たいして高天原たかあまはらの靈界れいかいは  
 現實げんじつ世界せかいに於おける如ごと  
 空間的くわんてきの延長えんちやうなしと  
 告つげ諭さとすとも直様すくさまに  
 容易よういに會得えとくせざるべし  
 何故なにゆゑなれば自然界しぜんかい  
 及および自然しぜんの光明くわうみやうを  
 唯一ゆゑいつの標準へうじゆんと相定あひさだめ  
 思惟しゐする者ものは目めの面前まへに  
 認みとむる如ごとき延長えんちやうを  
 除のぞいて外ほかは何どうしても  
 考察かうさつし得えざる故ゆゑぞかし  
 高天原たかあまはらの延長えんちやうは  
 世界せかいに於おける延長えんちやうと  
 事情じじやう全まく相反あひはんす  
 自然界しぜんかいなる延長えんちやうには  
 一いつ種しゆの限定げんていある故ゆゑに  
 容易よういに測知そくちし得うべけれど  
 高天原たかあまはらの延長えんちやうには  
 元もとより限定げんていなき故ゆゑに  
 人心じんしん小智せうちのやすやすと  
 測知そくちし得うべき事ことならず

そも人間の眼界は如何に遠きに達すとも

極めて遠き距離のある 太陽、太陰、星辰も

容易に認め得べしとは 何人もよく知れるなり

又今少し心をば 深くひそめて思考せば

我内分の視覚力 即ち想念界の視覚力は

尚も遠方に相達し 尚も進んで内邊の

視力の至る極みには 其眼界は尚更に

遠大なるべきことを知る 果して然らば何者か

神的視力の現界外に 出づるを得るとなさざらむ

神的視力は現實に 一切視力のいと深き

内的にして且高上なるものぞ 想念中に此の如き

延長の力ある故に 高天原の一切の 事物は此處に住む者の すべてに傳はらざるはなし

高天原を成就し 遍満したる主の神の

其神格より來るもの 凡ては又も斯の如  
ならずと云ふ事更になし あゝ惟神々々  
御靈幸はへましませよ。

治國別、龍公兩人は暫く關所の館に休息してゐた、そこへ東方の空を輝かして  
一個の火彈が空中に筋を描いて近寄り來り、二人の前に落下し、忽ち麗しき天人  
の姿と變つた。何時の間にやら、二人は想念に引ずられて第三天國に昇つてゐた。  
神人の姿をよくよく見れば、豈はからむや、三五教の宣傳使言依別命であつた。  
治國別は驚きと喜びとに打たれ、ハツと首を下げ、靜かに天の數歌を奏上し始め  
た。

治國別さま、大變な好都合でゝいましたなア。一度高天原の諸團體を御案内申  
上げたいと思つて居りましたが、遂に其機會を得ませぬでした。幸ひあなたの肉  
體はバラモン教の爲に苦められ、あなたの精靈は肉體を脱離して漸くここにお越  
しになることを得たのです。十分に天國をお調べになつた上、再び現界へ立返り、

神様の爲に衆生濟度の爲にモウ一働きやつて頂かねばなりませんよ」

「思はぬ所で、貴神にお目にかかり、餘り嬉しうて言葉も出でませぬ。併しながら人間の肉體は二十四時間を過ぐれば既に腐敗糜爛し、再び精靈の容器となることは出来ないと言いましたが、最早私はここへ参つてから殆ど十時間ばかりも費した様な氣が致します。餘す所はあと十三四時間、かかる短い時間の間に天國の巡覽が出来ませうかなア」

「御心配なさいますな、靈界の一日は現界の一年に當ります、貴方はまだ靈界より見れば一分間も經つて居りませぬ、十時間もたつたやうに思はれたのは、現實界の反映でせう。又靈界には時間もなければ空間もありませぬ。まして天國には秋冬もなければ夜もない、只情動の變化があるのみです。凡て靈界は想念の世界ですから、時間などは問題にはなりません。マアゆつくりと私に従いて、天國の諸團體を巡覽なさるが宜しからう」

「ハイ有難うムいます、然らば仰に従ひ、お供を仕りませう」  
「モシ先生、どうぞ私もお供をさして下さいませ」

「ウンさうだなア、言依別命様に御伺ひしてみようかな」

「龍公さまは未だ天國を巡覽する丈の善と信と智慧證覺が備はつて居りませぬから、到底巡覽は出来ないのですが、幸ひ拙者は大神の命に仍つて、媒介天人と任命されて居りますから、特別を以てお供を許しませう」

治國「ハイ有難うムいます、何分宜しく御願申します」

「ア特別の御引立に與かりまして、身に餘る光榮でムいます」

「龍公さま、あなたはまだ精靈界に籍がある方だから、天國へ行つたならば、眼くらみ、息苦くて到底堪へ切れないでせう。ここに被面布がありますから、之を御被りなさい、さうすれば、どうなりかうなりお供が叶ふでせう」

と懐より黒き被面布を取りだし、龍公の面上めがけて投げ付ければ、不思議や龍公の顔にはキチンとして被面布がかけられた。

「サア是れで先づ第三天國の或團體から案内致しませう」

「ハイ有難う」

と治國別、龍公は後に従ひ、恐る恐る進み行く。

俄にはかに美妙びめうの音樂おんがくが聞きえ來きたり、馥郁ふくいくたる芳香ほうかうは四邊しへんをとざし、えもいはれぬ爽快さつくわいな氣分きぶんになつて來きた。言依別ことよりわけは或ある小丘せうきうの上うへに二人ふたりを導みちびき、美うるはしき岩石がんせきに腰打こしうちかけながら、眼下がんかの青野あをのヶ原がはらを見みおろし説明せつめいの勞らうを執とつた。

「治國はるくにわけ別わけさま、あの東ひがしの方ほうを御覽ごらんなさい。あこに一つひとつの小高こたかき丘陵きつりよつがあつて、澤山さんの家いへが建たつてゐるでせう。あれが第三だいさん天國てんごくの或ある一部いちぶの團體だんたいで、愛あいと信しんとに秀ひいでたる天人てんにんの住居ぢゆうきよする團體だんたいです。さうして此この眞西まにしに當あたる所ところにも同おなじく一つひとつの部落ぶつらくがありません、それは善ぜんと眞しんとの徳とく稍薄ややうすく、光ひかりも少すこしく臃おぼろげなる天人てんにん共どもの住居ぢゆうきよ致いたして居をる團體だんたいであります。東ひがしの團體だんたいに比くらべれば餘程よほど西にしの方ほうは凡すべての光景くわうけいが劣おとつて居をるでせう。これは其その團體だんたいに於おける天人てんにん等らの愛善あいぜんと信眞しんしんの徳とくの厚薄こうはくに依よつて、斯かくの如ごとく差等さとうが惟神かむながらてき的てきについてゐるのです。同氣相求どうきあひもとむると云いつて、同おなじ意思いし想念さうねんの者ものが愛あいの徳とくに仍よつて集あつまるのであります。故ゆゑに東ひがしの團體だんたいに比くらべれば、西にしの方ほうは餘程よほど劣おとつて居をります」

「同じ天人てんにんでも、東ひがしの團體だんたいに住すむ者ものと西にしの團體だんたいに住すむ者ものとは大變たいへんな幸かう不幸ふかうがあるぢやありませんか、西にしの方ほうの團體だんたいが甲團體かふだんたいを羨望せんぼうして移住いちぢゆうして行く様やうな事ことはあり



ますまいかな」

「決して決して左様な案じはありませぬ。すべて神格よりする愛其ものの情動如何に依つて、各自の運命が定まるのですから、西の團體が東の團體の光明を羨望して行つた所で、自分の徳が足らないで、苦しくて居られないのです。それ故個々團體の天人は決して他へ自由に移るといふやうな事はありませぬ、すべて高天原には順序が第一重んぜられて居ります。此順序を誤る者は、到底天國の生活は望まれないのです。大神様の神格は順序が第一に位してゐるのですから、地上の世界の如く、決して決して秩序紊亂などの虞は、夢にもありません。これ故に天國は永遠に平和が保たれてゆくのです」

「成程、嚴の御靈の御神諭にも、身魂相應の徳を與へると示されてありますが、いかにも恐れ入つた次第でムいますなア、さうして天人等は日々何をして居るのですか」

「現界の人間は、高天原の天人は年が年中歌舞音樂に耽り、歡樂に酔つてゐる様に考へて居りますが、決して天國だとて、のらのらと放蕩遊惰に日を送つてゐる

者はありませぬ。すべて神様が宇宙をお造り遊ばしたのは一つの目的があるためです、其目的とは即ち用であります。故に用のなき人間は靈界にも現界にも決して存在を許されない筈です、彼等天人は各自の天職を樂み、營々として神業に參加し、士農工商の業務を營んで居ります。さうして月に三回公休日があつて、其時には天人等は神の家に集まつて、力一杯歡樂を盡し、神をほめ稱へ、且つ神の恵に十二分に浴するのです」

「成程、實に結構な御經綸がしてあるものですなア」

「現界の如く、勞資の衝突だとか、勞働問題だとか、地主對小作爭議だとか、思想問題、政治問題、經濟問題などは夢にも起りませぬ、實に平和な幸福な生涯ですよ。現界人が一度天國の情況を見たならば、再び現界へ歸るのは厭になつて了ひますよ」

「さうですな、吾々も此儘天國の生涯を送りたくありません」

「先生、言依別命様に願つて、再び娑婆へ追ひ歸されないうにして下さいな、本當にいい所ですなア」

「何事も神様の仰せのままに、吾々は使はれるべき身分だから、左様な勝手氣儘な願望を起しちやならないぞ。只々人間は神さまの御用を神妙にお勤めさへすればいいのだ」

「ハイ畏まりました。併し餘り良い所で、實際の事、歸るのが厭になりました、が併し神さまの御命令ならば仕方がありませぬ」

「言依別は又南の方を指し、

「治國別さま、あの南の方に小さき丘陵が見えませう、あれは智慧と證覺とに充ちたる天人共の住居する團體です。さうして此眞北に當る所に又一つの丘陵があつて一部落が見えませう、あれは愛善と信眞の徳よりする智慧證覺に充ちたる天人共の居住する一個の團體でありまして、南の團體よりは少しく劣つてゐる天人共が群居して居ります。少し、之から見ても臙氣に見えるでせう」

「なる程、仰せの通りですなア、やはり情動の如何に依つて、運命が定まるのですかなア。同じ智慧や意思の人間ばかりが、一所に集まつて居る程、愉快な事はありますまい」

「あゝさうです、愛の善といふものは凡て吸引力の強いもので、又無限の生命を保有してゐるものです。天人であらうと現界人であらうと地獄界の人間であらうと、それ相應の愛に仍つて生命が保たれてゐるのですからなア、そして其愛なるものは凡て嚴の御靈、瑞の御靈の御神格より内分的に流れ來るものですから、實に無始無終の生命ですよ、あゝ惟神靈幸倍坐世」  
(大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 松村眞澄録)

第一三章 下層天國(一一二四六)

高天原の天國の	東と西との團體に
住む天人は信愛の	其善徳に居るものぞ
東はいとも分明に	愛の善徳感得し

西にしには少すこしおぼるげに 感かんずるもののみ住すめるなり

南みなみと北きたとの團だん體たいは 愛あい信しんの徳とくより出いで來きたる

智ち慧ゐ證しょう覺かくに居をれるもの いや永とこ久しへに住ぢゆう居きよせり

中なかにも南みなみに住すむものは 證しょう覺かく光ひか明めい白はくに

北きたは證しょう覺かくおぼるげに 光ひかれるもののみ住すめるなり

高たか天あま原はらの靈れい國こくに ある天てん人にんと天てん國こくに

ある天てん人にんは皆みな共ともに 右みぎの順じゆん序じよを守まもれども

少すこし相さう違ゐの要えう點てんは 一ひとつは愛あいの善ぜん徳とくに

從したがひて進すすみ又また一ひとつは 善ぜんの徳とくより出いで來きたる

信しんの光ひかりに從したがうて いや永とこ久しへに住すめるなり

此この天てん國こくにある愛あいは 神かみに對たいする愛あいにして

之これより來きたる眞しん光くわうは 全まく智ち慧ゐと證しょう覺かくぞ

又また靈れい國こくにある愛あいは 隣りん人じんに對たいする愛あいにして

之これを稱しょうして仁じんと云いふ 此この仁じん愛あいより出いで來きたる

眞しんの光ひかりは智慧ちゑなるぞ

或あるひは之これを信しんと云いふ

久方ひさかたの高天原たかあまはらの神國しんこくには

時間じかん空間くうかん春夏秋冬しゅんかしうとうの區別くべつなし

只ただ天人てんにん各自かくじが

情態じやうたいの變化へんくわあるのみ

現うつし世よに於おけるが如ごとく、天界てんかいの

萬事ばんじに繼續けいぞくあり進行しんかうもあり

されど天人てんにんは

時間じかんと空間くうかんとの

概念がいねんなし

久方ひさかたの高天原たかあまはらには

年としもなく

月つき日もあらず時ときもなし

只ただ情態じやうたいの變移へんいあるのみ

情態じやうたいの變移へんいの

ありし所ところには

只ただ情態じやうたいばかりあるなり

現界げんかいの

凡すべての人ひとは

時間じかんてふ

其その概念がいねんを離はなる能あたはず

天人てんにんは

皆みな情態じやうたいの

上うへより之これを思し惟あすれば

人ひとの想念さうねんの中うちに於あて

時間じかんより

來きたれるものは

天人てんにんの間にあひだ入りては

皆みな悉ごとく

情態じやうたいの想念さうねんとなるものぞ

春はると朝あさは

第一だいいち情態じやうたいに於おける

天人てんにんが居をる所ところの

愛あいの善ぜん及および

證覺しやうかくの境涯きやうがいに對たいする

想念さうねんとなるものぞ

夏なつと午時うまどきは

第二だいに情態じやうたいにある天人てんにんが

居をる所ところの愛善あいぜん及および



證覺しやうかくの境涯きやうがいに對たいする

想念さうねんとなるものぞ

秋あきと夕ゆふべとは

第三だいさん情態じやうたいに於おける

天人てんにんが居をる所ところの愛善あいぜん及および

證覺しやうかくの境涯きやうがいに對たいする

想念さうねんとなるものぞ

冬ふゆと夜よるとは

地獄ぢごくにおちし精靈せいれいが

之等これらの境涯きやうがいに對たいする

想念さうねんとなるものぞ

言こと依別よりわけ命のみことは治國はるくに別わけに向むかつて尚なほも天國てんごく團體だんたいの說明せつめいを續つづけて居ゐる。

治國はるくに實じつに天國てんごくと云いふ所ところは、吾々われわれの想像さうざう意外いぐわいに秩序ちつじよのたつた立派りつぱな國土こくどですな。

到底たうてい吾々われわれ如ごとき罪惡ざいあくに充みちた人間にんげんは將來しやうらい此國土このこくとに上のほる見込みこみはない様やうですな〃

決けつして決けつして左様さやうな道理だうりはありませぬ、御安心ごあんしんなさいませ。此處ここは最下さいかの天國てんごく

で、まだ此上このうへに中間天國ちうかんでんごくもあり、最高天國さいかうてんごくもあるのです。猶なほ其外そのほかに靈國れいごくと云いふの

があつて、それ相應さうおうの天人てんにんが生活せいくわつを續つづけて居ゐます〃

其最高天國そのさいかうてんごくへ上のほり得うる天人てんにんは、非常ひじやうな善德ぜんとくを積つみ、智慧ちゑしよつかく證覺じやうかくの勝すぐれたものでな

ければ參まゐる事ことは出來できますまいな〃

嚴いづの御靈みたまの聖言せいげんにもある通とほり、生うまれ赤子あかこの純粹じゆんずゐ無垢むくの心こころに歸かへりさへすれば、直ただ

ちに第一だいいち天國てんごくと相應さうおうし、神格しんかくの内流ないりうによつて案外あんぐわい容易よういに上のほり得うるものです〃

成程なるほど、然しかし吾々われわれは如何どうしても赤子あかこの心こころにはなれないので困こまります。然しかし天國てんごくに

も矢張やはり自然界しぜんかいの如ごとき太陽たいやうがおでましになるのでせうな〃

アレ、あの通とほり東ひがしの天てんに輝かがやいて居をられます。貴方あなたには拜をがめませぬかな〃

ハイ、遺憾あかん乍なら未まだ高天原たかあまはらの太陽たいやうを拜はいする丈だけの視力しりよくが備そなはつて居ゐないと見みえ

ます〃

さうでせう。貴方あなたには未まだ現實界げんじつかいに對たいするお役目やくめが殘のこつて居ゐますから、現界げんかいか

ら見る太陽の様に拜む事は出来ずまい。天國の太陽とは嚴の御靈の御神格が顯現して、茲に太陽と現はれ給ふのです。故に現界の太陽とは非常に趣が違つて居ります。靈國にては瑞の御靈の大神月と現はれ給ひ、天國にては又太陽と現はれ給ふのであります。さうして靈國の月は現界から見る太陽の光の如く輝き給ひ、又天國の太陽は現界で見る太陽の光に七倍した位な輝き方であります。さうして日は眞愛を現はし、月は眞信を現はし、星は善と眞との知識を現はし給ふのであります。故に瑞の御靈の聖言には、

一、月の光は日の光の如く、日の光は七倍を加へて七つの日の光の如くならむ。

一、我汝を亡ぼす時は空を覆ひ其星を暗くし雲を以て日を蔽はむ。月は其光を放たざるべし。

一、我、空の照る光明を汝等の上に暗くし汝の地を暗となすべし。

一、我は日の出づる時之を暗くすべし。又月は其光を輝かさざるべし。

一、日は毛布の如く暗くなり、月は地の如くなり、天の星は地に落ちむ。

一、之等の艱難の後、直ちに日は暗く月は光を失ひ、星は空より落つべし。

とありませう。此聖言は愛と信との全く滅亡したる有様を、お示しになつたのでせう。今日の現界は自然界の太陽や月は天空に輝き渡つて居りますが、太陽に比すべき愛と、月に比すべき信と星に比すべき善と眞との知識を亡ぼして居ますから、天國の移寫たる現實界も今日の如く亂れ果てたのです。かかる事を稱して聖言は……之等の諸徳、亡ぶる時、之等の諸天體暗くなり其光を失ひて空より落つ……と云はれてあるのです。大神の神愛の如何に大なるか又如何なるものなるかは現界に輝く太陽との比較によつて推知する事が出来るでせう。即ち神の愛なるものは頗る熱烈なる事が窺はれませう。人間にして實に之を信ずる事を得るならば、神様の愛は現實界の太陽の熱烈なるに比較して層一層強いと云ふ事が分りませう。大神様は又現實界の太陽の如く直接に高天原の中空に輝き給はず、その神愛はおひおひ下降するに従つて熱烈の度は和らぎ行くものです。此和らぎの度合は一種の帯をなして天界太陽の邊を輝き亘り、諸々の天人は又此太陽の内流によつて自らの身を障害せざらむが爲め、適宜に薄い雲の如き靈衣を以て其身を覆うて居るのです。故に高天原に於ける諸々の天國の位置は其處に住める天人が神の

愛を攝受する度合の如何によつて大神の御前を去る事或は遠くなつたり、或は近くなつたりするものです。又高天原の高處即ち最高天國に居る天人は愛の徳に住するが故に、太陽と現はれたる大神の御側近く居るものです。されど最下の天國團體にあるものは信の徳に住するものなるが故に、太陽と現はれ給うた大神を去る事最も遠きものであります。ここは即ち其高天原の最下層第三天國の中でも最も低い所ですから、太陽と現はれました大神の御光を拜する事が餘程遠くて現界の太陽を拜する如く明瞭に分らないのです。さうして最も不善なるもの、例へば暗國界の地獄に居るものの如きは、大神様の目の前を去る事極めて遠く且つ太陽の光に背いて居るものである。さうして其暗國界に於ける神と隔離の度合は善の道に背く度合に比するものである。故に極惡の者は到底少しの光も見ることが出来ず無明暗黒の最低地獄におつるものであります。』

『やア有難うムいました。吾々はまだ善と眞よりする智慧證覺が足りませぬから、大神の御姿を仰ぐ事が出来ないのでせう。』

『第三天國の天人等の前に神其儘太陽となつて現はれ給ふ時は、各眼晦み頭痛を

感じ苦みに堪へませぬ。それ故大神様は一個の天人となつて、善相應、眞相應、智慧證覺相應の團體へお下り遊ばし、親しく教を垂れさせ給ふのであります。『いや大に諒解致しました。私も之から現界へ歸りますれば、其心得を以て善の爲め眞の爲めに活動をさして頂きませう。あゝ惟神靈幸倍坐世』

『サア之から天人の團體へ御案内致しませう』  
はるくにわけ 龍公は、  
治國別、龍公は、

『ハイ、有難う』

と感謝しながら言依別の後に從ひ欣々として進み行く。

二三丁ばかり丘を下り行くと、忽ち巨大なる火光と化し言依別は天空さして其姿を没し給うた。二人は暗夜に燈をとられし如き心地し、大地に跪き感謝に咽びながら、

『あゝ有難し、勿體なし、吾々の愛と善の徳、全からず信眞の光明らかならず、從つて智慧と證覺の光弱き爲めに、畏れ多くも皇大神は天國の太陽と現はれ給はず、言依別命と身を現じ、此處迄導いて下さつたのだらう。あゝ有難し有難し、

仁慈無限の大神の御神徳よじんじむげん おほかみ ごしんとく

と感謝の涙に暮れてゐる。かんしゃなみだ く

「もし先生、之から如何致しませうか。斯様な處に捨てられては如何行つてよいせんせい これ どういた かやつところ す どうい

か、少しも分らぬぢやありませんか。あれ程最前明瞭に見えて居つた東西南北のすこ わか ありませんか。 あれ程最前明瞭に見えて居つた東西南北の

天人の部落も、何時の間にか吾々の視線内を外れて了つたぢやありませんかてんにん ぶらく いつの間にか吾々の視線内を外れて了つたぢやありませんか

「獅子は三日にして其子を谷底へ捨てるとやら、これ全く神様の仁慈無限の御攝しし みつか そのこ たにそこ す まった かみさま じんじむげん ごせつ

理だ。これだから三五教の聖言にも「師匠を杖につくな、人を力にするな、只神りだ。 これだから三五教の聖言にも「師匠を杖につくな、人を力にするな、只神

のまにまに活動せよ」と仰有るのだ。言依別様の御案内下さるに甘え、氣を許し、のまにまに活動せよ」と仰有るのだ。言依別様の御案内下さるに甘え、氣を許し、

凭れかかつて居つたが吾々の過ちだ。それだから神様は吾々の想念中より遠ざかもた たま かくつて居つたが吾々の過ちだ。それだから神様は吾々の想念中より遠ざか

り給うたのだ。吾々はまだまだ愛と信とが徹底しないのだ。あゝ惟神靈幸倍坐世たま がつしやう われわれ あい しん てつていのだ。 あゝ惟神靈幸倍坐世

と合掌し感涙に咽びつつ主神に祈りを凝すのであつた。

（大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 北村隆光録）

第一四章 天開の花（一二四七）

格かくの充みたされむ事ことを祈願きぐわんしつつあつた。  
治國はるくにわけ別べつ、龍公たつこうりやうにん兩人にんは一心いっしん不亂ふらんに油斷ゆだんと慢心まんしんの罪つみを謝しゃし、一時いちじも早くはや吾精靈わがせいれいに神しん

そこへ天國てんごくには居をるべき筈はずもない臭氣しうき紛々ふんぶんたる弊衣へいいを着ちやくし、二目ふためとは見みられぬ  
様な醜面しうめんを下さげ、膿汁うみじりのポトポトと滴したたる體からだをしながら、三尺さんじやくばかりの百足蟲むかでの杖つゑ  
をつき二人ふたりの前まへに現あらはれ來きたり、忽たちまち岩石がんせきに躓つまづき苦悶くもんし初はじめた。龍公たつこうは驚おどろいて、  
もし、先生せんせい、天國てんごくには決けつして斯様かやうな穢きたないものは居をらない筈はずです。こりや何時いつの  
間まにか慢心まんしんして地獄ぢごくへ逆轉ぎやくてんしたのぢやありますまいか。此この通りとほ四方しほうは暗雲あんうんに包つつま  
れ、一丁いちぢやう先さきは見みえぬ様やうになり、得えも云いはれぬ陰鬱いんうつの氣きが襲おそうて來きたぢやありませ  
ぬか

否々いやいや決けつして地獄ぢごくではあるまい。最下層さいかそうの天國てんごくに相違さうあない。然しかしながら矢張やはり天  
國ごくにも不幸ふかうな人ひとがあると見みえ、斯様かやうな業病ごふびやうに罹かかり苦くるんである方かたがあると思みえる。  
何とかして救すくうてやらねばなるまいが、吾々われわれが救すくふと云いふのは之これ亦また慢心まんしんだ。何どう



か神様の御神格を頂いて御用に使つて頂き度いものだ」

と神に合掌し初めた。龍公は袖を引いて小聲になり、

「もし、先生、こんな穢い人間に觸らうものなら、靈身が穢れて忽ち地獄の團體へ落轉せねばなりませんまい。決してお構ひ遊ばすな。大變でムります」

「いや、さうではない。天國は愛善の國だ。神は愛と信とを以て御神格と遊ばす

のだ。吾々も神様の愛と信とを受けなくては生命を保つ事は出来ない。さうして

神より頂いた此愛と信を洽く地上に分配せねばなるまい。地獄におつるのを恐れ

て現在目の前に苦んでゐる此憐れな人々を救はないと云ふのは、所謂自愛の心だ、

自愛の心は天國にはない。假令此場所が地獄のドン底であらうとも、自愛を捨て

善と愛との光明にひたる事を得るならば、地獄は忽ち化して天國となるであらう」

「さう承はればさうかも知れませぬな。然し乍ら斯様な天國へ来て居りながら、

あの様な穢い人間に觸れて、折角磨きかけた精靈を穢す様な事があつては、多勢

の人間を娑婆へ歸つて救ふ事が出来ずまい。只の一人を助けて精靈を穢すより

も、此場は見逃して多勢の爲めに愛と信との光を輝かす方が、何程神界の爲にな

るか知れませぬぜ。此處は一つ考へ物ですな

「いや決してさうではない。目の前に提供された、いはば吾々の試験物だ。此憐れな人間を見逃して行過ぐる位ならば、到底吾々の愛は神の神格より来る眞の愛ではない。矢張り自然界と同様に自愛だ、地獄の愛だ。斯様な偽善的愛は吾々の採るべき道ではない」

斯く話す時しも、前に倒れた非人は治國別を打眺め、

「おい、そこな宣傳使、俺は今斯様に業病を煩ひ、剩つさへ岩に躓き、此通り足を挫き苦み悶えて居るのだ。早く來て抱き起して呉れないか」

治國別は、

「ハイ、承知致しました」

と、ツと側に寄り體を抱き起さうとすれば、臭氣紛々として鼻をつき、身體一面に蛆がわき、いやらしき種々雑多の蟲共が體一面にウヨウヨと、肉體の腐つた部分から數限りもなくはみ出してゐる。治國別がかけた手には幾百とも限り知られぬ蛆がゾウゾウと傳うて、治國別の全身を瞬く間に包んで來る。龍公は之を見て、

「もし先生、何ぼ何でも、そんな腐つた人間を相手になさつちや、いけませんよ。到底助かる見込はありませんよ。それ御覽なさい、體一面蛆がわいてるぢやありませんか」

治國別は言葉靜かに、

「何處の誰方様か知りませぬが、嘸御難儀でムりませう。サア私の肩にお縋り下さい。何處迄なりとお宅迄送つて上げませう」

「うん、俺の云ふ事は何でも聞くだらうな」

「ハイ、如何なる事でも吾々の力の及ぶ限りは御用を承はりませう」

「先生、宜い加減に止めたら如何ですか。あんまり物好きぢやありませんか。何程人を助けるが役だと云つても、二目と見られぬ體を抱起して貰ひながら、まるで主人が僕に對する様な言葉を用ゐ、馬鹿にして居やがつて……お禮の一言位云つた處で宜しからうに……其様な恩も義理も知らぬ位だから、此天國に来てもやっぱり苦んでゐるのですよ。神様の罰が當つてゐるものを、何程宣傳使だつて構はぬでもいいでせう。臭い臭い、エグイ香がして來た」

「こりや龍公、慢心を致すな。此方の足を擦れ」

「チヨツ、エー」

「おい龍公、俺の命令だ。此非人さまの云ふ通り、お足を揉まして貰へ」

「ぢやと申して、それが……」

「何が「ぢやと申して」だ。左様な不量見の奴は、只今限り師弟の縁を切る。俺

はもうお前と何處へも一緒には行かない」

「エーエ、ぢやと申して、それが如何して……」

「こりや龍、俺の尻を嘗め。早く嘗めぬかい」

「エー、馬鹿にして居やがる。貴様等のアタ穢い尻を嘗める位なら、俺や死んだ

がました。アーン アーン アーン」

「表に善を標榜する偽善者奴、今に貴様も俺の様な病氣にかかるが、それでも宜

いか」

「そ……そんな業病にかかる様な……ワ、悪い事はした事はないワイ。あんまり馬鹿にすな。俺の大切のお師匠さまを、僕か何ぞの様に使つて、二目と見ら

れない體を介抱させ、尚其上に世話をさせやがつて……エー、もう先生、こんな奴はい加減にしておきなさいませ」

「これも神様の御恵みだ。袖ふり合ふも他生の縁、かかる尊き天國に於て、かうしてお目にかかるのも何かの御神縁だらう。何程汚き人間様でも、神様の愛の神格に照らされてからは、少しも汚穢を感じない。實に有難く感じてゐる。お前も此方に會うたのを幸ひに、身の罪を償ふべく介抱をさして頂いたら如何だ」

「おい、治國別、俺の足の裏を一寸嘗めて呉れ。大分に膿が出て居る様だ。此膿を吸ひとらねば如何しても歩く事は出来ない」

「ハイ、有難うムります。御用さして頂きます」

と云ひながら、足の裏の膿をチウチウと吸ひかけた。龍公は堪りかね、

「無禮者」

と云ひながら、拳骨をかためて非人の頭をポカンと殴つた。拍子に醜穢見るに忍びなかつた非人の姿は、忽ち容色端麗なる妙齡の美人と變り、得も云はれぬ笑をたたへながら、

「治國別さま、貴方は本當に神の愛が徹底しましたよ。サア妾と天國の旅を致しませう。龍公さまの様な無情漢は、此處に放つといてやりませうよ」

「私は、憐れな精神上の不具なる此龍公を直してやらす、捨てて行く事は出来ませぬ。龍公と共に天國の巡覽が出来ねば、最早仕方がありません。彼と苦樂を共にする考へなれば、何卒貴女はお一人おいでなさいませ」

「成程、さうでなくては神の愛が徹底したとは云へない。治國別殿、天晴々々、妾は天教山の木花姫でゐるぞや」

「治國別は二足三足後へしざり、大地に手をついて一言も發し得ず、感謝の涙にくれてゐる。木花姫は言葉淑やかに、

「治國別さま、貴方はよくそこ迄善の道に徹底して下さいませ。嘸大神様も御満足でゐりませう。最前言依別命と現はれ給うたのは、國治立尊様でゐりましたよ」

「ハイ、初めの間は智慧暗く證覺うとき治國別、全く言依別命様とのみ思ひ居りましたが、如何やら大神様の御化身なりし事をおぼるげに考へさして頂きまして、

感謝かんしゃの涙なみだにくれて居をりました處ところへ、貴方あなた様の御試おこころみに預あづかり、願ねがうてもなき御神徳ごしんとくを頂戴ちやうだい致いたしました。何卒なにとぞ々々なにとぞ、此龍公このたつこうも私同様にわたくしどうやうお目をめかけてやつて下くださいませ」

龍公たつこうさま、貴方あなたも随分ずぶん義ぎの固かたい人ひとですな。もう少しすこ愛あいが徹底てつていすれば天國てんごくが立派りつぱに被面布ひめんぷをといて上のぼれますよ。師匠ししやうを思おもふ眞意まごころは實じつに感服かんぷく致いたしました。其忠良そのちうりやうなる志こころざしによつて、貴方あなたの愛あいの缺點けつてんを補おぎなふ事ことが出来できますから、益々ますます魂たまを磨みがいて天國てんごくの巡覽じゆんらんを成なさいませ」

龍公たつこうは感涙かんるゐに咽むせびながら、

『重々じゆうじゆうの御懇切ごこんせつなる御教訓ごけうくん、有難ありがたうムります。左様さやうなれば、お供ともをさして頂いただきませう』

『ここは最下層さいかそうの天國てんごく、これより中間ちうかんの天國團體てんごくだんたいへ案内あんない致いたませう。中間天國ちうかんてんごくの天人てんにんの證覺しよつかくや智慧ちゑ及びおよび愛あいと信しんは、下層かそうの天國てんごくに住すむ天人てんにんに比くらべれば、萬倍まんばいの光明くわうみやうが備そなはつて居をります。それ故ゆゑ此天國このてんごくより一萬倍いちまんばいの愛あいの善ぜんと信しんの眞しん、智慧證覺ちゑしよつかくを備そなへなくては、假令たとへ天國てんごくへ無理むりに上のぼるとも、眼まなこくらみ、頭痛づつうはなは甚はなはだしく、力衰ちかおとろへ、殆ほとんど自分じぶんの生死せいしの程ほども分わからない様やうになるものですよ。龍公たつこうさまは被面布ひめんぷを頂いただかれて、

先づ之で第二天國の探險も出來ませうが、治國別様は其儘では到底參れませうまい。  
妾が所持の被面布を上げませう』  
と云ふより早く懷中より取出し、手早く治國別の頭部にかけ給うた。之より治國別、龍公は木花姫の後を慕ひ、足に任せて東を指して一瀉千里の勢ひで進み行くのであつた。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 北村隆光録)

## 第一五章 公義正道 (一二四八)

最奥一の天國に 在る天人の想念と  
其情動と言語とは 決して中間天國の



天人共の知覺し得る  
ものには非ず何故ならば

最奥の天國人の一切は  
中天界の事物より

勝れて超絶すればなり  
さはさりながら大神の

心に叶ひし其時は  
中天國の天人は

上天高く仰ぎ見て  
火焰の如き光彩を

天空高く見るものぞ  
又中天の天人の

想念及び情動と  
言語はさながら光明の

如きものとし最下層の  
天國人より見るを得む

其光彩は輝きて  
いろいろ雑多の色をなし

或は雲と見ゆるあり  
其雲及び光彩の

上下の模様を初めとし  
其形態に思索して

ある程度迄上天に  
於ける天人諸々の

言説し居る状態を  
遙に悟り得らるなり

最高奥の天國は  
いと圓滿に具足して

神光輝きみち渡り

中天界に比ぶれば

圓滿の度はいと高し

次に最下の天國に

下るに及んで其度合

一層低きを加ふべし

又甲天の形式は

神より来る内流に

よりて全く乙天の

ために永久に存在す。

高天原の形式を、其細目に亘つて了解する事や、又此形式が如何なる情態に活動し、如何に流通するかを會得するのは、現在天國にある天人と雖も能くし得ざる所である。これを譬ふるならば、最も聰明にして神の智慧に富んだ人が、人體に於ける種々の事物の形態を検査し、これより推して考へる時は、高天原の其形式に關して、或は其大要を悟り得る事が出来るであらう。高天原の全體の形式は、一個の人身に似て居る様である。又人身中に於ける萬の事物は總て高天原の事物に相應するものである。故に高天原の形式が如何に人間として解し難く、又説明し難きかは、人間各部を連結する所の神経や纖維を見たならば、略察知する事が

出来るであらう。是等の神経纖維は抑何物なるか、又如何にして腦髓中に活動し  
流行し居るかは、如何なる醫學博士と雖も、肉眼を以て、或は顯微鏡をもつて見  
得るものではない。人間の頭腦中には無數の纖維があつて、交叉する様や其集ま  
れる所より見れば、實に柔かき連絡した一つの固まりに似て居るけれど、意性及  
び智性よりする所の個々別々の活動は、皆此纖維によつて行はれて居る事は無論  
である。總て是等の纖維が肉體中にあつて、如何にして相結束し活躍するかは種々  
様々の中樞機關、例へば心臟肺臟胃腸、其他のものを見れば明かである。又醫學  
上に於て、神経節と呼ばれて居る神経の束を見れば、數多の纖維が各其局部より  
來つて此處に集まり、茲に交雜し、又種々に連結したる後、再び此處を出で行き、  
外にあつて各其官能を全うするものである。而して斯の如きもの一再にして止ま  
らない。又各臟腑や各肢體各筋肉にあつても此通りである。證覺者の目を以て是  
等の事物と其數多の不可思議とを考査する時は、唯々其幽玄微妙なる活動に驚嘆  
するの外はないのである。併しながら以上は肉眼にて見得る所のほんの僅少の部  
分的觀察に過ぎないのである。其自然界の内面にかくれて、吾人の視覺の及ばな

い所にある物に至つては、更に一層の不可思議を包んで居るのである。以上の身體上の形式の、高天原の形式と相應すると云ふ事は、其形式の中にあり、之によつて働く所の智性と意性とが、萬般に對し發作するを見ても明かである。人間が其意に決する所があれば、皆自らにして此形式の上に發作するからである。又人苟くも何事か思惟する所があれば、其想念は最初の發作點より末端に至つて神經纖維の上に環流せざるはなく、是よりして茲に感覺なるものがある。さうして此形式はやがて想念と意思との形式である故に、又智慧と證覺との形式なりと云つてもよいのである。故に天界の形式は、人體に於ける總ての諸官能の活動に相應するものなる事を知り得らるのである。又天人の情動と想念とは悉く此形式に従つて、自ら延長するものなる事を知り、彼等天人はこの形式の内にある限り、智慧と證覺とに居るものなる事を知り得らるのである。併しながら高天原の形式は、其大體の原則すら充分に探究すべからざる事を、自然界の科學萬能主義者に知らさむために、人間の身體を例に引いて見たのである。

高天原には三つの度ある如く、各天人の生涯にも亦、三つの度があつて、最高

第一の天國及靈國にあるものは、第三度即ち最奥の度が開けて居り、中間の天界と最下の天界とは塞がり、又中間天界に居るものは、第二度のみ開けて、上天と下天とは塞がれ、又最下層の天界にあるものは第一度のみ開けて、中間天界と上天とは塞がつて居るのである。故にもし上天國の天人にして中天國の團體を瞰下して、之と相語る事あらむには、上天人が有する第三度は忽ち塞がつて了ふのである。而して其閉塞と共に證覺迄も亡ぶのである。何故なれば、上天國の天人の證覺は、第三度に住し、第一及び第二の度に居らないからである。瑞の御靈の聖言に、

一、屋上にあるものは、其家のものを取らむとて下るなかれ。田に居るものは、其衣を取らむとて歸るなかれ。

一、其日には人屋上にあれば、其器具室にあるともこれを取らむとて下るなかれ。又田畑にあるものも歸るなかれ。

と示されたるは右の密意を示されたる言葉である。さうして下層の天界より、上層の天界へは神格の内流なるものがない。それは神の順序に逆らふからである。

神は一名順序と讚へ奉つてもよいものである。故に上天界より下天界に向つては内流がある。さうして上天界の天人の證覺は下天界の天人に勝る事萬と一とに比例するのである。是亦下天界の天人が上天界の天人と相語る事の出来ない理由である。假令下天界の天人が仰ぎ望む事あるも、更に更に其姿を見る事を得ず、唯上天界は尚雲が頭上にかかつて居る如く見えるばかりである。これに反し上天界の天人は、下天界の天人を見る事が出来る。併し乍らこれと相語る事は出来ない。もしも下天界人と相語るやうな事があれば、忽ち其證覺を失ふものである。高天原に於ける諸々の團體中の天人は、善と眞とに居る事何れも同様なれども、其證覺には様々の程度がある故に、必然の理由として高天原にも又統治の制度が布かれてある。諸天人は何うしても、其順序を守らねばならぬ。さうして順序に關する百般の事項は、どうしても破壊する事は出来ぬ。それから高天原の統治の制度は決して一様ではない。其團體々々に於ける個々の制度が布かれてある。瑞の御靈の大神の司り給ふ靈國即ち月の國を構成する團體にも亦一種の統治制度が布かれてある。各團體の職掌の異なるにつれ、其制度にも亦不同あるは止むを得ない。

併し高天原に於ては、相愛の制度を外にしては別に制度なるものはないのである。高天原に於ける統治制度を稱して正道と云ふ。大神に對する愛善の徳に住して行ふ所を總て正道と云ふのである。この統治制度は唯大神のみに屬するものである。つて、大神が御自身に諸天界の天人を導き、又之に處世の事物を教へ給ふ公義上の理法とも云ふべき種々の眞理に至りては、各天人中の心中に明かに記憶さるをもつて、天人として之を識り又之を知覺し、又之を感得し得ないものはない。故に公義上の事件に就いては爭議上の種とはならないけれども、正道上の事件即ち各天人が實踐躬行上の事件のみは時々疑問となる事がある。斯の如き正道上の事件の起つた時には證覺の少きものより是を自己より勝れたる天人に正し、或は之を直接大神に教を請うて、其結着を定むるものである。故に天人は唯正道に從つて、大神の導き給ふが儘に生息するのをもつて自分等の天界となし、又極秘の歡喜悅樂とするのである。次に大神の靈國即ち月の御國に於ける制度を、公義と云ふ。靈國の諸天人は靈善に居るからである。靈善とは、隣人に對する仁の徳を云ふのである。さうして其實性は眞である。而して眞は即ち公義に屬し、善は正

道だうに屬ぞくするものである。今茲いまここに月つきの國くにと云いつたのは、現在げんざい地球ちきうじやう上じやうの人間にんげんが見みる月げつ球きうの事ことではない。神かみの神格しんかくによつて構成こうせいされたる靈的れいてきこくど國土こくどである。この國土こくどに住すめる諸々もろもろの天人てんにんは亦また大神おほかみの導みちびき給たまひ、統治すべをさめ給たまふ所ところなれども、直接ちやくせつならざるが故ゆゑに茲ここには統治者とうちしやなるものが出來できて居ゐる。其その統治者とうちしやの多寡たくわは、各かく其所屬團體しよぞくだんたいの必要ひつえうによつて設まうけらるるものである。又茲またここには律法りつぽうが制定せいていせられて諸々もろもろの天人てんにんは之これに従したがひて群居ぐんきよして居ゐるのである。統治者とうちしやは其律法そのりつぽうによつて數多あまたの事物じぶつを統制とうせいするの任務にんむに當あたつて居ゐる。さうして、是等これらの天人てんにんは何れも證覺しやうかくあるにより、その律法りつぽうをよく解かいし、萬一まんいち疑うたがふ所ところあれば、大神おほかみが下くだらせ給たまうて、之これに明白めいはくなる解釋かいしやくを與あたへ給たまふ事ことになつて居ゐる。天國てんこく即すなはち日ひの國くににあるが如ごとき、善ぜんによつて行おこなはるる統治とうちを正せい道だうと云いひ、靈國れいこく即すなはち月つきの國くににあるやうな眞しんによつて行おこなはるる統治とうちを公義こうぎと云いふのである。天國てんこく、靈國れいこくの各團體かくだんたいの統治者とうちしやは現代げんだいに於おける各國かくこくの統治者とうちしやの如ごとく、決けつして自ら尊大そんだい振びるものでない、却かへつて卑下ひげし且かつ謙讓けんじやうの徳とくを充みたして居ゐるものである。さうして其團體そのだんたいの福利ふくりと隣人りんじんの事ことを第一だいいちに置おいて、自己じこの福利ふくりを最後さいごにおくものである。けれども其統治者そのとうちしやは非常ひじやうなる名譽めいよと光榮くわうゑいとを有いつて居ゐる。是等これらの統治者とうちしや



は自分に與へられたる光榮と名譽は全く大神の與へられたるものたる事を自覺し、他の天人が自分に服従するのは、これ全く大神の御稜威なる事を知つて居るから、自然に謙讓な徳が具はり尊大振らぬのである。

(大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 加藤明子録)

## 第一六章 靈丹(一二四九)

天教山にあれませる  
木花姫の御化身に

案内されて第三の  
天國界を後にして

五色の雲を踏み分けつ  
東をさして上り行く

治國別や龍公は  
如何はしけむ目は眩み

頭は痛み足はなえ  
胸は轟き兩の手は

ちから  
力も落ちてブルブルと  
慄ふるひ出すぞ是非ぜひなけれ

このはなひめ  
木花姫の御化身ごけしんは  
順風じゆんぷうに眞帆まほをかけたる

いそ  
磯のこぶね小舟の進むごと  
何なんの故障こしやうもあら不思議ふしぎ

とんとんとんと上のぼります  
治國はるくにわけ別わかや龍公たつこうは

ふ  
吹く息いきさへも絶たえ絶だえに  
命いのちかぎ限かぎりの聲こゑしほり

これこれもうし木花このはなの  
姫ひめの命みことの神司かむつかさ

しほり  
暫しばりく待まちたせ給たまへかし  
如何いかなる譯わけか知らねども

なん  
何なんとはなしに目めは眩くらみ  
意識いしきは衰おとろへ力ちから落ち

しんたい  
進退しんたい茲ここに極きはまりて  
最も早はや一いつ歩ぽも進すすめない

なにとぞ  
何卒なにとぞお慈悲じひに兩りやう人にんを  
も一いち度ど後あとに引ひき返かへし

たす  
お助たすけなさつて下くだされや  
偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

あさひ  
朝日あさひは照てるとも曇くもるとも  
月つきは盈みつとも虧かくるとも

たとへ  
假令たとへ大地だいちは沈しづむとも  
尊たふとき神かみの御惠みめぐみは

よ  
いつの世よにかは忘わすれませう  
抑そも天國そんごくの存在そんざいは

神の慈愛を善眞の

其高德に構成され

愛と善とに満ち満ちし

神の國土で御座いませう

貴神も尊き神なれば

吾等二人の苦みを

決して見捨て給ふまじ

かへさせたまへ惟神

木花姫の御前に

命限りに願ぎまつる

嗚呼惟神々々

御靈幸はへましませよ

と歌ふ聲も切れ切れに第二天國の入口迄來てバタリと平太り込んで了つた。龍公

は唯一言も發し得ず、癡呆の如く口をポカンと開いたまま僅かに指先を間歇的に

動かして居る。木花姫は後ふり向きもせず巨大なる光と化して、天の一方に姿を

隠させ給うた。治國別は後打ち眺め、

「あゝ、過つたりな過つたりな。自愛の欲に制せられ、吾身の苦しさに木花姫様

の救助を求めた愚かしさよ。「師匠を杖につくな、人を頼りにするな」と云ふ御

教を、正勝の時になつて忘れて居たか。あゝ人間と云ふものは、何と云ふ淺まし

いものであらう。龍公はもはや蟲の息、かかる天國に於て、精靈の命までも捨てねばならぬのか、あゝ何うしたらよからうな。國治立大神様、豊國主大神様、神素盞鳴大神様、何卒々々此窮状を、も一度お救ひ下さいませ。と色蒼ざめ、殆ど死人の如くなつて、合す兩の手もピリピリ慄ひ戦き、實に憐れ至極の有様となつて來た。願へど、祈れど、呼べど、叫べど唯一柱の天人も目に入らず、神の御聲も聞えず、四邊寂然として物淋しく、立つても居ても居られなくなつて來た。龍公はと顧みれば、哀れにも大地に蛙をぶつつけた如く手足をのばし、殆ど死人同様になつて居る。されど治國別は何處迄も神に従ひ神に頼り、神の神格を信じ、斯かる場合にも微塵も神に對し不平又は怨恨の念を持たなかつた。治國別は決心の臍を固め、

「あゝどうなり行くも神の御心、吾々人間の如何ともすべき限りでない。神様、御心の儘に遊ばして下さい。罪惡を重ねたる治國別、過分も此清き尊き天國に上り來り、身の程をわきまへざる無禮の罪、順序を亂した吾等の罪惡を、何卒神直日、大直日に見直し下さいまして、相當の御處分を願ひます」

と祈る聲も細り行き、最早絶體絶命となつて來た。此時俄に天の戸開けて天上より金色の衣を纏ひたる目も眩きばかりの神人、二人の脇立を従へ、雲に乗つて二人の前に悠々と下らせ給ひ、懷より靈丹と云ふ天國の藥を取り出し、二人の口に含ませたまへば、不思議なるかな二人は正氣に返り、勇氣頓に加はり、瘦衰へた體は元に如く肥太り、顔色は鮮花色と變じ、得も云はれぬ爽快の氣分に充されて來た。二人は恐る恐る面を上ぐれば、威容儼然たる男とも女とも判別し難き優しき天人、その前に莞爾として立たせたまふのであつた。治國別は思はず手を拍ち、

「あゝ有難し有難し、大神の御仁慈、罪深い吾々をよくもお助け下さいました。有難う存じます」

とよくよくお顔を見れば、以前に別れた木花姫命が、二人の侍女を連れ立たせ給ふのであつた。

「ヤア、貴神は木花姫命様で△いましたか。誠に誠に御仁慈の段感謝の至りに堪へませぬ」

「神様、能くまアお助け下さいました。龍公は既に既に天國に於て野垂れ死をす

る所でムいました。天國と云ふ所は、眞に苦しい所でムいますなア」

「總て天國には善と眞とに相應する順序が儼然として立つて居りますから、此順序に逆らへば大變に苦しいものですよ。身靈相應の生涯をさへ送れば、世の中は實に安樂なものです。水に棲む魚は、陸に上れば直に生命がなくなるやうなものでムります」

「成程御尤もでムいます。八衢に籍を置いて居る分際をも顧みず、神様のお言葉に甘え、慢心を起し、天國の巡覽などを思ひ立つたのは、吾々の不覺不調法の罪、何卒々々大神様にお詫を願ひ上げます」

「治國別殿、其方は媒介者によつて天國の巡覽に來られたのだから、決して身分不相應だとは申されません。貴方は宣傳使としての肝腎要の如意寶珠を道で落しましたから、それで苦しかったですよ。殆ど息が絶えさうに見えましたので、妾は急ぎ月の大神様の御殿に上り、靈丹を頂いて再び此處に現はれ、貴方等の御生命をつなぎ留める事を得たのでムりますよ。まア結構でムいましたなア」

「ハイ、吾々が命の親の木花姫様、此御恩は決して忘れは致しませぬ」

「妾は貴方の命の親ではありませぬ。貴方の命の親は月の大神様ですよ。妾は唯お取次をさして頂いたのみですよ。左様にお禮を申されては、何だか大神様の御神徳を妾が横領するやうに思はれて、何となく心苦しうムいます。宇宙一切は月の大神様の御神格に包まれて居るのでムいます。吾々には御神徳を傳達する事は出来ても、命をつないだり御神徳を授ける事は出来ませぬ。此後は何事がありても、假令少しの善を行ひましても、愛を注ぎましても、決して禮を云うて貰つては迷惑に存じます。何卒神様に直接にお禮を仰有つて下さい」

「ハイ、理義明白なる御教、頑迷なる治國別も貴神の御傳教によつて、豁然と眠りより醒めたるやうでムいます。あゝ國治立大神様、月の大神様、最高天國にまします天照大御神様、唯今は木花姫様の御身を通して吾等に命と榮えと喜びを授け給ひし事を、有難く、ここに感謝致します」

「貴方は途中でお落しになつたものを未だ御記憶に浮かびませぬか、如意寶珠の玉ですよ」

「ハイ、私は高姫さまのやうに如意寶珠の玉などは一度も拜んだ事もない、手に

觸れさせて頂いた事もムいませぬから、従つて落す理由もムいませぬ。何かの謎ではムいますまいかな。心愚なる治國別には、どうしても此謎が解けませぬ。高姫さまの執着心を起された如意寶珠は、あれは自然界の形態を具へた寶玉です。天界の事象事物は總て靈的事物より構成されて居りますれば、想念上より作り出す如意寶珠でムいますよ。先づ御悠りとお考へなさいませ。妾が申上げるのはお易い事でムいますけれど、これ位の事がお分りにならない位では、到底中間天國の天人に出會つて、一言も交へる事が出来ませぬ。神の愛と神の信に照され、神格の内流をお受け遊ばし、智慧と證覺を得れば、何でもない事でムいます。』

治國別は、

ハ イ

と答へた儘雙手を組み、眼を閉ぢ暫く考へ込んで居る。遠鋭敏の頭腦の持主と聞えて居る治國別も、靈界へ來ては殆ど癡呆の如く、何程思索を廻らしても容易に此謎が解けなかつた。龍公は傍より手を打ち嬉しさうな元氣のよい聲を出して、もし先生、靈界の如意寶珠と云ふのは善言美詞の言靈ですよ。中間天國へ上る



途中とちゆうに於おいて天津祝詞あまつのりとや神言かみごとの奏上そうじやうを忘わすれたので、姫命様ひめのみことさまが、お氣きをつけて下くださつたのですよ」

「成程なるほど、ヤ、ウツカリして居をつた。木花姫様このはなひめさま、有難ありがたうムございます。ほんに龍公たつこうさま、お前は私わたしの先生せんせいだ、ヤア實じつに感心かんしん々々」

「先生せんせい、そんな事こと云いつて貰もらふと大おほいに迷惑めいわくを致いたします。決して龍公たつこうの智慧ちゑで言いつたのではありませぬ。御神格ごしんかくの内流ないりうによつて、斯様かやうに思おもひ浮うかべて頂いただかせられたのです」

「現界げんかいに於おきましては、龍公たつこうさまは治國別はるくにわけさまのお弟子でしでありませう。併しかこの天國てんごくに於おいては愛善あいぜんと信眞しんしんより來きたる智慧證覺ちゑしじやうかくの勝すぐれたものが最も高たかき位置ゐちにつくのでムございます。神かみを信しんずる事ことが厚あつければ厚あつい程ほど、神格しんかくの内流ないりうが厚あついのでムございますから」

「いや實じつに恐おそれ入いりました。天國てんごくに參まりまして、やはり現界げんかいの虚偽きよぎてき的階級かいきふを固こ持ぢして居をつたのが重々ぢゆうぢゆうの誤あやまりでムございます。あゝ月つきの大神様おほかみさま、日ひの大神様おほかみさま、木花姫このはなひめ様の肉にくの御宮おみやを通とほし、又また龍公たつこうさまの肉にくの宮みやを通とほして、愚鈍ぐどんなる治國別はるくにわけに尊たぶとき智慧ちゑ

を與へて下さつた事を有難く感謝致します」

「サア皆さま、是より天津祝詞の言靈を奏上しながら、第二天國をお廻りなさいませ。左様ならば、是にてお別れ致します」

治國別、龍公兩人は、

「ハイ有難う」

と首を垂れ感謝を表する一刹那、嚙喰たる音樂につれて木花姫の御姿は、雲上高く消えさせ給ふのであつた。

あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・一・九 舊一一・一一・二三 加藤明子録)

## 第一七章

天人歡迎〔一二五〇〕

木の花姫に助けられ  
治國別や龍公は  
心いそいそ中間の  
さしもに廣き天國を  
當途もなしにイソイソと  
東を指して進み行く  
金銀瑪瑙シヤコ瑠璃や  
玻璃水晶の色つやを  
照して立てる木々の間を  
宣傳歌をば歌ひつつ  
足を揃へて進み行く。

治國別 高天原に八百萬  
尊き神ぞつまります

神漏岐、神漏美二柱  
皇大神の神言もて

日の神國をしらしめす  
神伊奘諾の大御神

筑柴の日向の橘の  
小戸の青木が清原に

みそぎ袂はせ給ふ時  
生り出でませる袂戸の

貴四柱の大御神  
吾身に犯せる諸々の

罪つみや汚けがれや過あやまちを  
袂はらはせ給たまへ速すみやかに

清すすがせ給たまへと願ねぎ申まをす  
吾わが言こと靈たまを小さを男しか鹿かの

八やつの耳みみをばふり立たてて  
聞きこしめさへとねぎまつる

世よの太おほも元もととあれませる  
皇すめ大おほ神かみよ吾わが一いつ行かう

守まもらせ給たまへ村むら肝きもの  
心こころを清きよめ給たまへかし

あゝ惟かむながら神かむながら々々  
御み靈たま幸さちはへましませよ

治はる國くに別わけは謹つつしみて  
天あま津つ御み神かみや國くに津つ神かみ

百ももの御み神かみの御おん前まへに  
神かみ言こと申まをし奉たてまつる

珍つづの御み國くにの神かみの國くに  
高たか天あま原はらに八や百ひやく萬まん

尊たふとき神かみぞつまります  
此この世よをすぶる大おほ御み祖おや

神かむろ漏ろ岐ぎ、神かむろ漏ろ美み二ふた柱はしら  
嚴いづの神み言ことを畏かしこみて

覺さとりの神かみと現あれませる  
此この世よを思おも兼ひかねの神かみ

百もも千ち萬よろづの神かみたちを  
安やすの河かは原はらに神かむ集つどひ

集つどひ給たまひて神かむ議はかり  
議はからせ給たまひ主すの神かみは

豊葦原の瑞穂國　いと安國と平らけく

しろしめさへと事依さし　固く任せ給ひたり

斯くも依させし國中に　荒ぶり猛ぶ神等を

神問はしに問はしまし　神掃ひに掃ひまし

語り問はして岩根木根　立木や草の片葉をも

語り止めさせいづしくも　天の磐座相放ち

天にふさがる八重雲を　伊頭の千別に千別まし

天より降り依さします　神の守りの四方の國

其眞秀良場と聞えたる　大日本日高見の國を

浦安國と定めまし　下津磐根に宮柱

いとも太しく立て給ひ　高天原に千木高く

すみきりませる主の神の　美頭の御舍仕へまし

天津御蔭や日のみかげ　被りたりと隠りまし

心安國と平らけく　しろしめします國中に

生まれ出でたる益人が

過ち犯し雑々の

作りし罪は速かに

宣り直しませ惟神

珍の御前に願ぎまつる

天津罪とは畔放ち

溝埋め樋放ち頻蒔きし

串差し生剥ぎ逆剥ぎや

屎戸許々多久罪科を

詔別け給ふ天津罪

國津罪とは地のの上の

生膚斷や死膚斷

白人胡久美吾母を

犯せし罪や吾子をば

虐げ犯す百の罪

母子共々犯す罪

けものを犯し昆蟲の

醜の災天翔り

國翔りといふ高神の

醜の災高津鳥

百の災禍獸を

たふし蟲物なせる罪

いや許々太久の罪出でむ

かく數多き罪出でば

天津祝詞の神言もて

天津金木の本末を

打切り打斷ち悉く

千座の置座におきなして

天津菅曾を本と末  
刈りたち刈り切り八つ針に

取り裂きまつり皇神の  
授け給ひし天津國

みやび言靈の太祝詞  
完全に委曲に宣らせませ

斯く宣る上は天津神は  
天の磐戸を推しひらき

天にふさがる八重雲を  
伊頭の千別に千別つつ

心おだひに聞しめせ  
國津御神は高山と

小さき山の尾に登り  
高き低きの山々の

いほりを清くかきわけて  
百の願を聞しめす

かく聞しては罪といふ  
あらゆる罪はあらざれと

科戸の風の八重雲を  
氣吹放てる事の如

朝の霧や夕霧を  
科戸の風の心地よく

氣吹き拂ひし事の如  
浪うちよする大津邊に

つなぎし大船小舟をば  
舳を解きはなち艦解きて

千尋の深き海原に  
押し出し放つ事の如

彼方に繁る木の元を

かぬちの造る焼鎌や

敏鎌を以て打拂ふ

神事の如く塵ほども

残れる罪はあらざれと

清め拂はせ給ふ事を

高山の末短山の

末より強く佐久那太理

おち瀧津瀬や速川に

まします瀬織津比賣の神

大海原に持出でむ

かくも持出でましまさば

罪も汚れも荒鹽の

鹽の八百道の八鹽道の

鹽の八百重にまませる

瀬も速秋津比賣の神

忽ち呵々呑み給ひてむ

かくも呵々呑み給ひなば

氣吹の小戸にまませる

氣吹戸主と申す神

根の國底の國までも

氣吹放たせ給ふべし

斯くも氣吹放ち給ひては

根底の國にあれませる

速佐須良比賣と申す神

總てを佐須良比賣はむ

斯くも失ひましまさば

現世に在る吾々が



身魂みたまに罪つみとふ罪科つみがは 少すこしもあらじと惟神かむながら  
拂はらはせ給たまへいと清きよく あらはせ給たまへと大前おほまへに  
畏かしこみ畏かしこみ願ねぎ申まをす あゝ惟神かむながらかむながら々々  
御靈幸みたまさちはへましませよ〃

斯かく祝詞のりとくづしの宣傳歌せんでんかを歌うたひながら、或ある天國團體てんごくだんたいの一劃いっくわくに着ついた。數多あまたの天てん  
人にんは男女だんぢよの區別くべつなく、數十人道すうじふにんみちの兩側りやうわきに列れつを正ただし、「ウオーウオー」と、愛あいと善ぜん  
のこもつた言靈ことたまを張はり上あげて、二人ふたりの來きたるを歡迎くわんげいするもの如ごとくであつた。

茲ここに一ひとつ天人てんにんの衣服いふくと其變化そのへんくわの狀態じやうたいに就ついて、一言述べておく必要ひつえうがあると思おもふ。  
抑そもそも天人てんにんの衣服いふくは其智慧そのちゑと相應さうおうするが故ゆゑに、天國てんごくにある者ものは皆其智慧みなそのちゑの度どの如何いかん  
に依よつてそれぞれいふくの衣服いふくを着用ちやくようしてあるものである。其中そのなかでも智慧ちゑの最もつとも秀すぐれた  
者ものの衣類いふくは、他たの天人てんにんの衣服いふくに比くらべてきわ立だつて美うつくしう見みえて居ある。又また特に秀ひいで  
た者ものの衣類いふくは恰あたかも火焰くわえんの如ごとく輝かがやき渡わたり、或あるは光明くわうみやうの如ごとく四方あたりに照てり渡わたつてゐる。  
其智慧そのちゑの稍劣ややおとつた者ものの衣服いふくは、輝かがやきはあつて眞白まっしろに見みえて居あるけれども、どこと

もなくおぼろげに見えて、赫々たる光がない、又其智慧の之に次ぐ者は、それ相應の衣類を着用し、其色も亦さまざまであつて、決して一樣ではない。併しなから最高最奥の天國靈國に在る天人は、決して衣類などを用ひる事はない。天人の衣類は其智慧と相應するが故に又眞とも相應するのである。何故ならば、一切の智慧なるものは、神眞より來るからである。故に天人の衣類は智慧の如何に由るといふよりも、神眞の程度の如何に依るといふのが穩當かも知れない。而して火焰の如く輝く色は、愛の善と相應し、其光明は善より來る眞に相應してゐるのである。其衣類の或は輝きて且純白なるも、光輝を缺いでゐるのもあり、其色又いろいろにして一樣ならざるあるは、神善及神眞の光、之に輝く事少くして、智慧尚足らざる天人の之を攝受する事、種々雑多にして、一樣ならざる所に相應するからである。又最高最奥の天國靈國に在る天人が衣類を用ひないのは、其靈身の清淨無垢なるに依るものである。清淨無垢といふ事は即ち赤裸々に相應するが故である。而して天人は多くの衣類を所有して、或は之を脱ぎ、或は之を着け、不用なるものは暫く之を貯へおき、其用ある時に至つて又之を着用する、そして此

衣類は皆大神様の賜ふ所である。其衣類にはいろいろの變化があつて、第一及第二の情態に居る時には、光り輝いて白く清く、第三と第四との情態に居る時には、稍曇つた様にみえてをる。これは相應の理より起來するものであつて、智慧及證覺の如何によつて、斯く天人の情態に、それぞれ變化がある故である。序に地獄界にある者の、衣類のことを述べておく。

根底の國に陥つてゐる者も亦一種の衣類の着用を許されて居る、されど彼等の惡靈は、總ての眞理の外に脱出せるを以て、着する所の衣服は其癡狂の度と虚偽の度とによつて、或は破れ、或は綻び、ボロつぎの如く見苦しく、又其汚穢なる事は到底面を向くるに堪へない位である。併し彼等は實にこれ以外の衣類を着用する事が出来ないのである。又地獄界にゐる惡靈は美はしき光澤の衣類を着用する時は、相應の理に反するが故に、身體苦しく、頭痛み、體をしめつけられる如くで、到底着用することが出来ないのである。故に大神が彼等の靈相應の衣類を着用することを許し給うたのは、其惡相と虚偽と汚穢とが赤裸々に暴露する事を防がしめむが爲の御仁慈である。

種々さまさまの衣服をつけたる諸々の天人は、治國別、龍公兩人の此團體に入り來ることを、大神の宣示に仍つて前知し、歡迎の準備を整へて、今や遅しと待つてみたのである。數多の天人の中から、最も美はしく光り輝いてゐる清淨の衣類を着用した一人の天人は、治國別の側近く進み來り、「ウーオー」と言ひながら、心の底より歡迎の意を表示してゐる。治國別も意外の待遇に且つ驚き且喜びながら、叮嚀に會釋をなし、固く天人の手を握りしめて、何事か言はむとしたが、何故か口舌硬直して、一言も發することが出來なかつた。茲に於て治國別は其顔面の表情を以て、感謝の意を示す事としたのである。數多の天人は治國別の前後左右に群り來り、「ウオーウオー」と叫びながら、且歌ひ、且舞ひ踊り狂うて、其旅情を慰めむと吾を忘れて其優待に全力を盡してゐる。龍公は餘りの嬉しさに口をあけた儘、ポカンとして、只「アーアー」とのみ叫んでゐる。併し天國に於ては、「ア」といふ聲は喜びを表白する意味であるから、龍公の此一言は治國別の無言に引替へ、最も天人間から尊重され、且賞揚の的となつたのである。天人が總て人間と相語る時は、天人は決して自らの言語を用ひず、其相手の言語及相

手が知れる所の言語を用ひ、其人の知らざる言語は一切用ひない事になつてゐる。天人の人間ともの云ふ時は、自己を轉じて人間に向ひ、これと相和合するものである。此和合は兩者をして相似の想念情態中に入らしむるものである。併しながら、治國別は天人の團體に於ては、これを肉體のある精靈とは思はなかつた爲に、天人の語を用ひたから、治國別が面くらつたのである。

凡て人間の想念は記憶に附着して、其言語の根源となるが故に、此兩者は共に同一の言語中にありと云つても良いのである。且又天人及精靈の人間に向ひ來るや、自ら轉じて彼に向ひ、彼と和合するに至れば、其人のすべての記憶は、天人の前に現出するものである。天人が人間と談話するに當り、其人と和合するは、人の靈的思想とつまり和合するものであるけれども、其靈的想念流れて、自然界想念中に入り、其記憶に附着し離れざるに仍り、其人の言語は天人の如く見え、又其人の知識は天人の知識の如く見ゆるものである。斯の如きは大神の特別の御恵に依つて、天人と人間との間に和合あらしめ給ひ、恰も天界を人間の内に投入したるが如くならしめ給ふに仍るのである。併しながら現代人間の情態は、太古

に於ける天的人間の觀なく、天人との和合も亦難かしい。却て天界以外の惡精靈と和合するに立至つたのである。精靈は斯く物語る者の、人間なることを信ぜず、この人の内にある自分共なりと信じ切つて居るのである。

茲に治國別は自分が未だ肉體のある精靈なる事を告げて、未だ天人の域に進んでみない事をあから様に告げようと努めたけれど、何故か一言も發することが出来なかつた。其故は第二天國の天人に相應すべき愛善と信眞と智慧と證覺とが、備はつてゐなかつたからである。ここに治國別は天人の諸團體に歡迎され、唾の旅行を續けて、只アオウエイの五大父音を僅に發する様になり、辛うじて餘り大きな恥をかかず、此一つの團體を首尾良く巡覽し、且つ天人に比較的好感を與へて此處を去る事を得たのは、實に不思議と云へば不思議な位であつた。是より治國別は再び木花姫命の御導きに仍つて、智慧と證覺を與へられ、第二天國の各團體を巡歴し、進んで最高第一天國及靈國に進む物語は次節より口述する事とする。惟神靈幸倍坐世。

第一八章 一心同體（一二五一）

高天原の靈國及天國の天人は、人間が數時間費しての雄辨なる言語よりも、僅に二三分間にて、簡單明瞭に其意思を通ずることが出来る。又人間が數十頁の原稿にて書き表はし得ざる事も、只の一頁位にて明白に其意味を現はすことが出来る、又それを聞いたり讀んだりする處の天人も能く會得し得るものである。凡て天人の言語は優美と平和と愛善と信眞に充ちて居るが故に、如何なる惡魔と雖も、其言葉には抵抗する事が出来ない。すべて天國の言葉は善言美詞に充たされてゐるからである。さうして何事も善意に解し見直し聞直し宣直しといふ神律が行はれてゐる。それから日の國即ち天國天人の言語には、ウとオとの大父音多く、月の國即ち靈國天人の言語にはエとイの大父音に富んでゐる。而して聲音の中には何れも愛の情動がある。善を含める言葉や文字は多くはウとオを用ひ、又少しくアを用ふるものである。眞を含んでゐる言葉や文字にはエ及びイの音が多い。そして天人は皆一樣の言語を有し、現界人の如く東西洋を隔つるに従つて、其言語

に變化があり、或は地方々々にいろいろの訛がある様な不都合はない。されども、ここに少し相違のある點は證覺に充された者の言語は、凡て內的にして、情動の變化に富み且つ想念上の概念を最も多く含んである。證覺の少い者の言語は外的にして、又しかく充分でない。愚直なる天人の言語に至りては、往々外的にして、人間相互の間に於けるが如く、語句の中から其意義を推度せなくてはならぬ事がある。又面貌を以てする言葉がある。此言語は概念に依つて抑揚頓挫曲折の音聲を發すが如きものにて其終局を結ぶものもある。又天界の表像を概念に和合せしめたる言葉がある。又概念を自らに見る様、成したる言葉もある。又情動に相似したる身振を以てなす語もある。此身振は其言句にて現はれる事物と相似たるものを現はしてゐる。又諸情動及諸概念の一般的原義を以てする言葉がある。又雷鳴の如き言葉もあり其外種々雑多な形容詞が使はれてある。

治國別、龍公は團體の統制者に導かれ、種々の花卉等を以て取圍まれた相當に美はしき邸宅に入る事を得た。此處は此團體の中心に當り他の天人は櫛比したる家屋に住んでゐるにも拘らず、一戸分立して建つてゐる。現界にて言へば丁度町



村長の様な役を勤めてゐる天人の宅である。二人は案内されて奥の間に進むと、眞善美といふ額がかけられ、そして床の間には七寶を以て欄間が飾られ、玻璃水晶の茶器などがキチンと行儀よく配置され、珊瑚珠の火鉢に金瓶がかけられてある。ここは第二天國に於ても最も證覺の秀れたる天人の團體であり、主人夫婦の面貌や衣服は特に他の天人に比して秀れて居る。治國別は恐る恐る奥の間に導かれ、無言の儘行儀よく坐つてゐる。此天人の名は珍彦といひ、妻は珍姫と云つた。珍彦は治國別の未だ現界に肉體があり精靈として神に許され、修業の爲に天國巡覽に來りし事を、其鋭敏なる證覺に仍つて吾居間に通すと共に悟り得たのである。ここに珍彦は始めて治國別の知れる範圍内の言語を用ひて、いろいろの談話を交ゆることとなつた。

「治國別さま、あなたは未だ精靈であらつしやいますのですな。實の所は天國に復活なされた方と存じまして、其考へで待遇致しましたので嘸お困りでムいましてただらう」

「ハイ、實の所はイソの館から大神様の命を奉じ、月の國ハルナの都に蟠まる八

岐大蛇の悪靈を言向和すべく出陣の途中、浮木ヶ原に於て、吾不覺の爲ラン手將軍の奸計に陥り、深き暗き穴に落され、吾精靈は肉體を脱離して、いつとはなしに八衢に迷ひ込み、大神の化身に導かれ、第三天國の一部分を覗かして頂き、又もや木花姫の御案内に依つて、ここ迄昇つて來た所でムいます。何分善と眞が備はず、智慧證覺が足りない者でムいますから、天人達の言語を解しかね、大變に面喰ひましたよ。丸で唾の旅行でしたワ。アハ、ハ、ハ、」

「どうぞ、ゆるりと珍彦館で御休息下さいませ。今日は幸ひ、大神様の祭典日でムいますれば、やがて團體の天人共が吾館へ集まつて參るでせう。其時は此團體に限つて、あなたの精靈にゐらせられる事を發表致します。さうすれば、吾團體の天人は其積りで、あなたと言葉を交へるでせう」

「ハイ、有難うムいます。何分勝手を知らない愚鈍な人間でムいますから……」  
「これはこれは珍彦様、偉い御厄介に預かりました。先生を何分宜しく御願致します」

「イエイエ、決して私がああなたの御世話をしたのぢやムいませぬ。又御厄介にな

つたなぞと禮を言はれては大變に迷惑を致します。何事も吾々は大神様の御命令のままに、機械的に活動してゐるのでムいますから、もし一つでも感謝すべき事があれば、直様大神様に感謝して下さいませ。すべて吾々は大神様の善と眞との内流に依つて働かして頂くばかりでムいます。吾々天人として何うして一力で蟲一匹助けることが出来ませう」

治國「成程、さすが天國の天人様、眞理に明るいのには感服の外ムいませぬ」

「神様の御神格の内流を受けまして、實に楽しき生涯を、吾々天人は送らして頂いて居ります」

龍公「モシ珍彦様、此團體の天人は、何れも若い方ばかりですな。そしてどのお方の顔を見ても、本當に能く似てゐるぢやありませんか」

「左様です、人間の面貌は心の鏡でムいますから、愛の善に充ちた者同士同氣相求めて群居してゐるのですから、内分の同じき者は従つて外分も相似るものでムいます。それ故天國の團體には餘り變つた者がムいませぬ。心が一つですからヤハリ面貌も姿も同じ型に出来て居ります」

□ 成程、それで分りました。併しながら子供は澤山ある様ですが、三十以上の面貌をした老人は根っから見當りませぬが、天國の養老院にでも御收容になつてゐるのですか

□ 人間の心霊は不老不死ですよ。天人だとて人間の向上發達したものですから、人間の心は男ならば三十才、女ならば二十才位で、大抵完全に成就するでせう、而して假令肉體は老衰しても其心はどこ迄も弱りません。否益々的確明瞭になるものでせう。天國は凡て想念の世界で、すべて事物が靈的でムいますから、現界に於て何程老人であつた所が天國の住民となれば、あの通り、男子は三十才、女子は二十才位な面貌や肉付をしてゐるのです。それだから天國にては不老不死と云つて、いまはしい老病生死の苦は絶対にありません

□ 成程、感心致しました。吾々は到底容易に肉體を脱離した所で、天國の住民になるのは六ヶしいものですなア。いつ迄も中有に迷ふ八衢人間でせう。實にあなた方の光明に照らされて、治國別は何とも慙愧に堪へませぬ

□ イヤ決して御心配は要りませぬ。あなたはキット或時機が到來して、肉體を脱

離し給うた時は、立派なる靈國の宣傳使にお成りなさいますよ。如何なる水晶の水も氷とならば忽ち不透明となります。あなたの今日の情態は即ち其氷です。一度光熱に會うて元の水に復れば、依然として水晶の清水です。肉體のある間は、何程善人だといつても證覺が強いと云つても、肉體といふ惡分子に遮られますから、之は止むを得ませぬ。併し肉體の保護の上に於て、少々の惡も必要であります。精靈も人間もやはり此體惡の爲に現界に於ては生命を保持し得るのですからなア」

「ヤ有難う、其御説明に仍つて、私も稍安心を致しました。あゝ大神様、珍彦様の口を通して、尊き教を垂れさせ給ひ、實に感謝に堪へませぬ。あゝ惟神靈幸はへませ」

龍公「天國に於ては、すべての天人は日々何を職業にしてゐられるのですか。畑もある様なり、いろいろの果樹も作つてある様ですが、あれは何處から來て作るのですか」

「天人が各自に農工商を勵み、互に喜び勇んで、其事業に汗をかいて、従事して

ゐるのですよ」

「さうすると、天國でも随分現界同様に忙しいのですなア」

「現界の様に天國にては人を頭で使ひ、自分は金の利息や株の収益で遊んで暮す人間はありませぬ。上から下迄心を一つにして共々に働くのですから、何事も埒よく早く事業がはか取ります。丁度一團體は人間一人の形式となつて居ります。

例へばペン一本握つて原稿を書くにも、外觀から見れば一方の手のみ働いてゐるやうに見えますが、其實は腦髓も心臓肺臓は申すに及ばず、神経纖維から運動

機關、足の趾の先まで緊張してゐる様なものです。今日の現界のやり方は、ペンを持つ手のみを動かして、はたの諸官能は我關せず焉といふ行方、それでは逆も

治まりませぬ。天國では上下一致、億兆一心、大事にも小事にも當るのですから、

何事も完全無缺に成就致しますよ。人間の肉體が一日働いて夜になつたら、凡てを忘れて、安々と眠りにつく如く、休む時は又團體一同に快よく休むのです。私

は天人の團體より選まれて、團體長を勤めて居りますが、私の心は團體一同の心、團體一同の心は私の心でムいますから……」

はるくに 成程、現界も此通りになれば、地上に天國が築かれるといふものですなア。假令一日なりとも、こんな生涯を送りたいものです。天國の團體と和合する想念の生涯を送りたいものでムいます」

「あなたは已に天國の團體にお出でになつた以上は、私の心はあなたの心、あなたの智性は私の智性、融合統一して居ればこそ、かうして相對坐してお話をする事が出来るのですよ。只今の心を何時迄もお忘れにならなかつたならば、所謂あなたは、假令地上へ降られても天國の住民ですよ。併しながら、あなたは大神様より現界の宣傳使と選まれ、死後は靈國へ昇つて宣傳使となり、天國布教の任に當らるべき方ですから、到底其時は、吾々の智慧證覺はあなたのお側に寄り付く事も出来ない様になりますよ。あなたが靈國の宣傳使にお成りなさつた時は、吾團體へも時々御出張を願ふ事が出来るでせう」

「成程、さう承はればさうに間違ひはムいませぬ」  
「先生、慢心しちや可くませぬよ」

「イヤ、決して慢心でない、珍彦様の心は治國別の心と和合し、治國別の心は珍

彦様と和合し、珍彦様は大神様の内流を受け、大神様と和合してゐるのだから、少しも疑ふ餘地はない。お言葉を信ずればいいのだ。高天原には愛善と信眞とよ

り外には無いのだ。疑を抱くのは中有界以下の精靈の所爲だ」  
「さうすると、あなたは已に天人氣取りになつてゐるのですか、まだ精靈ぢやありませんか」

「已に天人となつてゐるのだ。珍彦様も同様だ」

「ヘーン、さうですか、そら結構です、お目出度う、そして此龍公は何うですか、ヤツパリ天人でせうなア」

「無論天人様だ。大神様の御内流を受けた尊き天人様だよ」

「何だか乗せられてゐる様な氣が致しますワ。モシ、先生、からかつちや可けませぬよ」

珍彦 「アハ、ハ、ハ」

治國 「ウツフ、ハ、ハ」

龍公 「オホ、ハ、ハ」



「コレ龍公、才ホ、、なんて、おチヨボ口をして女の聲を出しちや、みつともよくないぢやないか」

「このはなひめさまの御神格の内流によりまして、善と眞との相應に依り、忽ち神格化し、龍公は何も知らねども、内分の神音が外分に顯現したまでですよ。オツホ、、」

三人の笑ひ聲に引つけられて、勝手元に在った珍姫は此場に現はれ來り、三人の前に手を仕へ、

「遠來のお客様、よくもみらせられました。私は珍彦の妻珍姫と申します」

「何と御挨拶を申してよいやら、天國の様子は一向不案内、併しながら今珍彦様に承はれば、同氣相求むるを以て、かく和合の境遇にありとのこと、さすればあなたの心は私の心、私の心は貴女の心、他人行儀の挨拶も出來ず、又自分と同様とすれば、自分に對しての挨拶も分らず、實は困つてをります」

「ハイ私も其通りでムいます。現界的虚禮虚式は止めまして、萬年の知己、否同心同體となつて、打解け合つて、珍らしき話を聞かして頂きますせう」

「どうも現界の話は罪惡と虚偽と汚穢にみち、かかる清淨なる天國へ参りまして

は、口にするも厭になつて参りました。それよりも天國のお話を承はりたいものでムいます」

「ハイ、惟神の許しを得ましたならば、あなたが何程喧しいと仰有つても、如何なることを申上げるか分りませぬ。弓弦をはなれた矢のやうに、當る的に當らねばやまないでせう、ホツホ、、」

龍公「モシ珍姫さま、あなたは珍彦さまと服装が違ふ丈で、お顔はソツクリぢやありませんか。ヨモヤ現界に於て雙兒にお生れになつたのぢやありませんまいかなア」

「コレ龍公、何といふ失禮なことを仰有る。チツトたしなみなさい」

「それでも私の心に浮んだのですよ。思ふ所を言ひ、志す所をなすのが天國ぢやありませんか。そんな體裁を作つて、現界流に虚偽を飾るやうなことは天國には用ひられませんまい。天國は信の眞を以て光としますのですからなア」

「ヤ、恐れ入りました、アハ、、、天國へ出て來ると、治國別も失敗だらけだ。かうなると純朴な無垢な龍公さまは實に尊いものだな」

「ソリヤ其通りです、本當に清らかなものでせう。ホツホ、」

「又木花姫の御神格の内流かな」

「これは龍公の副守の外流ですよ。モシ珍彦さま、どうぞ私の今の言葉が天國を汚す様なことがムいますれば直に宣り直します」

「滑稽として承はれば、假令惡言暴語でも其笑ひに仍つて忽ち善言美詞と變化致しますから、御心配なさいますな。天國だつて滑稽諧謔が云へないといふことが

ありますか、滑稽諧謔歡聲は天國の花ですよ」

「ヤア有難い、先生、これで私も少し息が出來ますワイ」

「ウン、さうだなア、何だか私は身がしまる様にあつて、何うしてもお前の様に洒脱な氣分になれないワ」

「ソラさうでせう、娑婆の執着がまだ残つて居りますからな。あなたは再び肉體へ歸らうといふ欲があるでせう。私は第三天國でいつたでせう、最早娑婆へは歸りたくないから、此處に居りたいと言つたことを覚えてゐらつしやいませう。私は假令再び現界へ歸るものとしても、刹那心ですからなア。過去を憂へず未來を

望のぞまず、今いまといふ此瞬間このしゆんかんは善惡正邪ぜんあくせいじやの分水嶺ぶんすゐれいといふ三五教あななひけうの眞理しんりを體得たいとくしてますからなア」

「大變たいへんな掘出物ほりだしものを、治國別はるくにわけは捉まへたものだなア」

「本當ほんたうに掘出物ほりだしものでせう。先生せんせいもこれだけ龍公たつこうに證覺しょうかくが開ひらけてるとは思おもはなかつたでせう。それだから人ひとは見みかけによらぬものだと現界げんかいでも言いつてませう」

「ハイ有難ありがたう、何分宜なにぶんよろしう願ねがひます」

「口先くちさきばかりでは駄目だめですよ。心こころの底そこから有難ありがたう思おもつてゐますか、まだ少すこしあなたあなたの心こころの底そこには、龍公たつこうに對たいし稍輕侮ややけいぶの念ねんが閃ひびめいてゐるでせう」

「ヤ恐れ入おそりました、あなたは大神様おほかみさまでムいませう」

「大神様おほかみさまぢやムいませぬ。吾精靈わがせいれいに大神様おほかみさまの神格しんかくが充みち、龍公たつこうの口くちを通とほして、治はる國別くにわけにお諭さとしになつてゐるのですよ。時ときに珍彦うづひこさま、奥おくさまとあなたと雙兒ふたごの樣やう

に能よく似た御面相ごめんさう、其理由そのりゆうを一つ説明せつめいして頂いたきたいものですなア」

「夫婦ふうふは愛あいと信しんとの和合わがふに依よつて成立せいりつするものです。所謂夫いはゆるをつとの智性ちせいは妻つまの意思いしちう中ちうに入り、妻つまの意思いしは夫をつとの智性ちせい中ちうに深ふかく入り込み、茲ここに始はじめて天國てんごくの結けつ婚こんが行おこなはれ

るのです。言はば夫婦同心同體ですから、面貌の相似するは相應の道理に仍つて  
避くべからざる情態です。現界人の結婚は、地位だとか名望だとか、世間の面目  
だとか、財産の多寡によつて婚姻を結ぶのですから、云はば虚偽の婚姻です。天  
國の婚姻は凡て靈的婚姻ですから、夫婦は密着不離の情態にあるのです。故に天  
國に於ては夫婦は二人とせず一人として數へることになつてゐます。現界の様に、  
人口名簿に男子何名女子何名などの面倒はありませぬ。只一人二人と云へば、そ  
れで一夫婦二夫婦といふことが分るのです。それで天國に於て百人といへば頭が  
二百あります。これが現界と相違の點ですよ。君民一致、夫婦一體、上下和合の  
眞相は到底天國でなくては實見することは出来ません。治國別様も龍公様も現  
界へお下りになつたら、どうか地上の世界をして、幾部分なりとも、天國氣分を  
造つて貰ひたいものですなア」

治國「ハイ微力の及ぶ限り……否々神様の御神格に依つて吾身を使つて戴きませ  
う。あゝ惟神靈幸倍坐世」

かく話す所へ、玄關口より一人の男現はれ來り、

「珍彦様、祭典の用意が出来ました、サアどうぞ皆が待つて居ります。お宮まで御出張下さいませ」

「あゝ御苦勞でした。直様参りませう。お二人さま、どうです、之から天國の祭典に加はり拜禮をなさつたら……」

「お供致しませう」

「天國の祭典は定めて立派でせう。龍公もお供が叶ひますかなア」

「ハイ、さうなされませ」

治國「もし叶はなかつたら、木花姫の神格の内流によつて、参拜すれば良いぢや

ないか、アハ、ハ、ハ」

龍公「ウーオーア」

珍彦「龍公さま、どうぞお供をして下さい」

龍公「ハイ有難う」

(大正一二・一・一〇 舊一一・一一・二四 松村眞澄録)

第一九章 化相神（一二五二）

天國人の祭典を行ふのは、天國團體の重要な務めの一となつてゐる。天國の  
天人は愛の善に居るが故に、大神を愛し且同僚を愛し、天地惟神の法則に従つて  
宇宙の創造主たる神を嚴肅に齋り、種々の珍らしき供物を獻じ、而して後神の愛  
に浴するを以て唯一の歡喜となし、唯一の神業としてゐるのである。而して天國  
人は決してエンゼルになつたり、或は宣傳使にはならないのである。エンゼルや  
宣傳使になる天人は、すべて靈國天人の任務である。何とならば靈國は信の眞に  
充ちたる者多く、天國は愛の善にみちたる者多き國土なるが故である。祭典がす  
むと、靈國よりエンゼル又は宣傳使出張し來つて愛善を説き、信眞を諭し、圓滿  
なる天人の智慧と證覺をして益々圓滿ならしめむと務めるのである。又天人は其  
説教を聞いて自分の人格を圓滿ならしめ、處世上の福利を計らむとするものであ  
る。そして天國の團體は大なるものに至つては十萬も集まつて居り、少いのは五  
六十人の團體もある。之は愛と信より來る想念の情動如何に依つて相似相應の理

により團體を形成するからである。

治國別、龍公は珍彦に伴はれ、神の家と稱する、天人が祭典を行ひ靈國宣傳使が説教を行ふ木造の殿堂に導かれた。いつまでも木の香新しく薫り、幾年経ても新築した時の想念に依つて建てられてあるから、決して腐朽したり或は古くなつたりするものではない。

珍彦夫婦は光澤にみちた赤の装束をつけ、神の家に悠々と進み入つた。團體の天人は赤子に至る迄此處に集まり、祭典に與らむと、えも言はれぬ歡喜に充ちた面貌を表はして控へてゐる。この天人も智慧證覺の如何に仍りて、幾分か差等はあれども、大抵は相似の面貌をしてゐる。現界の形式的祭典に比ぶれば、實に莊嚴と云はうか、優美と言はうか、華麗と言はうか、譬方のない情態である。此團體中にて、最も證覺の秀れたる者が、被戸や神饌係や祭典に關するいろいろの役目をつとめ、珍彦は團體長として齋主の役に當ることとなつた。凡て天國は清潔主義、統一主義、進取主義、樂觀主義であるから、何とも云へぬ良い氣分に充たされるものである。此祭典に依つて、神人は和合の極度に達し、歡喜悅樂に酔ふ



のである。而して天國の祭典は神に報恩謝徳の道を盡すは言ふも更なれど、又一方には其團體の圓滿を祈り、天人各自の歡喜を味はひ、悅樂に酔ふ爲である。故に現界の祭典の如く四角張らず、小笠原流式もなく、實に圓滑に自由自在に、愛善より來る想念の儘に情動するのであるから、何とも云へぬ完全な祭典が行はれる。法なくして法あり、式なくして式あり、到底現界にて夢想だもなし能はざる。光景である。而して祝詞はやはり現界の如く天津祝詞や神言を奏上して、神慮を慰め、且天人各自の心を喜ばせ、一切の罪汚れ過失を拂拭する神業である。天國に於ても時に或は少々の憂ひにみたされ、悲みや驚きに遭遇することは絶無とは言へない、故に天人は日を定めて、莊嚴なる祭典式を行ひ、其生涯に對して福利を得むことを祈るのである。

祭典の式も漸く濟み、八尋殿に於て直會の宴が開かれた。大抵此祭典は午前中に行はるるものである。併し天國に於ては時間空間など云ふものはなく、従つて午前午後晝夜などの區別はない。併しながら情動の變異に依つて、朝たり夕べたるの感覺が起るものである。而して朝は太陽の愛に相應し、天國の愛善に和合す

るものである。又夕べは信眞に相應し、月に相應するものである。故に天國人の祭典は午前中に行はれ、靈國即ち月の國から出張し來る宣傳使は午後に至つて説教を初むるのが例となつてゐる。現代に於ける各宗教の儀式も祭事に關すること  
は凡て午前に行ひ、説教などは午後に行はるるのは、知らず知らずに天國の情態  
が地上に映つてゐるのである。

各天人は思ひ思ひの歌を歌ひ、舞を舞ひ、音樂を奏し、祭典後一切を忘れて面  
白可笑しく茶番狂言なども交へて、時の移るのも知らず、遊び狂ふのである。

天人の歌や演舞の状況は茲には省略して、後日又時を得て述ぶることとする。  
さて直會の宴も無事終了し、各天人の情動は初めて午後に対応する感覺になつた  
時、靈國の宣傳使が何處ともなく嚙喰たる音樂に送られて、四邊を輝かしながら、  
二人の侍者と共に神の家に向つて進んで來た。諸天人は此宣傳使を「ウォーウ  
オー」と、愛の聲を注ぎながら迎へ入れる。宣傳使は莞爾としてさも嬉しげに、  
諸天人に目禮を施し、團體長なる珍彦の案内に連れて、半圓形に組立てられた演  
壇上に悠々と座を占めた。而して其左右には證覺の光明稍劣つた者が控へてゐる。

これは宣傳使の侍者である。諸天人は半月形に演壇の前に席を取り、宣傳使の視線を外さない様にして、其教示を嬉し氣に聽聞してゐる。宣傳使の天國に於ける説教は大神の御神格を徹底的に理解すべく、且愛善と信眞の何たるかを、極めて微細に説きさとし、天人が處世上の利便を計らしむるべく努むるより外にはないのである。

治國別、龍公は天國の言葉を解し得ず、特別の席に默然として耳を傾け、其教示を一言なりとも會得せむと努めてゐる。されど此等の兩人は未だ第二天國の天人の言葉さへ聞分くる丈の智慧證覺も備はつてゐないのだから、此等の天人を説き諭す幽遠美妙なる説教などは到底聽取れる筈はない。従つて感得することは出来ない。デクの棒然として、其美妙なる聲調や言語の抑揚頓挫曲折などの巧妙ぶりや、顔面筋肉の動き振り、形容身振などを考へて、略其何事を語り居るかを、おぼろげに窺知し得るのみであつた。殆ど一時ばかり経つたと思ふ時、宣傳使は説教の終結を告げた。各天人は頻りに拍手し、讚嘆しながら、ウオーウオーと叫びつつ神の家を立て各自の住所に歸り行く。珍彦夫婦は宣傳使の先頭に立ち、

己が館を指して迎へ歸る。治國別、龍公も後に従ひ、珍彦の館に入る。

宣傳使は奥の間に進み、冠を取り、法服を着替へ、くつろいで主客對坐し、茲に少時雑談に耽るのが例となつてゐる、珍彦夫婦は珍らしき果物を竝べ、葡萄酒を注いで宣傳使に勧めた。宣傳使は榮えにみちた面貌を珍彦に向けながら、一口グツと呑み珍彦にさした。珍彦は恭敬禮拜しつつ押戴いてグツと呑み、其残りを珍姫にさした。珍姫も同じく押いただいて之を呑み終り、宣傳使に返し、宣傳使は二人の侍者に杯を與へ、手づから葡萄酒をつぐ。二人の侍者は何事か解し難き歌を歌ひ出した。治國別、龍公は宣傳使の面貌の高尚優美にして光明に充てるに眼くらみ、容易に面を向くることが出来なかつた。之は智慧と證覺の度に非常の相違があるが故である。あわてて被面布を取り出し、治國別、龍公は之をかぶつた。そして宣傳使の顔をよくよくみれば、豈計らむや野中の森で別れた治國別の徒弟五三公であつた。宣傳使の五三公は、治國別、龍公のここに來り居ることを一目見て看破してゐたけれど、二人が自然に吾を認めるまでワザと名乗らなかつたのである。治國別は心の中に、

「あゝ似たりや似たり、よく似たり、吾徒弟の五三公にソツクリだ。只どこもなく、肌の色合が透き通つてみえるばかりで、どこに一所違つた所がない。名乗つて見ようか、イヤイヤ五三公如き者が何うして靈國の宣傳使になり得るものか、なまじひに質問をして無禮になつてはすまない」

と心にとつおいつ、煩悶をつづけて居る。龍公も亦被面布の中から宣傳使の姿をためつすかしつ、首を切りにかたげ、或は右に左にふりながら、

「ハテナ、よく似てゐる、妙だなア、ヤツパリ違ふかなア、イヤイヤ違ひはしよ  
うまい。何は免もあれ不思議千萬なことだ。何うしても合點の蟲が承知せぬ。何程天國には相似の面貌があると云つても、これ丈似た顔は二度とあるまい」

などと四邊かまはず、無垢の心より、遠慮會釋もなく喋つてゐる。宣傳使は輝きの面貌を兩人に向け、ニコニコと笑つてゐる。龍公は構はず、

「モシ先生、あの宣傳使の顔を御覽なさい。三日月眉毛に頬のゑくぼ、目のつき方から、鼻の格好、口のチヨンモリした所、五三公にそつくりぢやありませんか」

治國別は始めて口を開き、

「よく似てゐられるなア」

「先生、似るも似ぬもありですか。本眞者の五三公ですよ。オイ五三公、何だ偉相に、俺だ俺だ、俺は被面布を被つてるから分らぬだらうが、龍公さまだ。そして一人はお前の大切な先生治國別さまだ。座を下つて挨拶をせないか、エ、ーン、いつの間に夫れ程出世したのだ」

「宣傳使はますますニコニコと笑つてゐる。」

「これはこれは木花姫命様、よくもマア私如き者の徒弟となり、化相の術を以て今迄此愚鈍な治國別をよくもお導き下さいました。有難く感謝致します」

「宣傳使は始めて口を開き、

「治國別様、龍公様、失禮を致しました。併し私は月の大神の御側に仕へまつる言靈別命でムいます。此度大神の命に依り、地上に降り、五三公の精靈を充たし神國成就の爲に、貴方と共に活動をしてゐた者でムいます。夫れ故私と五三公とは全く別個の人間です。併しながら私の神格の全部が、五三公の精靈をみたしたる爲、面貌までが能く似てゐるのでせう。今後に於ても時々五三公の精靈に下り、

地上ちじやうに天國てんごくを建設けんせつする爲ため、化相けさうを以て活動くわつどうを致いたしますれば、五三公いそこうはヤハリ貴方あなたの徒弟とていとしてお使つかひを願ねがひます」

治國別はるくにわけは此物語このものがたりに打驚うちおどろき、

「ハイ」

と言いつたきり、神かみの恵めぐみの廣大無邊くわうだいむへんなるに感謝かんしゃの涙なみだをこぼしてゐる。

龍公たつこう「モシ宣傳使様せんでんしさま……否言靈別命様いなことたまわけのみことさま、私が現界げんかいへ歸かへりました時は、五三公いそこうさま

に對たいし、今迄いままでの通りとほの交際かうさい振ぶりをやつて居をればいいのですか、之これを伺うかがつておかねば、

今後こんごの都合つがふがムいますからなア」

「化相けさうを以て現あらはるれば、ヤハリ五三公いそこうです。従前じゆうぜんの通りとほ交際かうさいを願ねがひます」

「ヤ、五三公いそこう、承知しょうちした。お前まへがこんな偉えらい者ものになることを思おもへば、俺おれだつてヤ

ツパリ友達ともだちだ。何程なにほど智慧證覺ちゑしよつかくがあるといつても、現界げんかいへ出でれば、俺おれとチーと偉えらい

か、少し劣すこつた位くらゐなものだ。俺おれが一升いっしやうでお前まへが九合くがふか、お前まへが一升いっしやうで俺おれが九合くがふか

位くらゐなものだ。なア五三公いそこう、さうだらう」

言靈別ことたまわけはパツと上衣うはぎを脱ぬいだ。忽たちまち現界げんかいで見たみた五三公いそこうと、風體ふうていまで變かはらないや

うになり、言葉もなれなれしくなつて来た。

「天國の法衣をぬいで、暫く氣樂に又お前と天國の旅行をしようぢやないか。治國別の先生、これから五三公が第二天國は云ふも更也、第一天國まで御案内を致しませう」

「何卒宜しく御願致します」

「コレ先生、融通の利かぬ人だな。ヨシ五三公、お供を許すと何故仰有らぬのだ。なア五三公、さうぢやないか」

「ウン、化の皮をぬいだら、ヤツパリ元の五三公だ。ヤア珍彦様、珍姫様、有難うムいました。之から天國の巡覽を致しますから、之でお別れ致しませう」

珍彦夫婦は意外の此問答に呆れ果て、默然として三人の顔を見つめてゐる。二人の宣傳使の侍者はどこへ行つたか、影も形も見えなくなつて居た。

茲に治國別は五三公、龍公を伴ひ珍彦、珍姫に厚く禮を述べ、宣傳歌を歌ひながら、五三公の案内につれて、南方さして進み行く。

(大正一二・一・一〇 舊一一・一一・二四 松村眞澄録)



## 第二〇章 間接内流（一二五三）

高天原の天界を区分して天國、靈國の二となす事は前に述べた通りである。概して云へば日の國即ち天國は人身に譬ふれば心臓及び全身にして心臓に屬すべき、一切のものと相應して居る。又月の國即ち靈國は其肺臓及び全身にして肺臓に屬すべき一切の諸機關と相應してゐる。さうして心臓と肺臓とは小宇宙、小天地に譬ふべき人間に於ける二つの國土である。心臓は動脈、靜脈により、肺臓は神經と運動纖維によりて、人の肉體中に主治者となり、力の發する所、動作する所、必ずや右兩者の協力を認めずと云ふ事はない。各人の内分、即ち人の靈的人格をなせる靈界の中にも亦二國土があつて、一を意思の國と云ひ一を智性の國と云ふ。意思是善に對する情動より、智性は眞に對する情動によつて人身内分の二國土を統治してゐるのである。之等の二國土は又肉體中の肺臓、心臓の二國土とに相應してゐる。故に心臓は天國であり意思の國に相應し、肺臓は靈國であり智性の國と相應するものである。

高天原に於ても亦以上の如き相應がある。天國は即ち高天原の意力にして、愛の徳之を統御し、靈國は高天原の智力にして信の徳之を統御する事になつてゐる。故に天國と靈國との關係は人に於ける心臓と肺臓との關係に全く相應してゐるものである。聖言に心臓を以て意を示し、又愛の徳を示し、肺臓の呼吸を以て智及信の眞を示すは此相應によるからである。又情動なるものは心臓中にもあらず、心臓より來らざれども、之を心臓に歸するは相應の理に基く爲である。高天原の以上二國土と心臓及肺臓との相應は高天原と人間との間に於ける一般的相應である。さうして人身の各肢體及各機關及内臓等に對しては、斯の如く一般的ならざる相應があるのである。

今茲に高天原の全體を巨人に譬へて説明する事としよう。巨人即ち天界の頭部に居るものは愛、平和、無垢、證覺、智慧の中に住し、從つて歡喜と幸福とに住するを以て天界到る所、この頭部に於ける善徳に比すべきものはない。人間の頭部及び頭部に屬する一切のものに其神徳流れ入つて之と相應するのである。故に人の頭部は高天原の最高の天國、靈國に比すべきものであ

る。

次に巨人即ち天界の胸部にあるものは仁と信との善徳中に住して、人の胸部に流れ入り、之と相應するものである。

一、巨人即ち天界に於ける腰部及生殖器機關に屬するものは、所謂夫婦の愛に住してゐる、之は第二天國の状態である。

一、脚部にあるものは、天界最劣の徳即ち自然的及靈的善徳の中に住してゐる。

一、腕と手とにあるものは、善徳の中より出で來る眞理の力に住してゐる。

一、目にあるものは智に住し、耳にあるものは注意と從順に住し、鼻口に屬するものは知覺に住してゐる。又、口と舌とに屬するものは智性と知覺とより出づる

言語の中に住し、内腎に屬するものは研究し調査し分析し訂正する處の諸々の眞理に住し、肝臟、臍臟、脾臟に屬するものは善と眞と色々に洗練するに長じてゐる。

何れも神の神格は人體中に相似せる各局部に流入して之と相應し給ふ。天界よりの内流は諸肢體の働き及用の中に入り、而して具體的結果を現するが故に、

茲に於てか相應なるものが行はれて來るものである。

一、人は智あり覺ある者を呼んで彼は頭を持つて居るとか、頭腦が緻密であるとか、よい頭だとか云つて稱へ、又仁に厚いものを呼んで彼は胸の友だとか、心が美しいとか、氣のよい人だとか、心意氣がよいとか稱へ、知覺に勝れた人を呼んで彼は鋭敏なる嗅覺を持つてゐるとか、鼻が高いとか云ひ、智慮に秀でたものを呼んで、彼の視覺は鋭いと云ひ、或は鬼の目と云ひ、強力なる人を呼んで、彼は手が長いと云ひ、或は利くと云ひ、愛と心を基として志す所を決するものを呼んで、彼の行動は心臓より出づるとか、心底から來るとか、同情心が深いとか稱へるのである。

斯の如く人間の不用意の中に使ふ言葉や諺は尚此外に何程とも限りない程あるのは、相應の理に基いて其實は嚴の御靈の神示にある通り、何事も神界よりのお言葉なる事は自覺し得らるるのである。

治國別一行は人體に於ける心臓部に相當する第二天國の最も中樞部たる處を今や巡覽の最中である。さうして天國の組織は最高天國が上中下三段に區畫され、中間天國が又上中下三段に區畫され、最下層の天國亦三段に區畫されてある。各

段の天國は個々の團體を以て構成され、愛善の徳と智慧證覺の度合の如何によりて幾百ともなく個々分立し、到底之を明瞭に計算する事は出来ないのである。又靈國も同様に區畫され、信と智の善徳や智慧證覺の度合によつて靈國が三段に大別され、又個々分立して數へ盡せない程の團體が作られてゐる。さうして又一個の團體の中にも愛と信と智慧證覺の度の如何によつて或は中央に座を占め、或は外邊に居を占め、決して一様ではない。斯くの如く天人の愛信と證覺の上に變移あるは、所謂勝者は劣者を導き、劣者は勝者に従ふ天然律が惟神的に出來てゐるがために、各人皆其分度に應じて安んじ、少しも不安や怨恨や不満足等の起る事なく、極めて平和の生涯を送り居るものである。

さて三人は、とある美はしき丘陵の上に着いた。天日晃々として輝き渡り、被面布を通して其靈光は厳しく放射し、治國別は殆ど目も眩むばかりになつて來た。龍公も稍身體の各部に苦悶を兆して來た。五三公は依然として被面布も被らず此處迄進んで來たのである。

五三「皆さま、大變に御疲勞の様ですから、此處で山野の景色を眺めて、暫く休

養やうさして頂いたきませうか」

治はる國くに「ハイ、さう致いたしませう。何なんだか神かみ様さまの靈れい光くわうにうたれて苦くるしくなつて參まりま  
した」

龍たつ公こう「ヤア私わたしも何なんとなしに苦く痛つうを感じかんじます。ラジオシンターでもあれば、一いっ杯ぱい飲の  
みたいものですな」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ラジオシンターは貴あ方なた等がたの樣やうな壯さう健けんな肉にく體たいの飲のむものぢやありま  
せぬ。あの藥くすりは人じん體たいの組そ織しきを害がいしますからな。然しかしながら九きう死し一いつ生しやうの病び人やうには、

とつたか、みたかですから宜よいでせう。あの藥くすりは靈れい國こくより地ち上じやうに下くだる靈れい藥やくであつ  
て、之これを服ふく用ようすれば未いまだ現げん界かいに生いきて働はたらくべき人じん間げんは速すみかに元げん氣き恢わい復ふくし、又また靈れい界かい

に來きたるべき運うん命めいにある人じん間げんが服ふく用ようすれば、斷だん末まつ魔まの苦く痛つうを逃のがれ、樂らく々らくと靈れい肉にく脱だつ離り  
の苦くるしみを助たすくるものです。さうだから、あれは靈れい藥やくと云いつて靈れい國こくから下くだるもの

です」  
龍たつ公こう「靈れい體たい分ぶん離りの時とき、地ぢ獄ごくにおつる精せい靈れいは虚こ空くうを掴つかみ泡あわを吹ふき、或あるは暗あん黒こく色しよくにな

り、非ひ常じやうな苦く悶もんをするものですが、その樣やうな精せい靈れいでも矢や張はり樂らくに靈れい肉にく脱だつ離りの難なん境きやう

を越えられますか」

「さうです。地獄へ直接落下すべき悪霊は此靈藥の力によつて肉體より逸早く逃走するが故に、後には善靈即ち正守護神のみが残り、安々と脱離の境を渡り得るのです。靈國に於ては之を以て靈丹と云ふ藥を作ります。治國別様や貴方が、第二天國の入口に於て木花姫命よりお頂きになつた靈藥は即ちそれです。靈に充ちてゐる藥だから、靈充と云ふのです。これを地上の人間は、ラヂウムと稱へて居るのですが、語源は、つまり一つですからな」

治國「ラジオシンターは止めにして、それならもう一度靈丹が頂き度いものですな」

「先生、自分の苦痛を藥によつて治さうなどと云ふ想念が起りますと、神様のお道に對し所謂冷淡（靈丹）になりやしませぬか。それよりも天國は愛の熱によつて充たされてゐるのですから、大神直接の内流たる愛の熱を頂く様に願つたら如何でせう。私は最早靈丹の必要もない様に思ひますが……」

「さうだな、一か八かの時に用ふる靈藥だから、さう濫用するのは勿體ない。そ

れよりも尊い神様の愛の熱を頂く事に致しませう。あゝ惟神靈幸倍坐世かむながらたまちはへませ」

「治國別さま、如何です、もうお疲れは直りましたか」

「ハイ、御神徳によつて、甦つた様です」

龍公「それ御覽、惟神靈幸倍坐世と今仰有つたでせう。其御神文の方が靈充より

も、靈丹よりも效能が顯著でせう」

「ハイ、有難うございました」

大神は斯くの如くにして第三者の口をかり、第二者たる治國別に諸々の眞理を

悟させ給うたのである。

凡て人を教ふる身は、其人直接に云つては聞かないものである。人間と云ふも

のは自尊心や自負心が強いものであるから、直接其人間に對して教説らしき事を

云へば、其人間は「へん其位の事はお前に聞かなくとも俺は知つてゐる。馬鹿々々

しい」と、テンデ耳に入れぬものである。故に第二者に直接教説すべき所を第三

者たる傍人に問答を發し、其第三者の口より談話的に話さしめて之を第二者の耳

に知覺に流入せしむる方が餘程效驗のあるものである。故に神界に於ても時々第



一者と第三者が問答をなし、是非聞かしてやらねばならぬ第二者に對して間接に  
教示を垂れ給ふ事が往々あるのである。今茲に大神は五三公、龍公の兩人をして  
問答をなさしめ、治國別の心靈に耳を通して諭さしめたのである。

先生、大變な立派な日輪様がお上りになりましたな。吾々の日々拜する日輪様  
とは非常にお姿も大きく光も強いぢやありませんか。

さうだなア、吾々の現界で見る日輪様は、人間の邪氣がこつて中空にさまよう  
てゐるから、其爲めに御光が薄らいで居るのだらう。天國へ來ると清淨無垢だか  
ら、日輪様も立派に拜めるのだらうよ。

それでも吾々の拜む日輪様とは何だか様子が違ふぢやありませんか。もし五三  
公さま、如何でせう。

天國に於ては大神様が日輪様となつて現はれ給ひます。地上の現界に於て見る  
太陽は所謂自然界の太陽であつて、天國の太陽に比ぶれば非常に暗いものですよ。  
自然界の太陽より來るものは凡て自愛と世間愛に充ち、天國の太陽より來る光は  
愛善の光ですから雲泥の相違がありますよ。又靈國に於ては大神様は月様とお現

はれになります。大神様に變りはなけれども、天人共の愛と信と證覺の如何によつて、或は太陽と現はれ給ひ或は月と現はれ給ふのです」

龍公「やはり天國にても日輪様は東からお上りになるのでせうな」

「地上の世界に於ては日輪様が上りきられた最も高い處を南と云ひ、正に之に反して地下にある所を北となし、日輪様が晝夜の平分線に上る所を東となし、其没する所を西となす事は貴方等の御存じの通りです。斯くの如く現界に於ては一切の方位を南から定めますけれども、高天原に於ては大神様が日輪様と現はれ給ふ處を東となし、之に對するを西となし、それから高天原の右の方を南となし、左の方を北とするのです。さうして天界の天人は何れの處に其顔と體軀とを轉向するとともに、皆日月に向つて居るのです。其日月に向うた處を東と云ふのです。故に高天原の方位は皆東より定まります。何故なれば、一切のものの生命の源泉は、日輪様たる大神様より來る故である。故に天界にては、嚴の御魂、瑞の御魂をお東様と呼んでゐます」

治國「尊き嚴の御魂、瑞の御魂の大神様、愚昧なる吾々を教導せむが爲に、五三

公、龍公の口を通し、間接内流を以て吾々にお示し下さいました其御高恩を、有難く感謝致します。あゝ惟神靈幸倍坐世惟神靈幸倍坐世  
（大正一二・一・一〇 舊一一・一一・二四 北村隆光録）

## 第二章 跋文（一二五四）

### その一

一、現代人は靈界一切の事物と、人間一切の事物との間に一種の相應あることを知らず、又相應の何たるを知るものがない。かかる無智の原因には種々あれども、其重なるものは「我」と世間とに執着して自ら靈界殊に天界より遠ざかれるに由るものである。何事をも差し置きて吾と世間とを愛するものは只外的感覺を喜ばし、自己の所欲を遂げしむる所の世間的な事物にのみ留意して、曾てその外を顧み

ず、即ち内的感覺を樂まし心靈を喜ばしむる所の靈的事物に至つては彼等の關心せざる所である。彼等が之を斥くる口實に曰く、「靈的事物は餘り高きに過ぎて思想の對境となる能はず」云々。されど古の人なる宣傳使や信者たりしものは、之に反して相應に關する知識を以て一切知識中の最も重要なものとなし、之に由りて智慧と證覺を得たものである。故に三五教の信者は何れも天界との交通の途を開きて相應の理を知得し、天人の知識を得たものである。即ち天的人間であつた太古の人民は相應の理に基いて思索する事尚天人の如くであつた。之故に古の人は天人と相語るを得たり、又屢主神をも相見るを得て、其教を直接に受けたものも澤山にある。三五教の宣傳使なぞは主の神の直接の教を受けてその心魂を研き、之を天下に宣傳したる次第は此靈界物語を見るも明白である。現代の宣傳使に至つては此知識全く絶滅し、相應の理の何たるかを知るものは宗教各團體を通じて一人も無いと謂つても可い位である。相應の何たるかを知らずしては、靈界に就いて明白なる知識を有するを得ない。斯く靈界の事物に無智なる人間は、又靈界より自然界にする内流の何物たるを知る事は出来ない。又靈界の自然

的(き)事物(じぶつ)に對(たい)する關係(くわんけい)をすら知(し)る事(こと)が出來(でき)ない。又(また)靈魂(れいこん)と稱(しょう)する人間(にんげん)の心靈(しんれい)が其(その)身體(たい)に及(およ)ばす所(ところ)の活動(くわつどう)や、死後(しご)に於(お)ける人間(にんげん)の情態(じやうたい)に關(くわん)して毫(がう)も明(めい)白(はく)なる思想(しさう)を有(いう)する事能(ことあた)はず、故(ゆゑ)に今(いま)何(なに)をか相(さう)應(おう)と云(い)ひ、如(い)何(か)なるもの(もの)を相(さう)應(おう)と爲(な)すかを説(と)く必(ひつ)要(えう)があると思(おも)ふ。

抑(そも)全(ぜん)自然(ぜん)界(かい)は之(これ)を總(そう)體(たい)の上(う)から見(み)ても、分(ぶん)體(たい)の上(う)から見(み)ても、悉(ことごと)く靈(れい)界(かい)と相(さう)應(おう)がある。故(ゆゑ)に何(なに)事(こと)たりとも自(し)然(ぜん)界(かい)にあつて其(その)存(ぞん)在(ざい)の源(げん)泉(せん)を靈(れい)界(かい)に取(と)るものは之(これ)を名(な)づけて、其(その)相(さう)應(おう)者(しゃ)と云(い)ふのである。そして自(し)然(ぜん)界(かい)の存(ぞん)在(ざい)し永(えい)續(ぞく)する所以(ゆゑん)は靈(れい)界(かい)によること、猶(なほ)結(けつ)果(くわ)が有(いう)力(りき)因(いん)によりて存(ぞん)在(ざい)するが如(ごと)きを知(し)るべきである。自(し)然(ぜん)界(かい)とは太陽(たいやう)の下(もと)にありて之(これ)より熱(ねつ)と光(ひかり)を受(う)くる一切(いっさい)の事(じ)物(ぶつ)を謂(い)ふものなるが故(ゆゑ)に、之(これ)に由(よ)りて存(ぞん)在(ざい)を繼(けい)續(ぞく)するものは、一(いつ)として自(し)然(ぜん)界(かい)に屬(ぞく)せないものはない。されど靈(れい)界(かい)とは天(てん)界(かい)の事(こと)であり、靈(れい)界(かい)に屬(ぞく)するものは、皆(みな)天(てん)界(かい)にあるものである。人間(にんげん)は一(いち)小(せう)天(てん)界(かい)にして又(また)一(いち)小(せう)世(せ)界(かい)である。而(しか)して共(とも)に其(その)至(し)大(だい)なるもの(もの)の形(けい)式(しき)を模(も)して成(な)るが故(ゆゑ)に、人間(にんげん)の中(うち)に自(し)然(ぜん)界(かい)もあ(あ)り靈(れい)界(かい)もあ(あ)るものである。その心(しん)性(せい)に屬(ぞく)して、智(ち)と意(い)とに關(くわん)する内(ない)分(ぶん)は靈(れい)界(かい)を作(つく)り、その肉(にく)體(たい)に屬(ぞく)して感(かん)覺(かく)と動(どう)作(さ)とに關(くわん)す

る外分は自然界を作するのである。故に自然界に在るもの即ち彼の肉體及びその感覺と動作とに屬するものにして、その存在の源泉を彼が靈界に有する時は、即ち彼が心性及び其智力と意力とより起り來る時は、之を名づけて相應者と謂ふのである。三五教の宣傳使にして以上相應の眞理を知悉せざりしものは只の一人も無かつたのは、實に主の神の神格を充分に認識し得た爲であります。願はくは此物語に心を潛めて神の大御心のある所を會得し且つ相應の眞理を覺り、現界に於ては萬民を善道に救ひ、死後は必ず天界に上り天人の班に相伍して神業に参加せられむことを希望いたします。

## その二

一、主神の國土は目的の國土である。目的とは用そのものである。故に主神の國土を稱して用の國土と云うても可なる譯である。用これ目的である。故に主神は神格の始めに宇宙を創造し、形成し給ふや、初めは天界において爲し給ひ、次は

世界に於て到る處、動作の上即ち結果の上に用を發揮せむとし給うた。種々の度を經、次第を逐うて自然界の終局點に迄も至らなければ已まない。故に自然界事物と靈界事物即ち世間と天界の相應は用に由つて成就することを知り得るのである。この兩者を和合せしむるものは即ち用である。そして此用を中に收むる所のものは形體である。此形體を相應となす即ち和合の媒介である。されど其形體にして沒交渉なる時は此の如きことなきを知るべしである。自然界にありてその三重の國土中順序に従つて存在するものは、すべて用を收めたる形體である。即ち用のため用に由つて作られたる結果である。故に斯の如き自然界中の諸物は皆相應者である。されど人間にあつては神の法則に従つて生活する限り、即ち主神に對して愛、隣人に對して仁ある限り、かれの行動は用の形態に現はれたものである。これ天界と和合する所の相應である。主神と隣人を愛するといふのは要するに用を遂ぐることである。人間なるものは自然界をして靈界に和合せしむる方便即ち和合の媒介者なることである。蓋し人間には自然界と靈界と二つのものは具はつて居るものである。人間はその靈的なることに於て和合の媒介者となるけれ

ども、若し然らずして自然的となれば此の事あるを得ないのである。さはいへ神格の内流は人間の媒介を経ずとも、絶えず世間に流れ入り、また人間内の世間的事物にも流れ入るものである。但しその理性的には入らぬものである。

凡て神の法則に従ふものは悉く天界に相應すれども、之と反するものは皆地獄と相應するものである。天界に相應するものは皆善と眞とに關係があるが、地獄と相應するものは偽りと罪惡に交渉せないものは無いのである。

靈界は諸々の相應に由つて自然界と和合するが故に、人は諸々の相應によつて天界と交通することを得るものである。在天の天人は人間の如く自然的事物によつて思索せない。人間にして、もし諸相應の知識に住する時は、その心の上にある思想より見て、天人と相伍するものとなすべく、かくして其靈的、内的人格に於て天人と和合せるものである。

地上に於ける最太古の人間は即ち天的人間であつて、相應そのものに由つて思索し彼等の眼前に横たはれる世間の自然的事物は、彼等天的人間が思索をなす所の方便に過ぎなかつたのである。太古の人間は天人と互に相交はり相語り、天界



と世間との和合は彼等を通して成就したのである。これの時代を黄金時代と謂ふのである。次に天界の住民は地上の人間と共に居り人間と交はること朋侶の如くであつた。されど最早此時代の人間は相應そのものより思索せずして、相應の知識よりせるに由つて、尚天と人との和合はあつたけれども、以前の様には親密でなかつた。この時代を白銀時代と曰ふ。又この白銀時代を繼いだものは相應は知らぬにはあらざれども、其思索は相應の知識に由らなかつた。故に彼等がをる所の善徳なるものは自然的のものであつて、前時代の人の如く靈的たることを得なかつた。これを赤銅時代と曰つたのである。この時代以後は人間は次第々々に外的となり、遂に肉體的となり了へ、従つて相應の知識なるもの全く地に墜ちて天界の知識悉く亡び、靈界に關する數多の事項も追々と會得し難くなつたのである。又黄金は相應に由つて天國の善を表はし、最太古の人の居りし境遇である。又白銀は靈國の善を表はし中古の人の居りし境遇であつた。赤銅は自然界の善を表はし古の人の居りし境遇である。更に下つて、黒鐵時代を現出した。黒鐵なるものは冷酷なる眞を表はし、善はこれに居らない時代である。之を思ふに現今の時代

は全く黒鐵時代を過ぎて泥土世界と墮落し、善も眞も其影を没して了つた暗黒無明の地獄である。國祖の神は斯の如き慘澹たる世界をして松の代、三五の代、天國の代に復活せしめむとして不斷的愛善と信眞の爲に御活動を遊ばし給ひつつあることを思へば、吾々は安閑としてこの現代を看過することは出来ないのである。天下國家を憂ふるの士は、一日も早く神の教に眼を醒まし、善の爲に善を勵み、眞の爲に眞を光して、空前絶後の大神業に参加されむことを希望する次第であります。

あゝ惟神靈幸倍坐世

(因に爰に主神とあるは、太元神を指したのであります)

(大正一二・一・一〇 舊一一・一一・二四 加藤明子録)

~~~~~

靈界物語 第四七卷 舍身活躍 戌の巻

終り